

高知県香美郡

曾我遺跡発掘調査報告書

SO GA

(野市町埋蔵文化財調査報告書第2集)



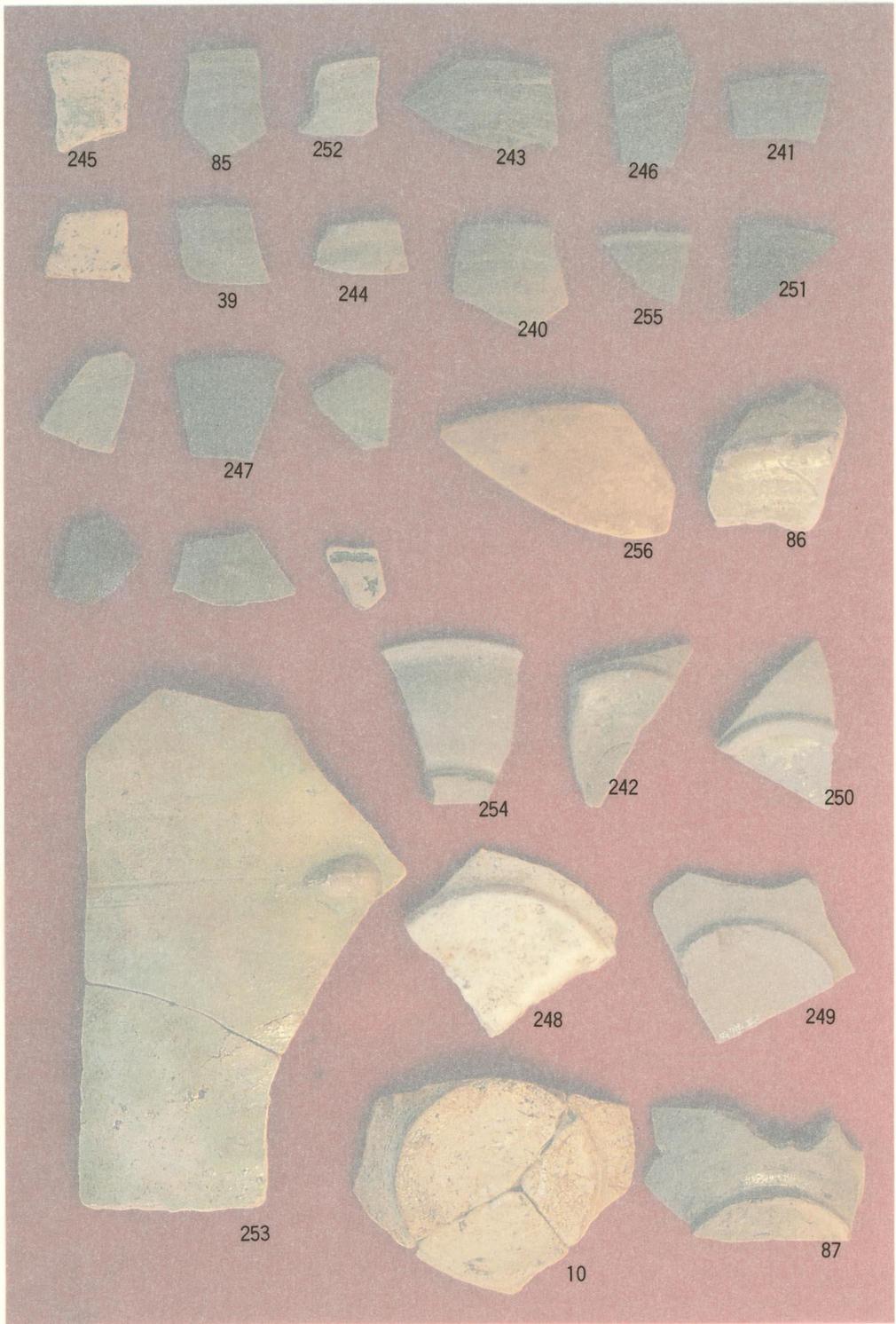
野市町教育委員会

1989

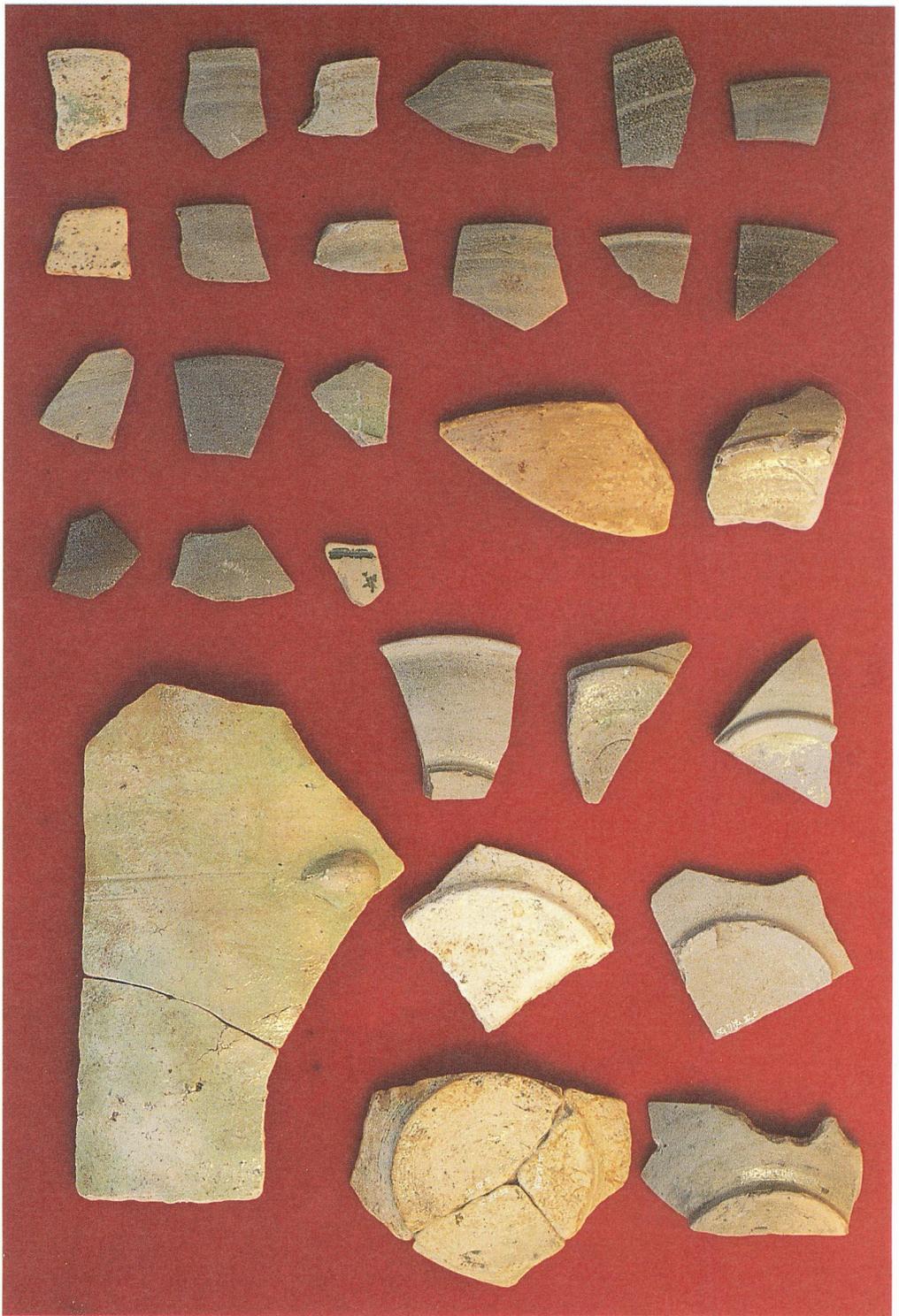
曾我遺跡発掘調査報告書

SO GA

(野市町埋蔵文化財調査報告書第2集)



出土綠釉陶器





墨書土器



円面硯

序

野市町^{そが}曾我地区は、高知市から東へ16kmの高知県三大河川の1つである物部川を渡り、香我美町と境を接する位置にあり、温暖な気候と水利に恵まれた水田地帯です。この地域は農業の近代化、合理化を図るために昭和62年度中ノ村高生産性水田農業確立緊急対策事業が実施されることになり理蔵文化財への影響を受ける曾我遺跡の範囲について緊急発掘調査を行いました。この発掘調査の結果、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であり、平安時代における官衙遺跡として位置づけられました。この遺跡は低湿地遺跡であり、その特徴として付札状木製品などの木製品が腐らずに出土しました。この附近には、香我美町の十万遺跡があり、これらの遺跡とのかかわりなど土佐の古代史を解明する上でも、地方支配の実態を解明する上でも貴重な意味を持つものと思われます。

本書は、その発掘調査の成果をまとめたものです。今後広く一般に活用され文化財保護及び学術研究等に大いに役立てられるものと期待しております。

今回この調査にあたってご指導をいただきました高知県教育委員会、なかんずく高橋啓明、吉原達生の各先生方をはじめ岡本健児先生並びに調査にご協力を頂いた地権者、地元関係者の皆様に心から感謝とお礼を申し上げます。

平成元年3月

野市町教育長 村山 正夫

例 言

1. 本書は、野市町中ノ村高生産性水田農業確立緊急対策事業にかかわる^{もが}曾我遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、高知県野市町中ノ村曾我に所在する。本遺跡から東を東曾我遺跡とかつては呼称していたが、遺跡の範囲が広範なことが確認され、本遺跡を含めて今後曾我遺跡と呼称することとする。
3. 調査対象面積は10,000m²であり、調査面積は約1,000m²である。
4. 調査は、野市町教育委員会の依頼により、高知県教育委員会が行った。
調査顧問 岡本 健児 (高知県文化財保護審議会会長)
調査員 高橋 啓明 (高知県教育委員会・文化振興課・社会教育主事)
調査員 吉原 達生 (高知県教育委員会・文化振興課・主事)
事務担当 田中 彰裕 (野市町教育委員会・社会教育課・主事)
5. 本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅳ・Ⅶ・Ⅷ章を高橋、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ章を吉原が分担した。
6. 遺構については、S B (掘立柱建物・据柱礎石建物)・S K (土坑)・S X (性格不明遺構)・S D (溝)・S A (柵列)・P (柱穴)で標示した。
7. 執筆にあたっては、奈良国立文化財研究所山中敏史氏、緑釉陶器の鑑定は京都市埋蔵文化財研究所平尾政幸氏、白滋の鑑定は奈良国立文化財研究所巽淳一郎氏、昆虫遺体については高知県文化財保護審議会委員中山紘一氏に御教示を得た。記して深く謝意を表したい。
8. 調査にあたっては、地元土地改良区、野市町産業振興課の全面的な協力を得た。記して深く謝意を表したい。
9. 測量では、小松幹典氏の協力を得た。記して深く謝意を表したい。
10. 遺物は野市町教育委員会 で保管している。

本文目次

第Ⅰ章 発掘調査に至る経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
第Ⅲ章 調査区の概要と調査の方法	9
1. 調査区の概要	9
2. 調査の方法	9
第Ⅳ章 1・2区の調査	10
1. 基本層序	10
2. 包含層出土の遺物	10
3. 遺構	11
第Ⅴ章 3・4区の調査	16
1. 基本層序	16
2. 包含層出土の遺物	16
3. 遺構と遺物	17
第Ⅵ章 5区の調査	23
1. 基本層序	23
2. 包含層出土の遺物	23
3. 遺構と遺物	26
第Ⅶ章 6・7区の調査	29
1. 基本層序	29
2. 包含層出土の遺物	29
3. 遺構と遺物	33
第Ⅷ章 総括	57
1. 遺物を中心に	57
2. 遺構について	63

図 版 目 次

Fig 1	G 5 平面実測図及びセクション図	1
Fig 2	周辺の遺跡分布図	2
Fig 3	発掘調査区位置図	4
Fig 4	トレンチセクション位置図	9
Fig 5	セクション図	5
Fig 6	遺構全体図	7
Fig 7	1～2区包含層出土遺物実測図	12
Fig 8	SA 6・7, SK 1～3, SD 1～3, SX 1・2 実測図	15
Fig 9	3～5区包含層出土遺物実測図	21
Fig 10	SB 10, SA 4・5, SD 4～18, SX 3 実測図	22
Fig 11	5区包含層出土遺物実測図	25
Fig 12	SB 10, SK 4・5, SD 6・7・7', P 3, P 46 出土遺物実測図	28
Fig 13	6～7区包含層出土遺物実測図	31
Fig 14	6～7区包含層出土遺物実測図	32
Fig 15	SB 1 実測図	34
Fig 16	SB 2 実測図	37
Fig 17	SB 3 実測図	38
Fig 18	SB 4, SB 5 実測図	39
Fig 19	SB 6 実測図	41
Fig 20	SB 7, SB 8 実測図	42
Fig 21	SB 1, SB 2 柱穴断面図	43
Fig 22	SB 2・5・6・7, 6区P 7 柱穴断面図	44
Fig 23	SB 9, SA 1・2, SD 22・23 実測図	48
Fig 24	SB 1～6 出土遺物実測図	50
Fig 25	SB 6・7, SA 1・2, SD 22・23, P 7・8・17・20・23 出土遺物実測図	51
Fig 26	5区G 5 出土付札状木製品実測図	52
Fig 27	SB 2-P 6・12, SB 5-P 1 出土木器実測図	53
Fig 28	SB 1-P 8 柱根実測図	54
Fig 29	SB 1-P 5・10 柱根実測図	55
Fig 30	SB 1-P 11・12 柱根実測図	56
Fig 31	出土土器一覧	61

表 目 次

第1表	周辺の遺跡分布表	3
第2表	3区溝跡計測表	20
第3表	緑釉陶器・二彩陶器県内出土地	60
第4表	古代モモ出土柱穴	60
第5表	掘立柱建物・柵列・溝計測表	64
第6表	古代「硯」県内出土地	66
第7表	古代「墨書・刻書土器」県内出土地	66
第8表	遺物観察表（1区・2区包含層出土遺物）	68
第9表	〃（3区・4区・5区包含層出土遺物）	69
第10表	〃（5区包含層出土遺物）	70
第11表	〃（5区包含層出土遺物）	71
第12表	〃（S B 10, S K 4, S D 6・7・7', P 3, P 46, S K 5出土遺物）	72
第13表	〃（S K 5出土遺物）	73
第14表	〃（6区・7区包含層出土遺物）	74
第15表	〃（7区包含層出土遺物）	75
第16表	〃（6区・7区包含層出土遺物）	76
第17表	〃（7区包含層, S B 1出土遺物）	77
第18表	〃（S B 2・3・4・5出土遺物）	78
第19表	〃（S B 6・7, S A 1・2出土遺物）	79
第20表	〃（S D 22・23, P 7・8, P 17, P 20, P 23出土遺物）	80
第21表	〃（1区・2区・3区・6区・7区, S B 2出土緑釉陶器）	81
第22表	施釉陶器遺物観察表（包含層, S B 2出土緑釉陶器）	82
第23表	〃（S B 2・S B 6出土緑釉陶器）	83
第24表	黒色土器（表採, S B 2, S B 5出土黒色土器）	83
第25表	計測表（土錘, 砥石, 鍋脚, 石鏃）	84

写 真 目 次

P L 1	調査前全景	85
P L 2	1区・2区完掘状態	86
P L 3	S B 5の柱掘形及び1区・2区包含層遺物出土状態	87

P L 4	2区SD1・2完掘状態, 7区SB1西面検出状態	88
P L 5	3区完掘状態	89
P L 6	3区SD7・7'遺物出土状態, セクション	90
P L 7	3区SK4, SD7・7', P3, 5区包含層出遺物	91
P L 8	SB10-P3, SA4-P3・6・7, 4区東壁セクション	92
P L 9	5区完掘状態, 5区SK5検出状態	93
P L 10	5区SK5遺物出土状態, 完掘状態	94
P L 11	5区包含層及びSK5出土遺物	95
P L 12	5区SK5及び7区包含層遺物出土状態	96
P L 13	7区完掘状態	97
P L 14	SB6西面柱穴列及びSD22検出状態	98
P L 15	SB1-P5・8の検出状態	99
P L 16	SB1-P1・5, SB2-P1・10, SA1-P3検出状態	100
P L 17	SB1-P7検出状態, SB2-P12木器出土状態	101
P L 18	SB2・3・5の柱掘形	102
P L 19	SB1・7の柱掘形	103
P L 20	7区包含層出土遺物	104
P L 21	7区SB1・3・6遺物出土状態	105
P L 22	1・3~6区包含層出土遺物	106
P L 23	1・4・5・7区包含層出土遺物	107
P L 24	7区包含層出土遺物	108
P L 25	5・7区包含層出土遺物	109
P L 26	SB10, SK4・5, SD7・7', P3出土遺物	110
P L 27	SB1・2・5・6, SD23出土遺物	111
P L 28	5区包含層, SB1, P7・17・20出土遺物	112
P L 29	円面硯	113
P L 30	2・3・5・7区包含層, SB2・3出土及び表採遺物(258・260・261黒色土器), 土師器片	114
P L 31	1・5・7区包含層出土遺物(70転用硯), 瓦	115
P L 32	土師器壺・羽釜・壺	116
P L 33	SB2-P6礎板	117
P L 34	SK5板状木製品	118
P L 35	付札状木製品及び不明木製品, 土錘	119
P L 36	調査に協力された方々	120

第 I 章 発掘調査に至る経過

野市町の中ノ村高生産性水田農業確立緊急対策事業は、農業の近代化、合理化を促進する上から欠くことのできないものであり、その面積は18.9 h a に及ぶものである。

曾我地区は昭和48年に東端部で加温園芸用の井戸の掘削中に弥生土器、須恵器等が検出され東曾我遺跡として確認されていた。昭和60年に曾我地区の西端部で用水路の改修工事がなされることになり、約75㎡の本発掘調査を行った結果、古代及び中世の遺構を検出したことにより東曾我遺跡は曾我地区の北側のほとんど全てを含む範囲であることが判明した。しかし、なお県道より南は比高差が約2 mあるため遺跡としての確認がなされていなかった。当該事業計画に伴って、昭和62年9月8日から9月19日まで、遺跡の性格、範囲、遺物、遺構の深度や遺存の状況を把握する目的で試掘調査を行った。その結果、柱穴、土坑等が検出され、しかも低湿地遺跡であることも判明し、併せて木器の保存状態は非常に良好であることも知り得ることができた。

以上の経緯を踏まえて、昭和63年3月7日から5月7日までの間に埋蔵文化財の記録保存を行うことを目的として本格的な発掘調査を実施することとした。

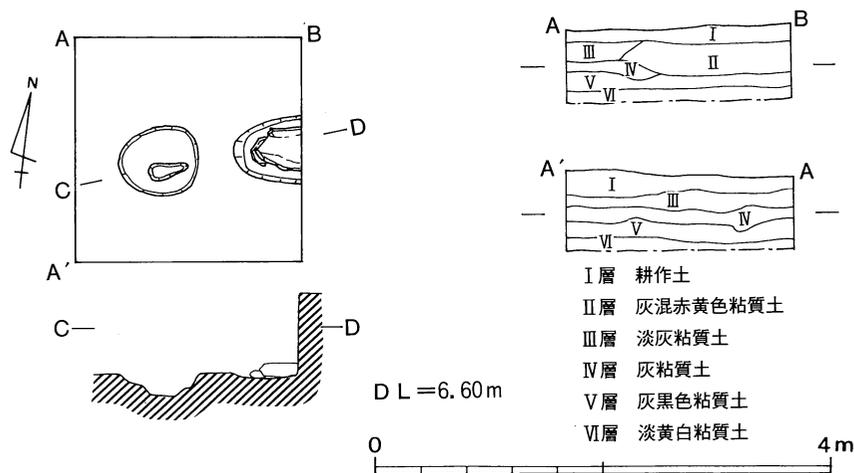


Fig 1 G 5 平面実測図及びセクション図



Fig 2 周辺の遺跡分布図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

曾我遺跡は、香美郡野市町中ノ村字曾我に所在し、高知県最大の穀倉地帯である高知平野の東部に位置する。遺跡周辺の沖積平野を形成する香宗川は、香北町（野市町から北東寄り）と境を接する記念坂付近に源を發し、途中いくつかの河谷平野を形成しながら山塊を縫うように流れ、曾我遺跡の南600mの地点で山北川と合流し、緩やかに向きを西に転じる。当遺跡は、香宗川の右岸、山北川の左岸にあり、両者に挟まれた地点に形成される自然堤防上に立地する。標高は約8mを測り、北東部（標高9～10m）に対し、比較的に低い地形を示す。山北川の流れば緩やかで用水の便は良いが、香宗川との合流地付近にある下地（曾我遺跡から南西寄り）では永年水害に悩まされた。

周辺の遺跡には、弥生時代前期末～中期の多量の木製品や自然遺物が出土した下分遠崎遺跡^{しもぶんとうざき} (1)や8～10世紀の豪族の館が検出され、石鏝も出土するなど注目を集めた十万遺跡^{じゅうまん} (2)などが挙げられる。野市町では、鉾尾、二彩陶器など官衙関連遺物が出土した深淵遺跡^{ふかぶち} (3)が同町西端に位置し、また条理遺構の可能性を持つホノギ名（中ノ坪・一ノ坪・大坪・四ノ坪など）が随所にみられる。さらに平安京大極殿、法勝寺等に佐古龜山窯^{さこかめやま}の瓦が使用されており、(4)古代における土佐と中央との関係を知る上で重要な窯跡も存す。

曾我遺跡の所在する中ノ村には『日本三代実録』貞観10年（868）閏12月21日条にみえる宗我神社が鎮座する。この神社は、もと山北川から東の曾我集落の近くにあったものを大正3年（1914）に現在地（当遺跡西側）へ移し、既在の天正神社と合祭したものである。『南路志』には、宗我神社について「中ノ村宗我郷ノ真中ナルヲ思フベシ。ココニコノ御社マシマスニヨリテ宗我ノ郷名ハ起リシナルベシ」とあって、同神社が、宗我郷⁽⁵⁾の中心的存在であったことが窺える。

★曾我遺跡

No	遺 跡 名	時 代	No	遺 跡 名	時 代	No	遺 跡 名	時 代
1	龍河洞遺跡	弥 生	19	原 遺 跡	弥生～古墳	37	大湧関町田遺跡	弥 生
2	十 万 遺 跡	縄文～近世	20	大リヨウ遺跡	奈良～平安	38	大 篠 遺 跡	〃
3	下分遠崎遺跡	弥 生	21	龜 山 窯 跡	平 安	39	五軒屋敷遺跡	弥生～古墳
4	須留田遺跡	中 世	22	父養寺古墳	古 墳	40	土佐国分寺跡	弥生～近世
5	香 宗 城 跡	〃	23	竹ノ内古墳	〃	41	土佐国府跡	〃
6	大崎山古墳	古 墳	24	大 谷 城 跡	中 世	42	比江廃寺跡	古 墳
7	笹ヶ峰遺跡	弥 生	25	下 井 遺 跡	平 安	43	植 村 城 跡	中 世
8	白岩の窯跡	平 安	26	北 地 遺 跡	弥生～平安	44	タンガン窯跡	古 墳
9	小山谷古墳	古 墳	27	深 淵 城 跡	中 世	45	田村氏西北方古墳	〃
10	鳥ヶ森城跡	中 世	28	深 淵 遺 跡	縄文～近世	46	次郎ヶ谷西古墳	〃
11	林 田 遺 跡	弥生～古墳	29	岩村土居城跡	中 世	47	久次西久保古墳	〃
12	影 山 城 跡	中 世	30	立田土居城跡	〃	48	植 田 古 墳	〃
13	雪ヶ峰城跡	中 世	31	徳弘土居城跡	〃	49	高 松 古 墳	〃
14	楠 目 遺 跡	弥生～平安	32	平 杭 遺 跡	弥 生	50	中山田古墳	〃
15	大 塚 古 墳	古 墳	33	上細工瀬遺跡		51	久 札 田 古 墳	〃
16	ひびのき遺跡	弥生～古墳	34	田村土居城跡	中 世	52	三 畠 遺 跡	弥 生
17	山 田 城 跡	中 世	35	田 村 遺 跡 群	縄文～近世	53	高知農業高校校庭遺跡	弥生～古墳
18	前 行 古 墳 群	古 墳	36	片山土居城跡	中 世			

第1表 周辺の遺跡分布表

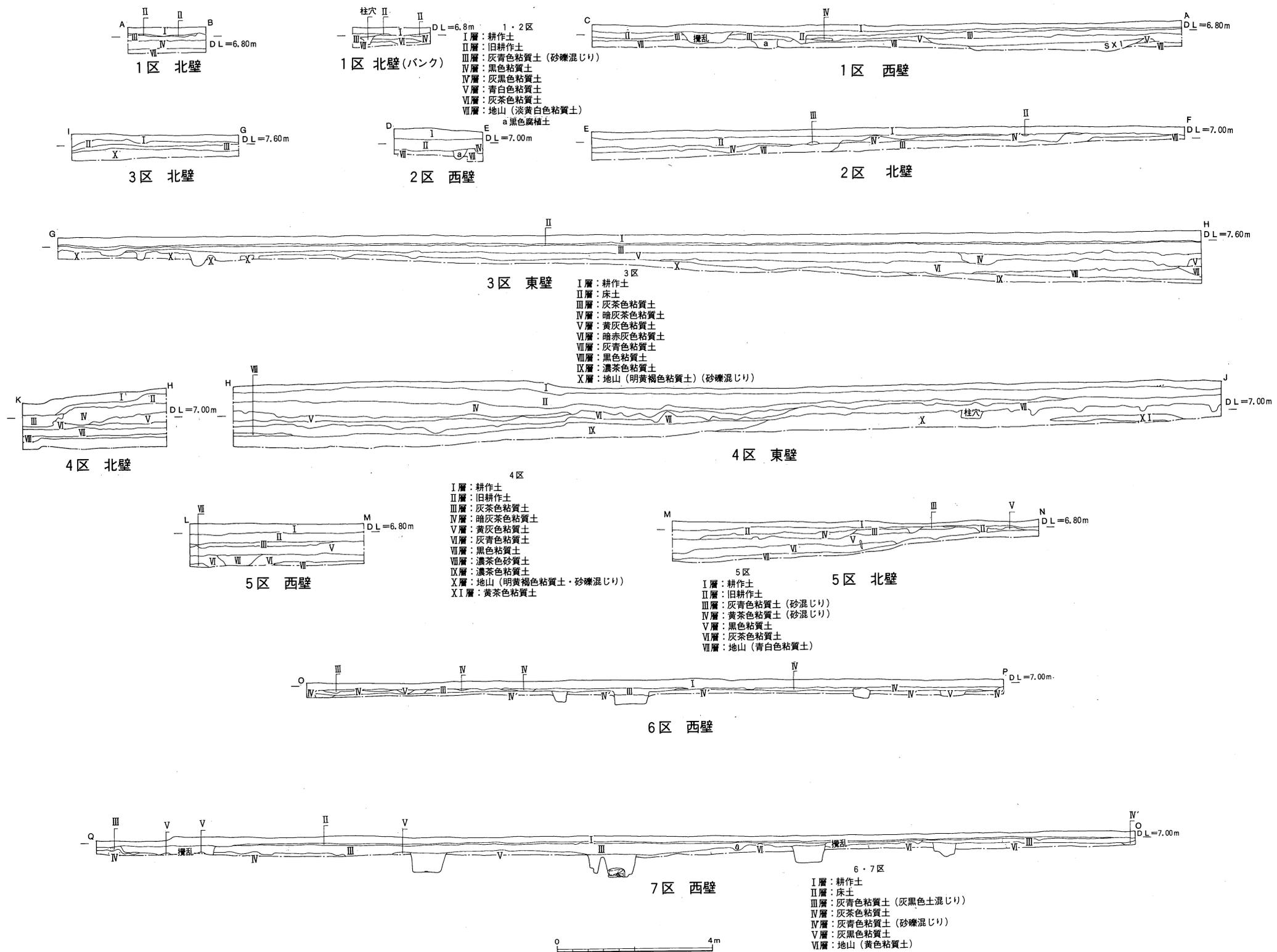
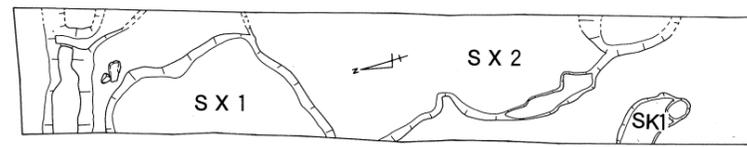
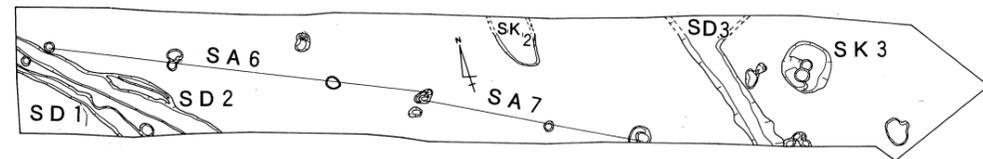


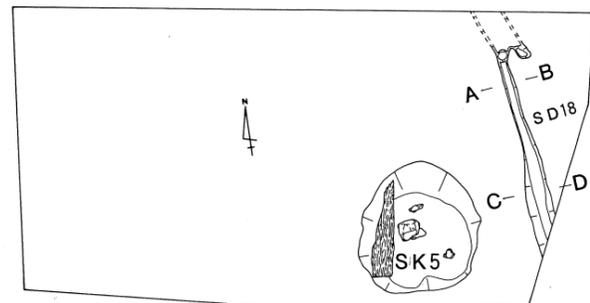
Fig 5 セクション図



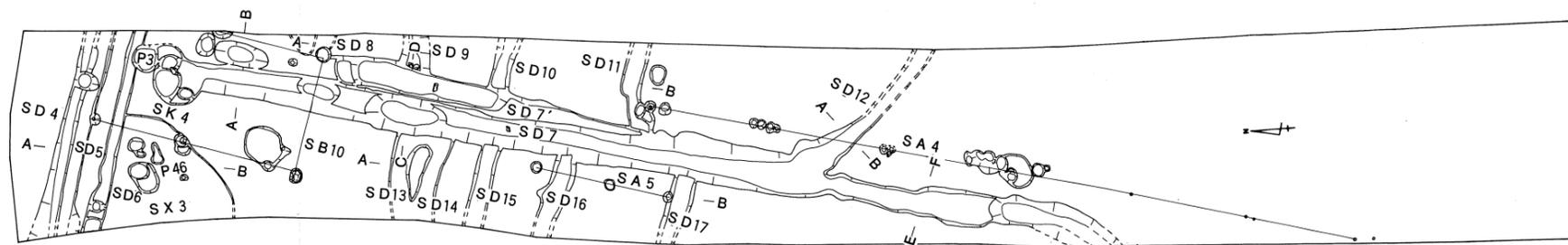
1区



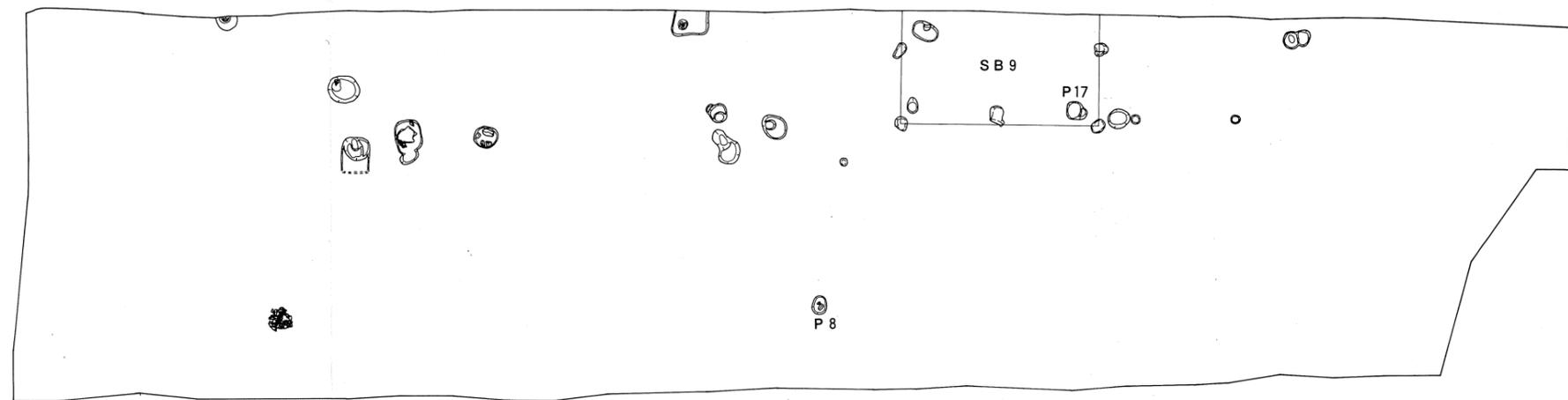
2区



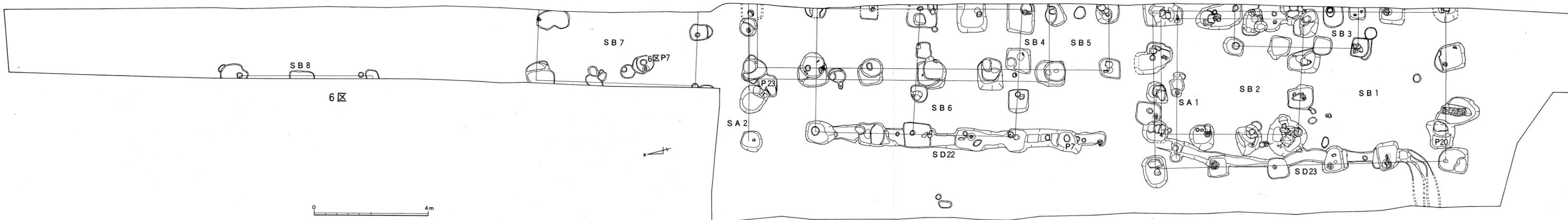
5区



3区



7区 上層



7区 下層



Fig 6 遺構全体図

第三章 調査区の概要と調査の方法

1 調査区の概要

今回の発掘調査によって検出された遺構は、掘立柱建物9棟、据柱礎石建物1棟、柵列6列、土坑5基、溝23条、性格不明遺構3基及び柱穴群である。出土遺物は、約2,300点で、量的には土師器、須恵器が大半を占めている。特に遺物は、包含層から多く検出され、遺構では5区の土坑（SK5）からまとまって検出されている。

遺構は、発掘区のほぼ全域から検出されたが、南部において、平安時代の掘立柱建物が集中していた。当遺跡の地形は、低湿地を呈し、東部から西部へ急激に落ち込んでおり、中央部西側は、沼地の如き様相を呈す。したがって調査中には、かなりの湧水を見た、一方では掘立柱建物の柱穴には生々しい柱根が比較的多く遺存しており、柱根の中には面取りが施されているものもあった。また試掘調査でのグリッドの1つ（G5）からは、礎盤とみられる石を据え置く柱穴と付札状木製品（Fig 26-272）が出土した。なお付札状木製品は、全長14.5cm、幅2.8cm、厚さ1.2~1.4cmを測る。先端部はやや尖り、先端から1.8cmのところから0.5×1.2cmの左右からの抉り痕が認められる。

当遺跡の遺構・遺物は、弥生時代から中世にかけてのものであり、この中には官衙関連とみられるものが含まれる。

2 調査の方法

発掘調査の実施にあたっては、調査予定地に2×2mの試掘グリッドを5箇所設定し、ユンボにより各グリッドの耕作土及び旧耗作土を除去した後、手掘りで遺構検出を行った。遺構が確認されたグリッドは、必要に応じて拡張し順次調査を進めた。当遺跡は低湿地を呈するゆえ湧水が溢れ、各調査地に側溝を掘り排水の措置を講じた。なお方位については、磁北方向を基準線とした。

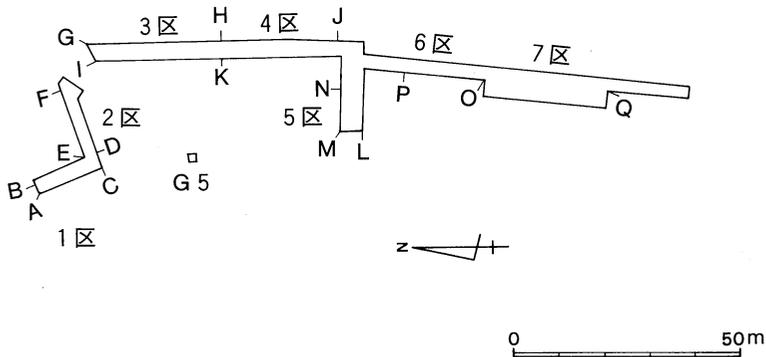


Fig 4 トレンチセクション位置図

第Ⅳ章 1・2区の調査

1 基本層序 (Fig 5)

1・2区の基本層序は、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：旧耕作土、Ⅲ層：灰青色粘質土(砂礫混じり)、Ⅳ層：黒色粘質土(腐植土混じり)、Ⅳ'層：灰黒色粘質土、Ⅴ層：青白色粘質土、Ⅵ層：灰茶色粘質土、Ⅶ層：地山(淡黄白色粘質土)である。Ⅲ層は1～4cm大の礫が混じり氾濫原であったことを考えさせる。Ⅳ層は古代から中世の遺物を含むが、2区では中央よりもやや西側で東から西に向って下向傾斜し、再び西端部では上がる。1区でも中央よりやや南側で窪むことからⅣ層は窪みに出来た堆積層と考えられ、純粋な包含層とは考えられない。Ⅴ層・Ⅵ層は部分的に見られる。地山は東から西に下向傾斜し、現地形と共通する。なお地山は1区と2区では多少異なるが便宜上統一してⅦ層とした。

2 包含層出土の遺物

遺物の大半はⅢ層で出土した。出土遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦質土器、青磁等である。特に2区では細片であるが瓦質土器が多く出土した。以下Ⅲ層、Ⅳ層出土の遺物について述べる。

(1) Ⅲ層出土の遺物 (Fig 7-1~13, 15~23)

土師器 (Fig 7-3, 5, 7, 8, 15, 19)

3～5, 7は杯である。3は外反する口縁部を持ち口唇部は丸くおさめる。5はベタ高台を有す。底部と体部との境に段を有す。内・外面共に火襻を認める。底部外面に回転糸切り痕を残す。7は内湾気味に立ちあがり、中位で僅かに凹状をなす。口縁端部は内方に肥厚し、内側に弱い段を有す。体部外面は丁寧なヘラ磨き、体部内面上半は右下り、下半は縦方向の暗文を施す。8は皿である。内湾気味に立ちあがり、口縁端部は内方に肥厚し、内側に弱い段を有す。体部外面は丁寧なヘラ磨き、体部内面は中心から放射状に暗文を施す。15は杯である。底部外周端部に断面逆三角形の高台を有す。19は羽釜である。断面台形の鏝は口縁部と平行する。

須恵器 (Fig 7-1, 2, 4, 6, 16~18)

1, 2, 16は蓋である。1の口縁部は「S」字状に屈曲する。2は口縁端部よりやや内側に断面三角形のかえりを有す。16は平坦な頂部から内湾気味に下降し口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。4, 6, 17は杯である。4, 6は外方に張り出る貼付高台を有す。4は底部外面に糸切り痕を認める。17は内湾して立ちあがり、口縁部は外反して口唇部は丸くおさめる。9は甕である。肩の張った胴部上端から頸部はやや外反気味に短かく立ちあがり、口縁部は肥厚して僅かに凹む。胴部内面に青海波文を認める。18は高杯である。脚部は一旦「ハ」の字状に下降し、下端部で水平に開く、端部は下向に摘み丸くおさめる。

緑釉陶器 (Fig 7-10)

10は皿である。ベタ高台を有す。中央部が僅かに凹む。底部外面は糸切り痕を残す。全面施

釉し、軟質である。

灰釉陶器 (Fig 7-22)

22は椀である。僅かに外方に張り出す断面逆三角形の高台を有す。高台の高さは低い。体部は底部から内湾気味に立ちあがる。内・外面共ヨコなで調整を施す。釉は内面にみられるが中央部はやや剝離する。

瓦質土器 (Fig 7-20, 21)

20は鍋である。口唇部は面をなす。口縁端部から2cm下がったところに安定した鏝を有す。胴部外面上端は横方向のなで調整, 内面は横方向のハケ調整を施す。21は鍋の脚部である。

青磁 (Fig 7-23)

23は椀である。外面は不明瞭な蓮弁を配す。釉は青濁色で厚く施されており, 高台内面まで施釉する。

土錘 (Fig 7-11)

11は円筒形を呈す。

瓦 (Fig 7-12)

12は凸面は平行叩き, 凹面の布目は細かい。

石製品 (Fig 7-13)

13は砥石である。4面共使用されている。

(2) IV層出土の遺物 (Fig 7-14, 24)

土師器 (Fig 7-14)

14は甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は強いヨコなで調整によって凹み上方に肥厚し, 口唇部は丸くおさめる。胴部外面は荒い木理のハケ原体による縦方向のハケ調整を施す。

須恵器 (Fig 7-24)

24は杯である。ベタ高台を有し, 内湾気味に立ちあがる。内面に火襷を認める。底部外面に糸切り痕を認める。

3 遺 構

1・2区の遺構は, 柵列2列, 土坑3基, 溝3条, 不明遺構2基を検出した。

柵列

S A 6 (Fig 8)

S A 6は2区のS D 2とS K 2の間に位置し, 規模は3間(6.6m)の東西方向で主軸方向はN-67°-Eを測る。柱穴の平面プランは円形を呈し, 径12.0~25.0cmを測る。これらの柱穴の検出面からの深さは4.0~13.5cmである。埋土は灰茶色粘質土単純一層である。

出土遺物は細片が少量で図示できるものはなかった。

S A 7 (Fig 8)

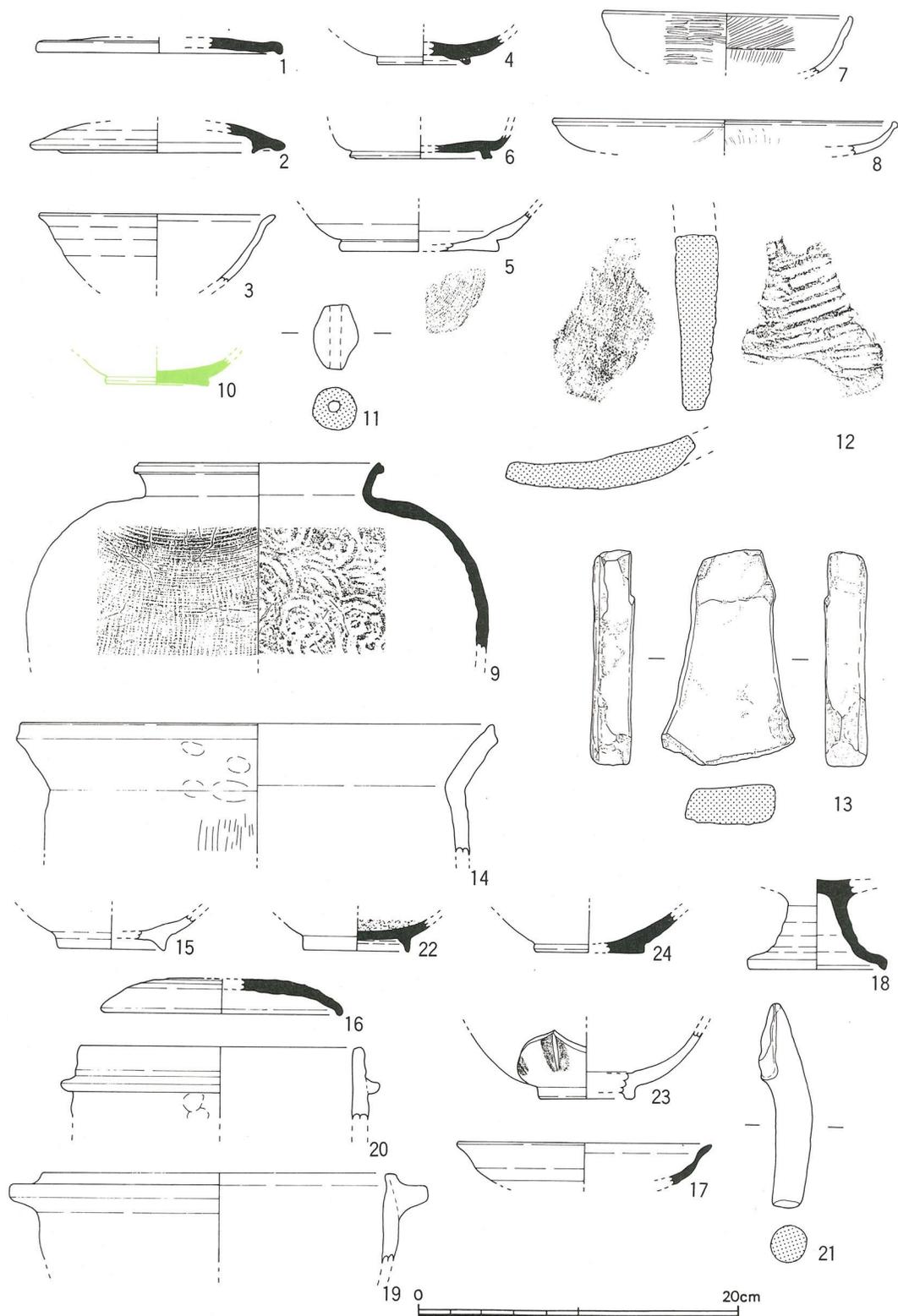


Fig 7 1~2区包含層出土遺物実測図
 (1区: III層1~9・11~13, IV層14)
 (2区: III層10・15~23, IV層24)

S K 2の南に位置し、規模は2間(3.9m)の東西方向で主軸はN-63°05'-Eを測る。柱穴の平面プランは円形を呈し、径17.0~25.0cmを測る。これらの柱穴の検出面からの深さは4.0~9.5cmである。埋土は灰茶色粘質土単層一層である。

出土遺物は細片が少量で図示できるものはなかった。

土坑

S K 1 (Fig 8)

S K 1はS X 2の南西に位置し、調査区外に出ている。平面プランは三日月状を呈すと考えられ、長径1.1m以上×短径0.67mを測る。検出面からの深さは9.0~13.0cmである。長軸方向はN-38°-Wである。壁は急傾斜で立ちあがる。床面は段状を呈す。ピットに切られている。埋土は灰茶色粘質土の単層一層である。出土遺物は存しない。

S K 2 (Fig 8)

S K 2は2区のほぼ中央の北壁に接して位置し、半分程は調査区外に出ている。平面プランは楕円形を呈すと考えられ、長径0.7m以上×短径0.58mを測る。検出面からの深さは9~12cmである。長軸方向はN-5°30'-Wである。壁は急傾斜で立ちあがる。床面は、ほぼ平らである。埋土は黒色粘質土(青礫混じり)の単層一層である。

出土遺物は土師器、須恵器の細片が少量で図示できるものはなかった。

S K 3 (Fig 8)

S K 3は2区の東端部に位置する。平面形は円形を呈し、長径0.9m×短径0.83mを測り、検出面からの深さは7~17cmである。長軸方向はN-18°-Eである。壁は急傾斜で立ちあがる。P11~13に切られる。埋土は黒色粘質土(青礫混じり)の単層一層である。

出土遺物は土師器、須恵器の細片が少量で図示できるものはなかった。

溝

S D 1 (Fig 8)

S D 1は2区の西端部、S D 2の南側にほぼ平行して位置し、両端は調査区外に出ている。規模は、長さ2.5m以上、幅約0.1~0.32m、検出面からの深さ2~5cm、断面逆台形を呈す。主軸方向はN-45°30'-Wを測る。両端の比高差はほとんど見られない。埋土は灰茶色粘質土の単層一層である。

出土遺物は土師器、瓦質土器の細片が少量で図示できるものはなかった。

S D 2 (Fig 8)

S D 2はS D 1の北側に位置し、S D 1とほぼ平行に並ぶ。両端は調査区外に出ている。規模は、長さ3.6m以上、幅約0.2~0.54m、検出面からの深さは8~9cm、断面逆台形を呈す。主軸方向はN-47°30'-Wを測る。両端の比高差はほとんど見られない。埋土は灰茶色粘質土の単層一層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器の細片が少量で図示できるものはなかった。

S D 3 (Fig 8)

S K 3の西側に位置し、北端部で北東方向に曲がるものと考えられる。両端は調査区外に出ている。規模は2.28m以上、幅約0.42~0.45m、検出面からの深さは4~8cm、断面逆台形を呈す。主軸方向はN-14°-Wを測る。両端の比高差はほとんど見られない。

出土遺物は、須恵器、瓦質土器の細片が少量で図示できるものはなかった。

性格不明遺構

S X 1 (Fig 8)

S X 1は、1区の北端部に位置し、半分程は調査区外に出ている。平面プランは隅丸方形を呈し、長径3.16m×短径2.56m以上を測り、検出面からの深さは10~25cmである。長軸方向はN-4°-Wである。壁は急傾斜で立ち上がり、東側及び南側は緩やかに立ちあがる。床面はほぼ平らである。次に紹介するS X 2を切っている。埋土は黒色腐植土(砂混じり)の単純一層である。

出土遺物は土師器の細片が少量で、図示できるものはなかった。

S X 2 (Fig 8)

S X 2はS X 1の南側に位置し、遺構の大半は調査区外である。平面プランは不整形を呈し長径5.35m以上×短径2.45m以上を測り、検出面からの深さは8~16cmである。長軸方向はN-2°-Wである。壁は急傾斜で立ちあがる。床面はほぼ平らである。S X 1に切られている。埋土は黒色腐植土(砂混じり)の単純一層である。

出土遺物は土師器の細片が少量で、図示できるものはなかった。

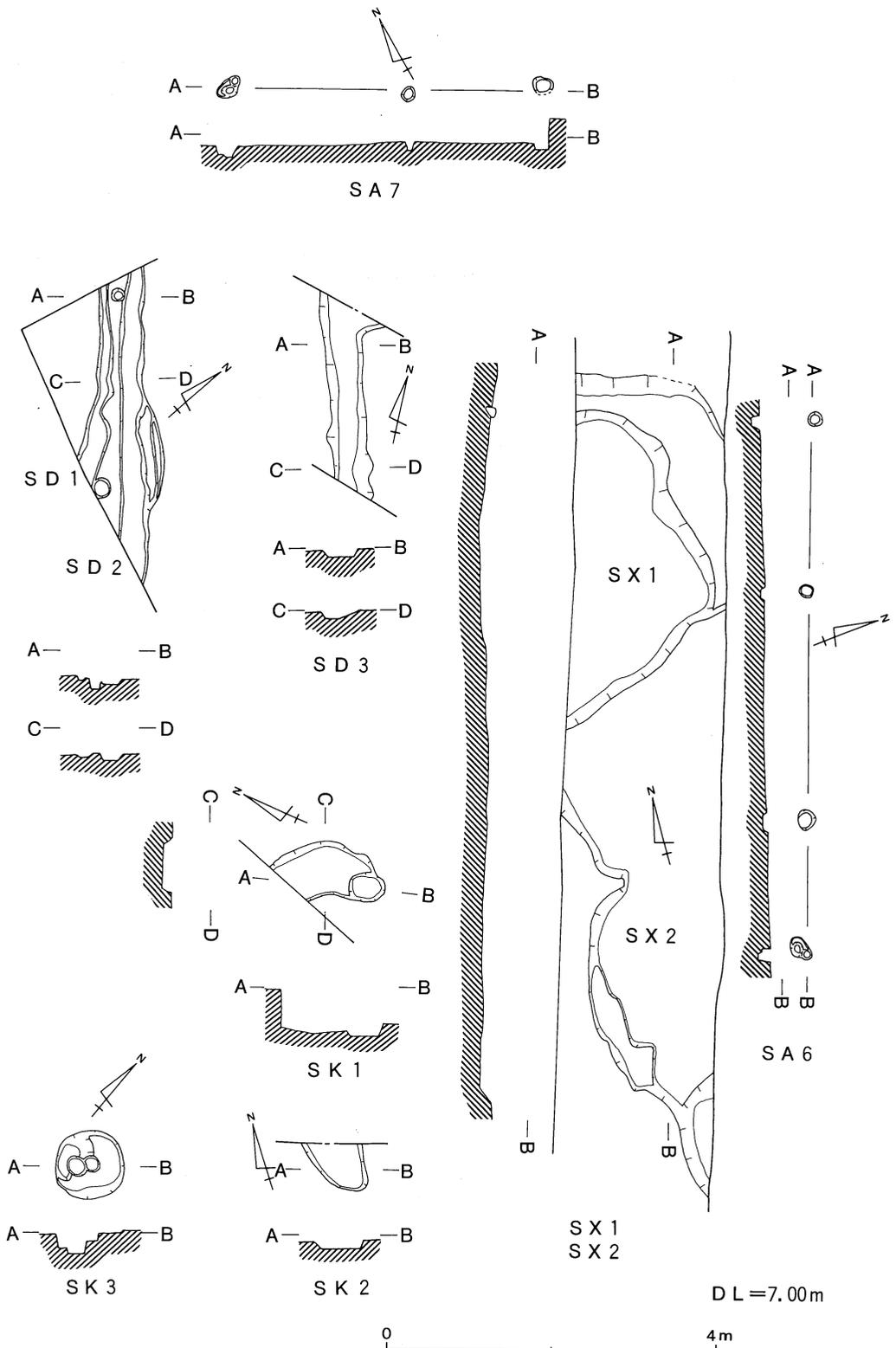


Fig 8 SA 6 · 7, SK 1 ~ 3, SD 1 ~ 3, SX 1 · 2 实测图

第V章 3・4区の調査

1 基本層序 (Fig 5)

3区の基本層序は、I層：耕作土、II層：床土、III層：灰茶色粘質土、IV層：暗灰茶色粘質土、V層：黄灰色粘質土、VI層：暗赤灰色粘質土、VII層：灰青色質土、VIII層：灰黒色粘質土、IX層：濃茶色粘質土、X層：地山（明黄褐色粘質土）である。遺構が検出されたのは、X層上面である。I層は現状の耕作土であり、約20cmを測る。II層は、I層に伴う床土であり、8～10cmを測る。III層は、北端で幅60cmの落ち込みがみられ、何らかの遺構の可能性が強い。遺物は若干出土したが、殆ど細片であり、図示できるものはなかった。IV層は、V層への漸移層であり、南部寄りで消滅する。V層は遺物包含層である。土師器、須恵器を中心とした遺物が出土している。また北部において3箇所落ち込みがあり、何らかの遺構と考えられる。VI層は、南部逝りでやや堆積が厚くなるが、中央部及び南端で消滅する。VII層は南端で僅かにみられ、急激に南へ下がっている。VIII・IX層は南部でみられ、遺物は少なく無遺物層に近い。V及びX層は、北から南へ暖やかに傾斜しており旧地形が推定できる。

4区の基本層序は、I層：耕作土、II層：旧耕作土、III層：灰茶色粘質土、IV層：暗灰茶色粘質土、V層：黄灰色粘質土、VI層：灰青色粘質土、VII層：灰黒色粘質土、VIII層：濃茶色砂質土、IX層：濃茶色粘質土、X層：地山（砂礫混じりの明黄褐色粘質土）である。4区は3区と縦に継続する調査区で、ほぼ同じ層色を示すが、層序が若干異なる。III層は、北壁の西側で僅かにみられるが、東壁では認められなかった。IV・V層は、南へその厚さが徐々に薄くなり、前者は南部で、後者は中央部で消滅する。どちらも遺物を若干含むが図示できるものはなかった。VI層は、自然地形による落ち込みがみられ、これに対しVII層は、南部で明らかに柱穴と認められる箇所がある。遺物は若干含まれていた。VIII層は、砂を多く含む自然堆積層である。IX・X層と共に遺物はなかった。

2 包含層出土の遺物

包含層出土遺物の大半は3区第V層からであり、北半部において多く出土した。遺物は、主に土師器・須恵器であり、第V層より円面硯が2点出土した。土器については、口縁及び底部等が比較的残りのよいものを選んで図示した。以下土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦質土器・製塩土器・土錘・瓦の順で述べる。

土師器 (Fig 9-3区:25~28, 4区:29~31)

25は杯で、底部から直線的に立ちあがり、体部中位で再び内側に屈曲して立ちあがる。内・外面には指頭圧痕が残る。26・27は小皿である。口縁部は外方へのび、口唇部は丸くおさまる。底部外面には回転糸切り痕がみられる。28~31は椀である。28・29は内湾気味に立ちあがり、口縁部はやや外反する。外面にはロクロによるヨコなで調整がみられる。30・31は輪高台を有し、高台脇には、30は弱い沈線があり、31は強いなでがある。30の内・外面共に炭素が付着す

る。

須恵器 (Fig 9-32~38)

32は蓋で、頂部外面にヘラ記号「×」がみられる。33・34は杯である。33は底部から丸味をもって立ちあがり、体部内・外面、内底は強いヨコなで調整を施す。また内底には、ロクロ成形で生じた凹凸が顕著である。34は高台を底部外縁に貼付し、貼付後内面に強いヨコなでを行い、三日月状を呈す。高台底部は凹状をなす。35~37は壺で、何れも外傾する高台をもつ底部であり、内・外面共に強いヨコなで調整を施す。37は自然釉が顕著である。38は椀で、ベタ高台を有し、底部外面は回転糸切りを行った後、部分的にヘラ削りを施す。

緑釉陶器 (Fig 9-39)

39は皿の口縁部である。口縁部は外反し、口唇部は丸くおさまる。内・外面共にヨコなで調整を施す。釉調は薄黄緑色を呈す。

瓦質土器 (Fig 9-40~42)

40・41は鍋で、口縁部下には凸帯を貼付する。口縁部の形態は、40が弱い段部をつくって立ちあがっているのに対し、41は外方にやや肥厚している。42は鍋の脚部である。

製塩土器 (Fig 9-43)

43の内面には布目痕があり、0.5~2mmの砂粒を多く含む。外面には指頭圧痕を残す。色調は橙色を呈す。

土錘 (Fig 9-45)

45は紡錘形に近い土錘で、重量は39.1g、孔径は0.7cmを測る。

瓦 (Fig 9-47)

47は凹凸両面にハケ調整を施す平瓦で、凹面のハケは交錯している。厚さは約3cmを測り、色調は浅黄橙色を呈す。

3 遺構と遺物

3区の遺構としては、掘立柱建物1棟、柵列2列、土坑1基、溝15条、柱穴数個、性格不明遺構1基を検出した。

掘立柱建物

S B10 (Fig 10)

3区北部に位置する。建物は、桁行2間(3.96m)×梁間1間(2.40m)の南北棟で、棟方向はN-20°30'-Eである。柱穴の平面は、ほぼ円形を呈し、長径36cm、短径20cm、柱痕径は14~24cmを測る。これらの柱穴の検出面からの深さは、14~50cmである。柱間距離は、桁行で1.78~2.16m間となっている。埋土は黄灰色粘質土の単一層である。遺物は、P2より土師器片等が出土している。時期は、出土遺物等より10世紀代と考えられる。なお建物の北東部は、調査区外ゆえ未調査である。

出土遺物 (Fig 12-89)

土師器杯で、口縁部は斜め上方へのび、僅かに外反する。底部外面はヘラ切りを行い、また粘土紐接合痕がみられる。

柵列

S A 4 (Fig 10)

3区、S D 7の東側に平行して位置する。規模は、6間(13.46m)のほぼ南北方向で、主軸方向はN-16°30'-Eである。柱穴の平面プランは、円形を呈し、径20~32cm、深さ22~34cmを測る。柱間距離は、2.10~2.34m間である。柱穴には、柱根が残存しているものもあった。出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

S A 5 (Fig 10)

3区、S D 7の西側に平行して位置する。柱穴の1つ(P 3)は、S D 17を切っている。規模は2間(2.58m)のほぼ南北方向で、主軸方向はN-18°30'-Eである。柱穴の平面プランは、ほぼ円形を呈し、径約20cm、深さ10~20cmを測る。柱間距離は、1.14~1.44m間である。出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

土坑

S K 4 (Fig 10)

3区北端に位置する。S D 7と切り合っているが、先後関係は不明である。平面プランは円形を呈し、直径94cm、短径92cm、深さ約66cmを測る。長軸方向はN-38°-Eである。埋土は黄灰色粘質土の単統一層である。遺物は、土師器、須恵器が出土した。

出土遺物 (Fig 12-90.91)

90は土師器高杯の脚部で、円柱状を呈し、外反しながら下降する。91は須恵器蓋で、口唇部を下方につまみ出し、口唇部は面をなす。

溝

S D 4 (Fig 10)

3区北端に位置する。東西方向にS D 5と平行して延びる溝で、幅28~42cm、深さ約18cm、検出長3.42cmを測る。主軸方向はN-72°-Wである。断面は逆台形を呈し、壁は急角度で上がっている。埋土は灰茶色粘質土の単統一層である。出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

S D 5 (Fig 10)

3区北端に位置する。東西方向にS D 4と平行して延びる溝で、中央部はやや時期の下る古代の住居の柱穴(S B 10-P 5)によって切られている。溝は、幅26~36cm、深さ約8cm、検出長3.42mを測る。主軸方向はN-71°-Wである。断面は浅い逆台形を呈し、壁は急角度で上がっている。埋土は灰茶色粘質土の単統一層である。出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

S D 6 (Fig 10)

3区北端に位置する。東西方向に延びる溝で、SX3を切っている。溝は、幅24~34cm、深さ約26cm、検出長3.92mを測る。主軸方向はN-71°-Wである。断面はU字形を呈し、壁は急角度で上がっている。埋土は黄灰色粘質土の単純一層である。遺物は、殆ど細片で図示できたのは須恵器1点である。時期は、出土遺物等より6世紀末~7世紀初頭と考えられる。

出土遺物 (Fig 12-92)

92は須恵器蓋で、頂部外面は回転ヘラ削り、口縁部内・外面共にヨコなで調整を施す。内面には端部から約1.1cmのところから断面三角形のかえりがある。

SD7 (Fig 10)

3区に位置し、ほぼ南北に延びる溝で、中央部は段状をなし2つの溝に分かれ、南西に向って逐次浅くなる。東側及び西側は、7条の溝(SD11~17)が枝状に交差している。また部分的に落ち込みがみられ、自然のものか、意図的に掘られたものかは不明である。溝は、幅60~84cm、深さ34~40cm、検出長18.10cmを測る。主軸方向はN-16°30'-Eである。断面はU字形を呈し、壁は傾斜して上がる。埋土は黄灰色粘質土の単純一層である。遺物は、土師器、須恵器が出土した。時期は、出土遺物等より9世紀代と考えられる。

出土遺物 (Fig 12-93~95)

何れも須恵器蓋である。93は平坦な頂部から下方へ傾斜し、口唇部は丸くおさまる。外面はロクロによるヨコなで調整を施す。94の口縁部は若干下方へ傾斜し、口唇部は内傾する面をなす。頂部外面は左方向の回転ヘラ削りが顕著である。95は口縁部の破片で、口縁端部は一旦反りあがった後、下方へつまみ出し、強いヨコなで調整を施す。

SD7' (Fig 10)

3区、SD7に平行して位置する。SD7と同様に落ち込みがみられ、東側は4条の溝(SD8~10)が枝状に交差している。SD7の中央部で徐々に細くなり消滅する。溝は、幅18~54cm、深さ26~56cm、検出長約9mを測る。主軸方向はN-18°-Eである。断面は逆台形を呈し、壁は急角度で上がっている。埋土は黄灰色粘質土の単純一層である。遺物は、土師器・須恵器が出土した。時期は、出土遺物等よりSD7と同じ9世紀代と考えられる。

出土遺物 (Fig 12-96~99)

96・97は土師器蓋である。96は口縁部破片であり、口縁端部は下方につまみ出し、ヨコなで調整を施す。口縁端部内面は段をなす。97の頂部は回転ヘラ削りを施し、体部はやや外反しながら口縁部に至る。口縁部は斜外方につまみ出し、口唇部は丸味を帯びる。体部はヨコなで調整を施す。98は土師器碗で、輪高台を有す底部から内湾して立ちあがり、高台は内傾して面をなす。白く発色し、器面は摩耗が著しく調整不明である。99は須恵器蓋で、やや平坦な頂部に擬宝珠形のつまみをもつ。口縁部は下方につまみ出しヨコなで調整を施す。口唇部は丸味を帯びる。

その他の溝 (Fig 10)

S D 8～17は、すべて3区に位置し、S D 7及びS D 7'に枝状に文差する溝で、大溝(S D 7・7')に伴う何らかの機能を果たしたものと思われる。それぞれの埋土は黄灰色粘質土の単純一層で、出土遺物はS D 16を除き皆無であった。規模等については第2表に示す通りである。

番 号	規 模 (m)			断 面 形	方 向
	幅	深 さ	検出長		
S D 8	0.34～0.40	0.10	0.40	逆台形	N-12°30'-E
S D 9	0.52～0.60	0.16	0.44	U字形	N-13°-E
S D 10	0.34～0.40	0.10	0.68	逆台形	N-13°-E
S D 11	0.26～0.40	0.04	1.30	浅い逆台形	N-13°-E
S D 12	0.30～0.78	0.10	2.68	逆台形	N-53°-E
S D 13	0.38～0.50	0.06	1.36	浅い逆台形	N-13°-E
S D 14	0.34～0.48	0.06	1.36	浅い逆台形	N-13°-E
S D 15	0.36～0.40	0.05	1.24	浅い逆台形	N-13°-E
S D 16	0.38～0.56	0.10	1.30	逆台形	N-13°-E
S D 17	0.40～0.46	0.07	1.04	逆台形	N-12°30'-E

第2表 3区溝跡計測表

柱穴

P 3 (Fig 6)

3区北端に位置する。平面プランは円形を呈し、直径54cm、短径50cm、深さ約25cmを測る。埋土は黄灰色粘質土で、遺物は、土師器が出土した。時期は、出土遺物等より9～10世紀代と考えられる。

出土遺物 (Fig 12-100)

100は土師器甕で、丸味を帯びた底部をもち、外面は木理の荒いハケ調整を縦方向に、細いハケ調整を右下がりに施すのに対し、内面は荒いハケ調整を左下がりに施す。また内面には、指頭圧痕を残す。二次的な火を受けて紅色に変色している。

P 46 (Fig 6)

3区北端に位置する。S X 3と切り合っているが、先後関係は不明である。平面プランは楕円形を呈し、直径40cm、短径30cm、深さ約18cmを測る。埋土は黄灰色粘質土で、遺物は須恵器が出土した。時期は、出土遺物等より9世紀代と考えられる。

出土遺物 (Fig 12-101)

101は須恵器蓋で、平坦な頂部をなし、口縁部は下方につまみ出す。口縁端部は屈曲して面をなす。内・外面共に摩耗が著しく調整不明である。

性格不明遺構

S X 3 (Fig 10)

3区北端に位置する。北側はS D 6と一部古代の住居の柱穴(S B 10-P 4)に切られている。不定形の浅い落ち込みがみられ、深さ6～10cmを測る。床面は平坦で、自然のものか、意図的に掘られたものかは不明である。出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

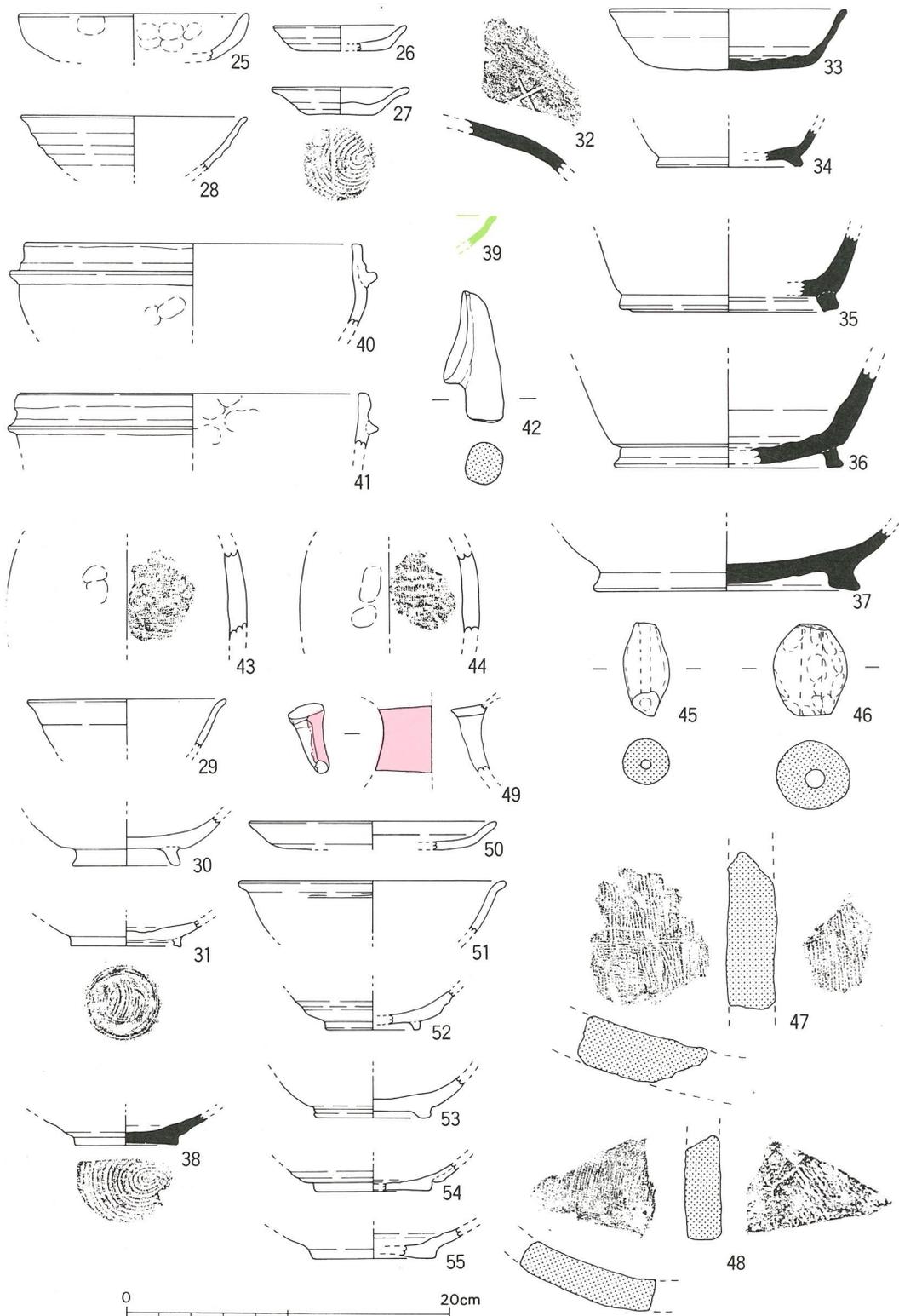


Fig 9 3~5区包含層出土遺物実測図
 (3区：Ⅲ層40, Ⅳ層41・42・45・47, Ⅴ層25~28・32~36・39
 Ⅵ層43, 4区：Ⅶ層29~31・37・38, 5区：Ⅱ層48・49・52・54
 Ⅲ層53, Ⅳ層50・51・55, Ⅴ層44・46)

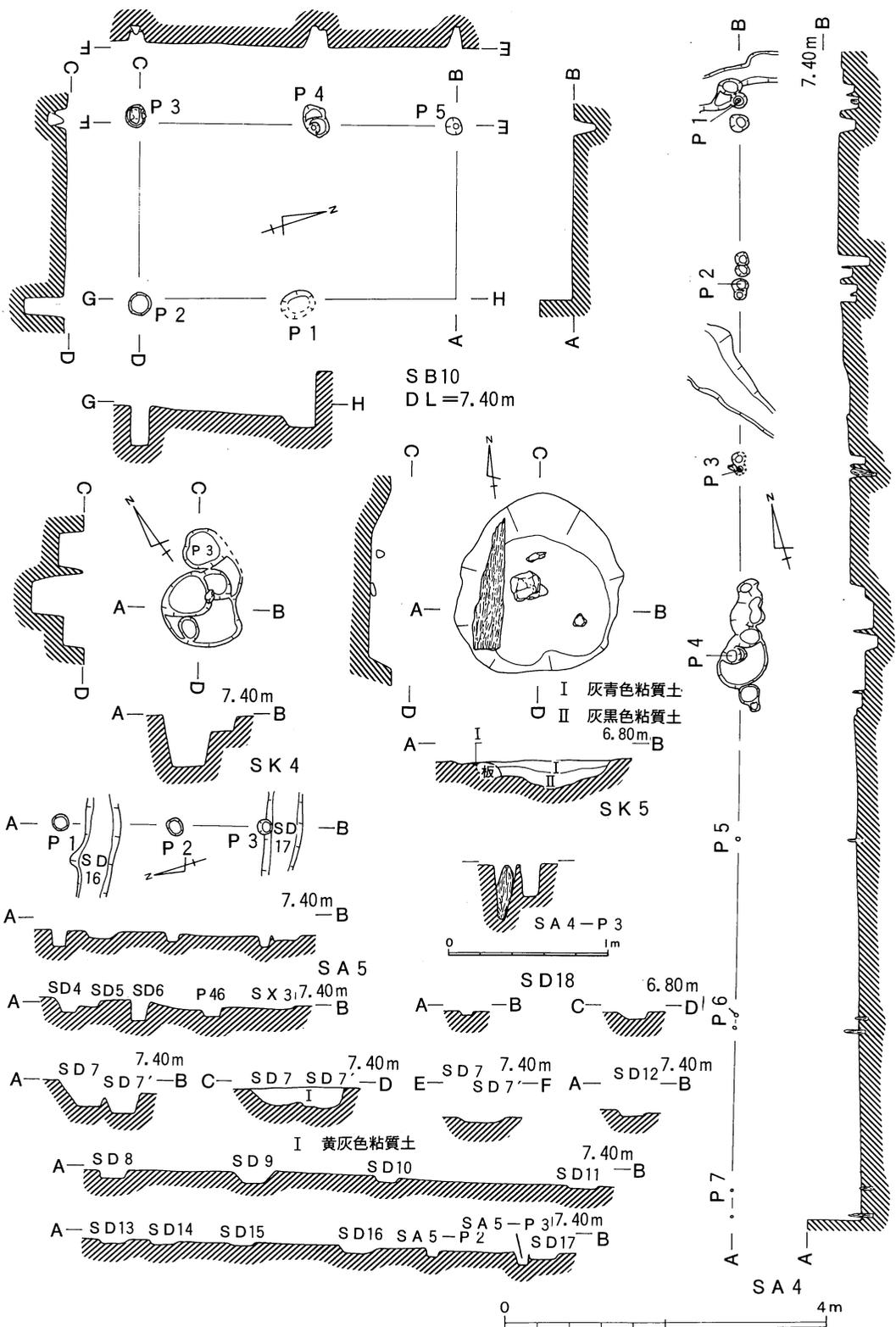


Fig 10 SB 10, SA 4 · 5, SK 4 · 5, SD 4 ~ 18, SX 3 実測図

第Ⅵ章 5区の調査

1 基本層序 (Fig 5)

5区の基本層序は、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：床土、Ⅲ層：灰青色粘質土(砂混じり)、Ⅳ層：黄茶色粘質土(砂混じり)、Ⅴ層：灰黒色粘質土、Ⅵ層：灰茶色粘質土、Ⅶ層：青白色粘質土(砂礫混じり)である。遺構が検出されたのは、Ⅶ層上面である。Ⅰ層は現代の耕作土で、8~30cmを測る。Ⅱ層は、東端で自然地形による落ち込みがみられる。遺物は若干出土した。Ⅲ~Ⅴ層は遺物包含層である。特にⅤ層は、黒ボク(音地と呼ばれる火山灰に腐植土の混入したもの)を含む層で、東部において土器が多く出土した。またⅣ層は、西端で消滅する。Ⅴ~Ⅶ層においては、雑木の根が多く遺存し、各層は中央部から西へ急激に落ち込み、同区西側は半ば沼地の状況を呈していた。なおⅥ・Ⅶ層にも遺物は若干含まれていた。

2 包含層出土の遺物

包含層出土遺物の大半はⅢ~Ⅴ層からであり、東寄りにおいて多く出土した。遺物は、主に土師器・須恵器であり、Ⅲ層より円面硯が1点出土した。土器については、口縁及び底部等が比較的残りのよいものを選んで図示した。以下、土師器・須恵器・墨書土器・緑釉陶器・製塩土器・土錘・瓦・石鏃・付札状木製品の順で述べる。

土師器 (Fig 9・11-49~62)

49は高杯で、長方形の透しをもつ。分割成形によるもので、杯部との接合面で剝離している。接合面は接合を容易にするため凹凸を施している。外面にはスリップがみられる。50は皿で、底部から直線的に立ちあがり、口唇部は丸くおさまる。器面は摩耗が著しく調整不明である。51~55は椀である。51は体部から口縁部にかけて緩やかに立ちあがる。口縁部は短く外反し、口唇部は丸くおさまる。口縁部外面はヨコなで調整を施す。52・53は輪高台を有するのに対し、54・55はベタ高台を有す。54の外面には、ロクロによるなで調整を施す。また底部外面には、回転糸切り痕が残る。高台の切り出しは丁寧である。56~58は壺である。56は丸味を帯びた上胴部から口縁部が垂直に立ちあがり、口唇部は丸くおさまる。内・外面はヨコなで調整を施す。57は肩が強く張り、口縁部は短く外反する。内面にはなで調整がみられる。58は若干膨らみ気味の底部から強く屈曲して直線的に立ちあがる。外面はヘラ削りの後をなで消し、さらに左下がりのハケ調整を施す。59~62は甕である。59の口縁部は強く外反し、口縁部は丸くおさまる。外面には右上がりの平行叩きを施し、指頭圧痕を残す。60の口縁部は内湾気味に外反し、口縁端部は内傾する面を有す。体部外面はハケ調整、口縁部内面は横方向のハケ調整を施す。61の口縁部は頸部から大きく外反し、口縁端部は垂直につまみ上げ、ヨコなでを行う。外面は横方向のハケ調整、口縁部内・外面はヨコなで調整を施す。62は内面に稜をなして外反し、端部は凹面を有す。外面にはなで調整、内面にはハケ調整を施す。

須恵器 (Fig 11-63~83)

63～72は蓋である。63～65は、口縁部内面にかえりがある。64の頂部は緩やかなドーム状を呈するが、口縁部付近で屈曲する。65は頂部外面に左廻りのヘラ削りが顕著にみられる。66の口縁部は下方に強くつまみ出し、ヨコで調整を施す。67の口縁部は小さく下方へつまみ出し、強いヨコなでを施す。外面は左方向のヘラ削りが顕著である。68は平坦な頂部から「S」字状に屈曲し口縁部に至る。内・外面共にヨコなで調整を施す。69が擬宝珠形つまみをもち、ヨコなで後左方向のヘラ削りを行うのに対し、70は環状つまみをもち、右方向のヘラ削り後ヨコなでを行う。なお后者は、内面が著しく摩耗し墨が付着しており、転用硯と考えられる。71の内面には、ロクロによるヘラ調整が顕著にみられる。72は平坦な頂部に環状つまみが付き、内面はロクロによるなで調整を施す。73～80は杯である。73・74は共に受身は水平で、口唇部は丸くおさまる。全面にヨコなで調整がみられる。75～80は何れも高台を有し、それぞれの調整は、75・76が内外面共にヨコなでを、77～80が内面はヨコなで、外面はヘラ削り後、丁寧なで消しを行っている。なお78の高台脇には、面取りがなされている。81は椀で、高台底部は強いなでにより僅かに凹む。82は壺で、下胴部は膨らみ内側へ狭く立ちあがる。外面はなで調整を施す。83は甕で、頸部は一旦垂直に立ちあがった後、外方に伸びる。口縁端部は上下に肥厚し、口唇部は面をなす。口縁部内面にはヘラ記号「十」が認められる。

墨書土器 (Fig 11-84)

84は須恵器蓋で、平坦な頂部から緩やかに口縁部に至る。口縁部は下方に強くつまみ出し、ヨコなで調整を施す。頂部外面は回転ヘラ削り後なで調整を行う。内面に「山」とみられる墨書を認む。

緑釉陶器 (Fig 11-85-87)

85・87は椀である。85の口縁部は短く外反し、口唇部は丸くおさまる。内・外面共に丁寧なヨコなで調整を施す。釉調は薄緑濁色を呈す。87はベタ高台から内湾して立ちあがり、体部外面は丁寧なヘラ磨きを行う。高台は糸切り後ヘラ削りを施し、凹状をなす。釉調は薄緑濁色を呈す。86は壺で、底部より直立気味に立ちあがる。内・外面共に釉が厚く丁寧なヘラ磨きを行う。内面にロクロ目を残す。釉調は黄緑色を呈す。猿投窯で生産されたものである。

製塩土器 (Fig 9-44)

44の内面には布目痕があり、0.5～1mmの砂粒を多く含む。外面には指頭圧痕を残す。色調は淡黄橙色を呈す。

土錘 (Fig 9-46)

46は球形に近い土錘で、重量は94kg、径1.2cmの円孔を穿つ。

瓦 (Fig 9-48)

48は平瓦で、凸面に縄目の叩きを施す。凹面には細い布目痕を残し、一部端部まで及ぶ。端部にはヘラ整形がみられる。厚さは2.1cmを測り、色調は浅黄色を呈す。

石鏃 (Fig 11-88)

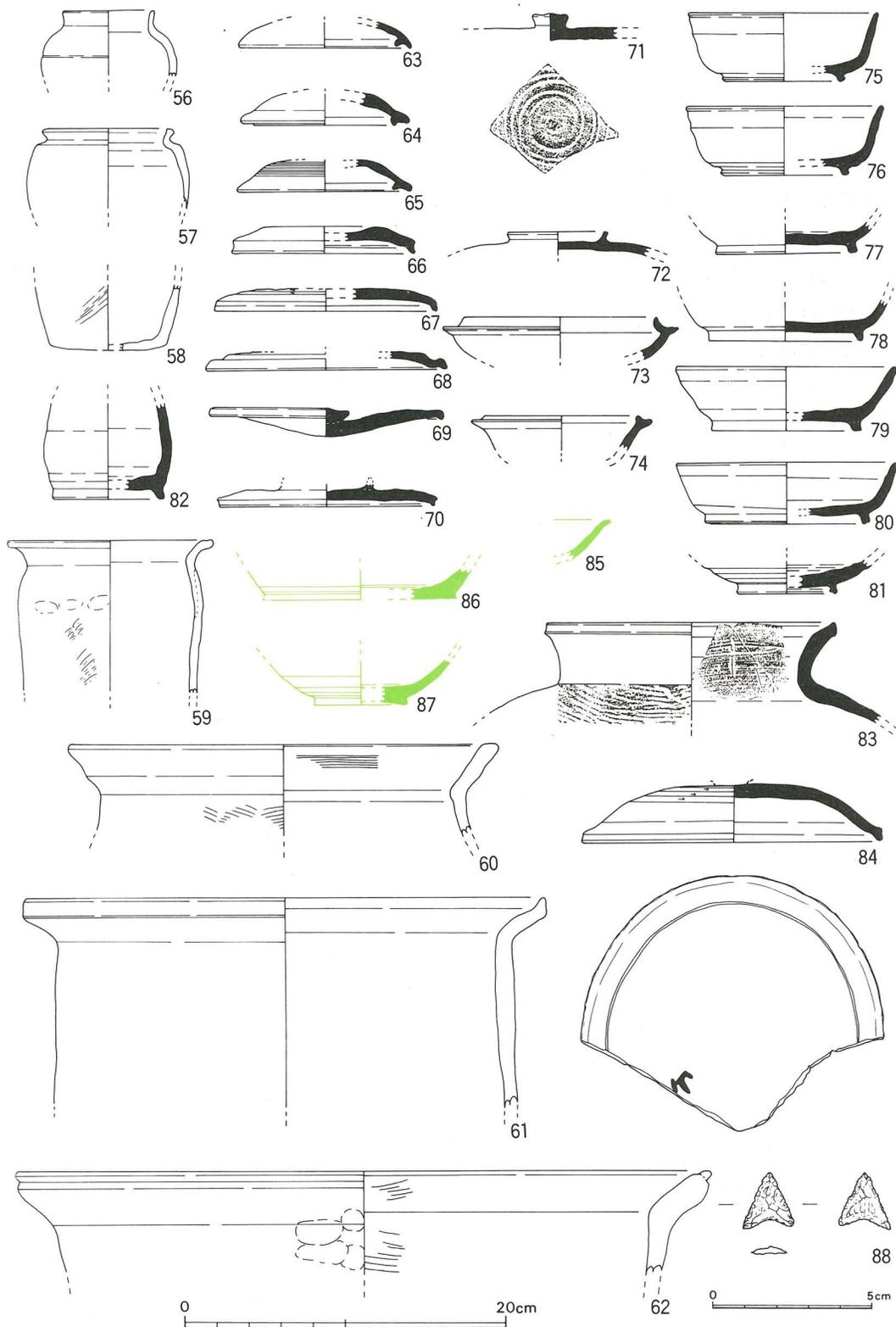


Fig 11 5区包含層出土遺物実測図
 (Ⅱ層73・81・88, Ⅲ層87, Ⅳ層63・68・74~76・79・80・83・)
 (85・86, Ⅴ層56~62・64~67・69~72・77・78・82・84)

凹基式を呈し、両面共に剝離面がみられる。全長1.8cm、幅1.6cm、厚さ0.2cm、重量4gを測る。

付札状木製品 (Fig 26-273)

273は全長約20cm、幅1.8cm、厚さ1.0~1.3cmを測る。先端部は稜をもってやや丸く、先端から1.4cmのところから0.3×1.5cmの左右からの抉り痕が認められる。4面のうち1面には墨痕が認められる。

3 遺構と遺物

5区の遺構としては、土坑1基、溝1条を検出した。

土坑

S K 5 (Fig 10)

5区東寄りに位置し、Ⅶ層上面で検出した。楕円形の平面プランを有し、長径2.40m、短径1.96m、深さ38~72cmを測る。主軸方向はN-82°30'-Wである。断面は概ねU字形を呈し、壁は、やや中窪みの底面より起伏をもって上がっている。埋土は2層に区別でき、Ⅰ層は灰青色粘質土、Ⅱ層は灰黒色粘質土である。底面及び壁面には、自然木が重なり合った状態で検出され、また大小の河原石が混入していた。同土坑は、調査中にも底部からの湧水のみ井戸の可能性も十分に存す。遺物は、土師器・須恵器・土錘・白磁が出土し、また板状木製品・植物及び昆虫遺体も検出された。時期は、出土遺物等より11世紀末と考えられる。

出土遺物 (Fig 12-102~118)

102は土師器壺で、幅広い底部から直線的に外方へ立ちあがり、胴部中位で僅かに内傾し、肩部で強く内湾する。肩部には、径0.8cmの円孔を焼成前に4カ所穿つ。また底部から胴部下半にかけて煤が付着する。103は土師器皿で、「て」の字状口縁を有し、口唇部は面をなす。口縁部はつまみ出し、外面には指頭圧痕があるがなで消す。内面はなで調整を施す。104は土師器杯で、体部から口縁部にかけて緩やかに立ちあがる。口縁端部は外方につまみ出し、内傾する面をなす。外面には横方向のヘラ削りがみられ、内面は右下りのヘラ削りを施す。105~113は土師器碗である。105は直線的に開く口縁部であり、口唇部は丸くおさまる。外面はヨコなで調整の後、弱いヘラ削りを施す。106~110は内湾気味に立ちあがり、口縁部は短く外反する。調整は内・外面共にロクロによるヨコなで、107・109には火襷がみられた。111は高台内面を強いヨコなでを行い、三日月状高台を呈す。外面はロクロ成形後、弱い左方向のヘラ削りで最終調整を行う。112・113の底部外面は糸切り痕が顕著である。外面にはロクロ目が残り、112の内面はロクロ成形後、左方向の弱いヘラ削りを行う。114は須恵器蓋で、口縁部は下方へつまみ出し、強いヨコなで調整を施す。口縁端部は僅かに凹み、口唇部は丸くおさまる。内面には丁寧なハケ調整を行い、カキ目状を呈す。115は須恵器杯で、底部は回転ヘラ削りを施し、高台脇に強いヨコなで調整がみられる。内面は不定方向のなで調整を施す。116は白磁である。細いタイプの玉縁状の口縁を有し、胎土は灰白色で粗い。釉調は黄白色を呈す。117は杏仁形

の土錘で、重量は108.8g、幅4.2cmである。118は紡錘形の土錘で、重量は11.1g、径0.4cmの円孔を穿つ。

木製品・自然遺物

上記の遺物として、板状木製品・植物及び昆虫遺体が挙げられる。板状木製品（P L 34）は、全長23.5cmあり、中央部には1.0×6.0cmの左右からの挟り痕が認められる。先端部は火を受けた痕跡が残る。自然のものか、意図的に加工されたものかは不明である。植物遺体は、古代のモモの種子をはじめ、数珠玉が比較的多くみられた。昆虫遺体は、数種類検出されたが、鑑定の結果、ガムシ科・ハムシ科・カミキリ科・コガネムシ科・ゴミムシダマシ科のものとわかった。

溝

S D 18 (Fig 10)

同区東端に位置する。南北方向に延びる溝で、中央部は細くなっている。溝は、幅18～44cm、深さ6～10cm、検出長3.70mを測る。主軸方向はN-6°30'-Wである。断面は浅い逆台形を呈し、壁は急角度で上がっている。埋土は灰黒色粘質土の単純一層である。出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。



作業風景

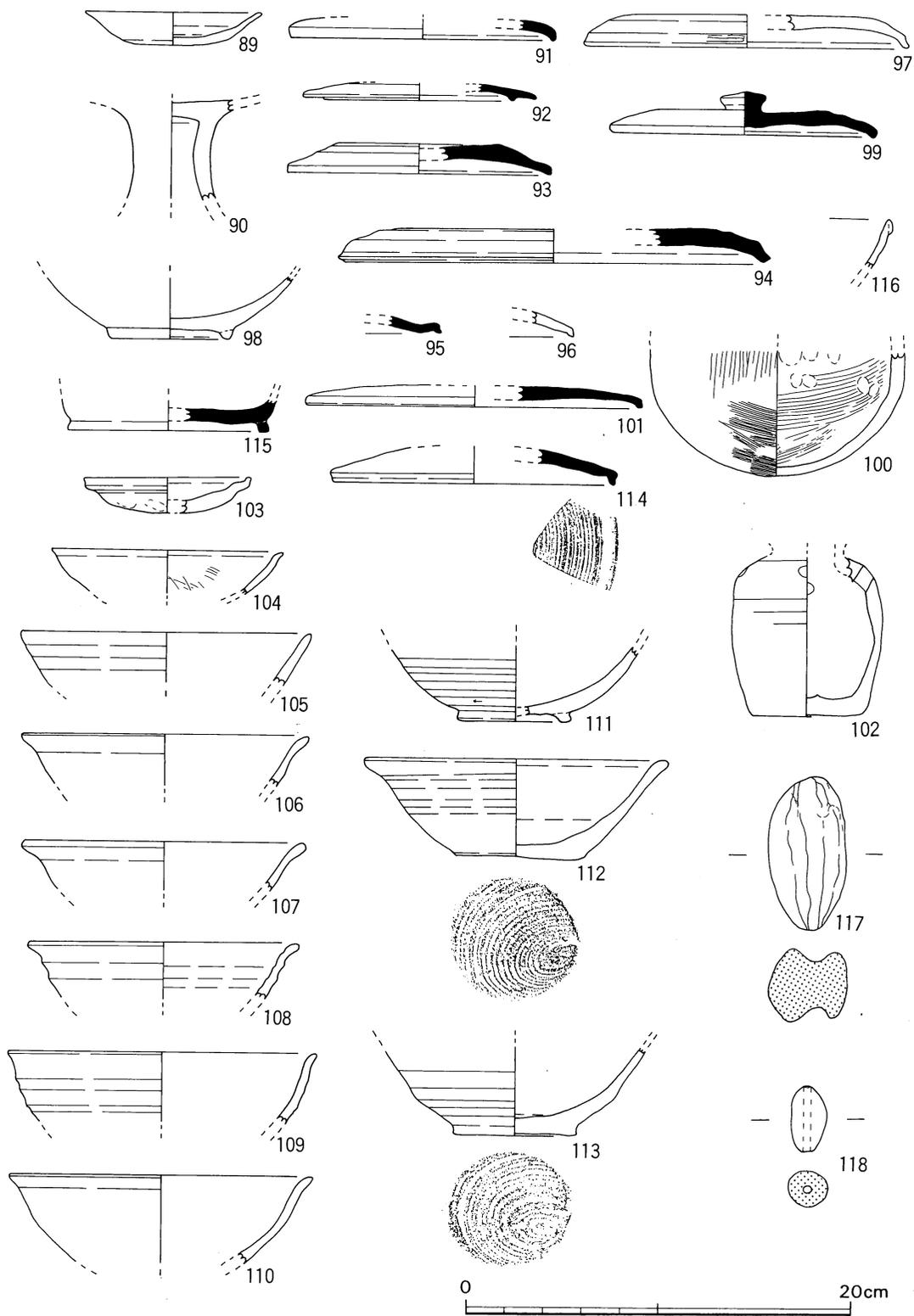


Fig 12 SB 10, SK 4 · 5, SD 6 · 7 · 7', P 3, P 46 出土遺物実測図
 (SB 10 : 89, SK 4 : 90 · 91, SK 5 : 102 ~ 118, SD 6 : 92)
 (SD 7 : 93 · 94, SD 7' : 95 ~ 99, P 3 : 100, P 46 : 101)

第七章 6・7区の調査

1 基本層序 (Fig 5)

6・7区の基本層序はⅠ層：耕作土，Ⅱ層：床土，Ⅲ層：灰茶色粘質土，Ⅲ'層：灰青色粘質土（黒色土混じり），Ⅳ層：灰黒色粘質土，Ⅳ'層：灰青色粘質土（砂礫混じり），Ⅴ層：地山（黄色粘質土）である。6区ではⅣ'層上面で遺構を検出したが，Ⅳ'層は砂礫混じりであり無遺物層である。6区で見られたⅢ'層，Ⅳ'層は7区にはほとんどみられない。これらのことから6区は氾濫原であったと見てよからう。7区では遺構面は上・下の2面を検出できた。Ⅲ層上面とⅤ層上面である。Ⅲ層上面の遺構の遺存状態は良くない。地山は7区中央部が窪む。Ⅳ層は部分的にみられ，整地層と考えられる。下層の遺構の遺存状態は比較的良好である。

地山は，セクションでは把えきれていないが，東から西に向って徐々に下向傾斜し，黒色の腐植土層が，所によっては数メートルに及ぶ，当遺跡の西側は沼の状況を呈していたと考えられる。

2 包含層出土の遺物

遺物の大半は7区で出土した。出土遺物は，土師器・須恵器・緑釉陶器・黒色土器・灰釉陶器等で中世に関するものは少量で図示していない。古墳時代，奈良時代のものも出土したが，多くは土師器・須恵器・円面硯・転用硯・緑釉陶器皿・椀・壺などの平安時代のものである。以下Ⅲ層及びⅣ層出土の遺物について述べる。

(1) Ⅲ上層出土の遺物 (Fig 13-119~131, 240~244, 258, 263~265)

土師器 (Fig 13-119~124, 131)

119~121は杯である。119・120は口縁部で僅かに外反する。底部外面は119は回転ヘラ切り，121はヘラ切り痕を認める。122~124は皿である。122・123の口縁部は外反するが124は内側に肥厚する。131は羽釜である。口縁端部に平行して鏝を貼り付ける。口縁端部は内側に肥厚して口唇部は僅かに凹んで面をなす。他に図示していないが，同種のものが数点出土している。

須恵器 (Fig 13-125~130)

125は皿である。平底状の底部から僅かに内湾気味に立ちあがり口縁部は外反する。126・127は蓋である。126は平坦な頂部から段をなして下降し，口縁部は下方に屈曲し，口唇部は丸くおさめる。127は平坦な頂部端部外面に1条の沈線を施す。128は杯である。底部外周より僅かに内側に貼付高台を有し，短く外方にやや張り出す。体部は斜上外方に直線的に立ちあがる。129は合子である。体部下半で一旦凹み内湾して立ちあがり，内方に急に屈曲して再び上方に屈曲する。

緑釉陶器 (Fig 13-240~244)

240, 241~244は椀と考えられる。242は皿と考えられる。240の口縁端部はヨコなで調整により僅かに外反する。241の口縁端部は僅かに外反する。243は外反気味に立ちあがり口縁部は

僅かに外反する。244は口縁部は外方に屈曲する。242は削り出し、蛇の目高台から内湾気味に立ちあがる。すべて全面施釉し、硬質である。

土錘 (Fig 13-264, 265)

264・265は土錘である。264は円筒形、265は断面円形の棒状のもので、両端近くにそれぞれ1孔を穿つ。

瓦 (Fig 13-263)

263は一枚造りと考えられる。凸面は縄目叩きの後、部分的にハケ調整を施す。

(2) Ⅲ下層出土の遺物 (Fig 13・14-132~161, 245~250, 266~267)

土師器 (Fig 13・14-140~146, 148~150)

140・141は皿である。平底状の底部から内湾気味に立ちあがり、口縁部は外反する。142~146は杯である。142・144は口縁端部を僅かに上方に摘み上げる。口縁端部内面は段を有す。146は貼付高台を有す。146の体部は一旦内湾して立ちあがり、体部下半で稜をなして屈曲し、直線的に外方に立ちあがる。体部外面なヘラ削りの後ヨコなどで調整を施す。147は、内湾して立ちあがる。145は盤である。口縁部は短く肥厚し、口唇部は丸くおさめる。148は盤である。外方に踏んばった長い貼付高台を有す。内面はヘラ磨きを施す。底部外面ヘラ削りを残す。底部外面以外は丹塗りを施す。149は器種不明である体部にヘラ状原体により方形の1孔を穿つ。内面は指頭圧痕が顕著である。150は環状の把手である。

須恵器 (Fig 13・14-132~139, 147, 151~160)

132~138は蓋である。つまみを有するもの (135~137) つまみを有しないもの (132~134, 138) がある。頂部外面はヘラ削りを施す。135は頂部内面に墨が残ることから転用硯と考えられる。139は皿である。僅かに凹む底部から内湾気味に立ちあがり、口縁部は上方に摘みあげる。147, 151~154は貼付高台付杯である。155は円面硯である。周縁部は斜上外方に立ちあがり、上端部は内傾する面をなし、僅かに内側に肥厚する。脚部の透しは幅の広い透しと考えられる。図示していないが、他に1点円面硯の脚が出土している。156~158は壺である。156は外方に強く踏んばる貼付高台を有し、端部は内・外に大きく肥厚し段を有す。157の体部は球形状に内湾して立ちあがる。158は長い高台が「ハ」の字状に強く踏ばる。体部下端と高台の継ぎ目にヘラ状原体による刺突を施す。159, 160は高杯である。159は脚上半に鈍い2条の沈線を施す。160は脚端部内面に僅かに段を有す。

緑釉陶器 (Fig 13-245~250)

245は皿である。軟質である。246は椀である。体部下端内面に段を有す。陶質である。247は椀である。口縁部内面に鈍い段を有す。陶質である。248・249は皿である。248は削り出し高台から僅かに内湾気味に立ちあがる。249は削り出し蛇の目高台を有す。248は軟質、249は硬質である。250は椀である。断面丸みをおびた逆台形の貼付高台を有す。体部は内湾気味に立ちあがる。硬質である。245~250はすべて全面施釉する。

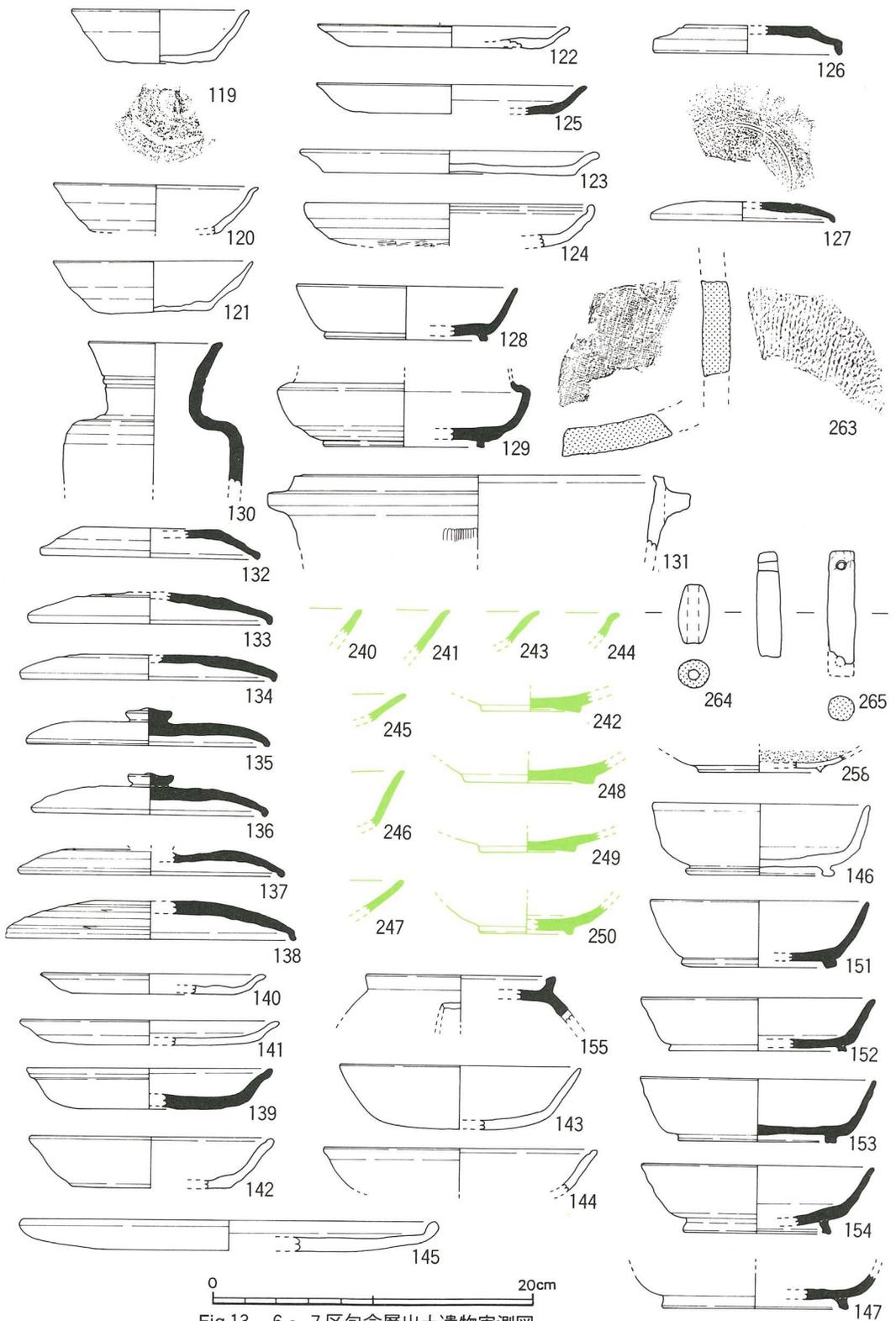


Fig 13 6~7区包含層出土遺物実測図

(6区：Ⅲ層上127・242, 7区：Ⅲ層上119~126・128~131・
 240・241・244・245・263~265, Ⅲ層下132~147・151~155)
 ・246~250, 表採243, 表採：258

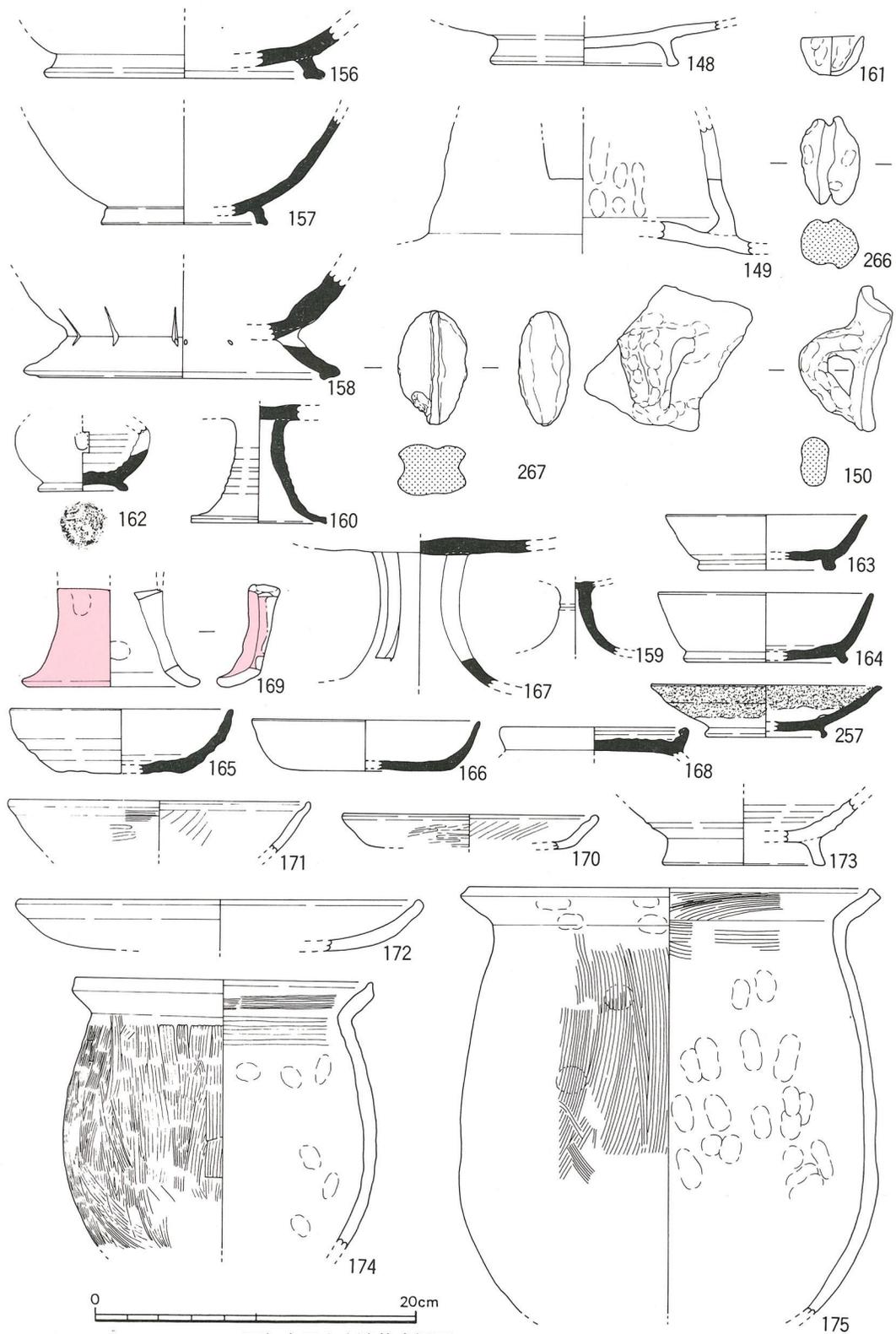


Fig 14 6~7区包含層出土遺物実測図

(6区: IV層163・167, 7区: III層下148~150・156~161・168・
266・267, IV層162・164・165・169~175・257, V層166)

土錘 (Fig 14-266, 267)

266・267は大形で両側面に溝状の袂りを造っている。

弥生土器 (Fig 14-161)

161は手捏土器である。他に図示していないが細片がある。

(3) IV層出土の遺物 (Fig 14-162~175, 257)

土師器 (Fig 14-169~175)

169は高杯である。3孔と考えられる縦方向に長い長方形のヘラ切りによる透しが穿たれている。脚部外面はヨコなどで調整を施したのち橙色のスリップを施す。170・172は皿である。口縁部は肥厚して、内面は僅かに段を有す。170は体部外面ヘラ磨き、内面は暗文を施す。171は杯である。口縁端部は肥厚して内面は僅かに段を有す。口縁端部は摘みあげて強いヨコなどを施す。体部外面は丁寧なヘラ磨きを施す。内面は放射状に暗文を施す。173は椀である。外方に張り出す長い貼付高台を有す。体部は僅かに内湾気味に立ちあがる。内・外面共にロクロ目を残す。174・175は甕である。下膨らみの胴部から口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上方に拡張する。

須恵器 (Fig 14-162~168)

162は罍である。外方に張り出す貼付高台を有す。胴部は内湾気味に立ちあがり、上胴部で内側に屈曲する。胴部中位に円孔を穿つ。底部外面に「ニ」のヘラ記号を認める。163~166は杯である。163・164は底部外周端に貼付高台を有す。165は体部外面下半にロクロ目が顕著である。165・166は共に底部外面にヘラ切り痕を残す。167は高杯である。脚部は3孔の縦方向に長い長方形のヘラ切りによる透しが穿たれる。168は円面硯である。脚部は外方に短く張り出すと考えられる。周縁部は僅かに内湾して立ちあがり、上端部は内傾する面をなし僅かに内方に肥厚する。海部は僅かに凹む程度である。陸部と海部との境に僅かに段を有す。

灰釉陶器 (Fig 14-257)

257は杯である。細い高台を有し、端部は肥厚する。体部は僅かに内湾気味に立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。底部内面に目跡を残す。釉は内・外面共に下半まで施す。

3 遺構と遺物

6・7区の遺構は上層面で据柱礎石建物1棟、柱穴多数、下層面で掘立柱建物8棟、柵列2列、溝2条及び柱穴を検出した。上層面の遺構は、SB9・P8・P17などである。下層面の遺構はSB1・SB2・SB3・SB4・SB5・SB6・SB7・SB8・SA1・SA2・SD22・SD23・P7・P20・P23などである。なお、遺構の組合せやその変遷については次章に譲る。

掘立柱建物

SB1 (Fig 15)

SB1は、7区の南端部に位置する。建物は桁行5間(10.4m)×梁間3間(5.4m)の南

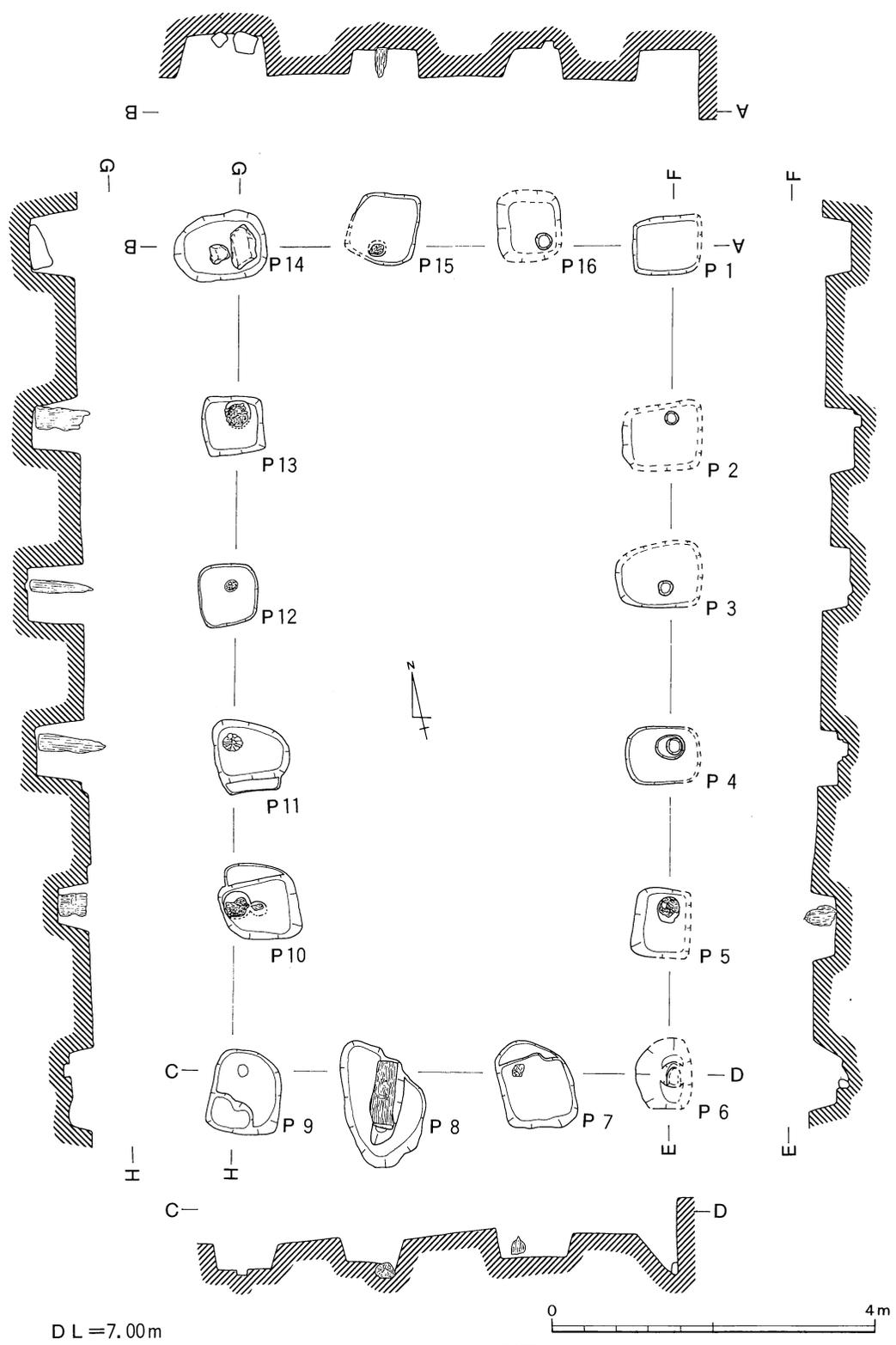


Fig 15 SB 1 実測図

北棟で、棟方向はN-14°30'-Eであり、面積は56.16m²を測る。柱穴の平面プランは隅丸方形及び不整形を呈し、1辺72~115cmを測り、柱根及び柱痕径は直径15~35cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは33~73cmである。柱間距離は桁行1.96~2.10m間、梁間1.66~1.88m間となっている。柱根の遺存状態は比較的良く、P5・P7・P8・P10・P11・P12・P13・P15には柱根（Fig 21）が遺存する。中でもP11・P12の柱根は極めて保存状態が良く、断面11角形を呈す。又P10・P13の柱根は中央部が凹むことから切り出しの際に縄等を掛けたものと考えられる。P10の柱根の東側に接して厚さ約8cmの板状木器が直立して遺存する。P11・P15は柱痕が確認でき建て替えと考えられる。P14には礎盤が置かれており、又削屑と考えられる木片が多量に出土している。

建物はSB2・SB3・SA1・SD23と重複する。SB2・SD23に切られる。SB3と切り合い関係はないが、SB2がSB3に切られることからSB1が先行する。SA1との先後関係は不明である。

SB1は出土遺物から8世紀後半~9世紀初頭と考えられる。

出土遺物（Fig 24-184~187, 268）

184は土師器皿である。直線的に斜上外方に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。176~178は須恵器皿である。176の口唇部は面をなす。177・178の口縁部は肥厚して口唇部は丸くおさめる。185は土師器盤である。全面丹塗りを施す。搬入品と考えられる。186は土師器杯である。179~181は須恵器杯である。182・183は須恵器蓋である。183は内面に墨が付着し、滑らかな面を持つことから転用硯と考えてよい。187は土師器高杯脚である。断面8角形を呈す。他に土錘（268）、P5から緑釉陶器片、P11から管玉（PL 28）が出土している。P11・P12の柱根は檜であり、他の柱根も檜と考えられる。

SB2（Fig 16）

SB2は7区の南部に位置する。建物は桁行3間（4.95m）×梁間3間（4.05m）の南北棟で、棟方向はN-16°30'-Eであり、面積は20.05m²を測る。柱穴の平面プランは隅丸方形及び不整形を呈し、1辺60~130cmを測り、柱根及び柱痕径は、直径22~24cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは40~95cmである。柱間距離は桁行1.45~1.65m間、梁間1.24~1.44m間となっている。この建物の特徴はすべての柱穴に石灰岩の礎盤を置いており、さらにP2・P6では礎盤の上に礎板として木器を置いていることである。（Fig 27）又P9は柱根を抜き取らずにその上に扁平な礎盤が置かれており建て替えが明らかである。（Fig 21）P1・P3からは削屑と考えられる木片が多量に出土している。P7は、他の柱穴と異なり直径130cmを測る大柱穴であり多量の大理石が出土した。これは廃棄した折に投げ込んだものと考えられる。又SD23の支流に切られていることから井戸として使用された可能性を有す。

建物はSB1・SB3・SA1・SD23と重複する。SB1・SA1を切り、SB3・SD23に切られる。

S B 2 は出土遺物から 9 世紀中～後期に比定できる。

出土遺物 (Fig 24-188~194, 251~253, 259~260)

188は須恵器蓋である。192~194は土師器杯である。189~191は須恵器杯である。191の高台は内側に屈曲する貼付高台を有す。259~260は黒色土器である。いわゆる A タイプである。260は高台が断面逆三角形を呈す。251~253は共に緑釉陶器である。251は椀, 252は皿と考えられる。253は壺 (又は脚つきの甑) と考えられる。253はIV層出土緑釉陶器と接合した。肩部屈曲部に最大径を有する。胴部中位に 2 条の沈線が巡り, 更にその上に瘤状の突起を貼付ける。緑釉陶器は共に京都洛北産である。なお P 1・P 3・P 7 から古代モモの種子が出土した。P 2・P 6 の礎板は檜と考えられる。

S B 3 (Fig 17)

S B 3 は 7 区の南東部に位置する。唯一の総柱建物と考えられ倉庫と推定される。建物の半分以上が調査区外に出ている。建物は桁行 3 間 (4.35m) × 梁間 1 間 (1.3m 以上) の南北棟と考えられる。棟方向は, N-15°-E であり, 柱穴の平面プランは隅丸方形を呈し, 1 辺 60~70cm を測り, 柱痕径は直径 17~26cm である。これらの柱穴の検出面からの深さは 28~52cm である。柱間距離は桁行 1.05~1.82m 間, 梁間 1.30m 間となっている。P 5 は根石状の栗石が数個置かれていた。

建物は S B 1・S B 2 と重複する。S B 1・S B 2 を切る。

出土遺物 (Fig 24-195~199, 261)

195~196は須恵器杯である。197~198は土師器皿である。198は体内内・外面共ヨコ方向のヘラ磨きを施す。199は土師器盤である。断面逆三角形の貼付高台から内湾気味に立ちあがり, 口縁端部は上方に摘み上げる。口唇部は面をなし強いなで調整で凹む。S B 6 - P 13 出土の土師器盤と接合できるが, P 2 は複雑に切り合っており, S B 3 と S B 6 が同一時期とは言いがたい。261は黒色土器椀である。いわゆる A タイプである。口縁部で僅かに外反する。

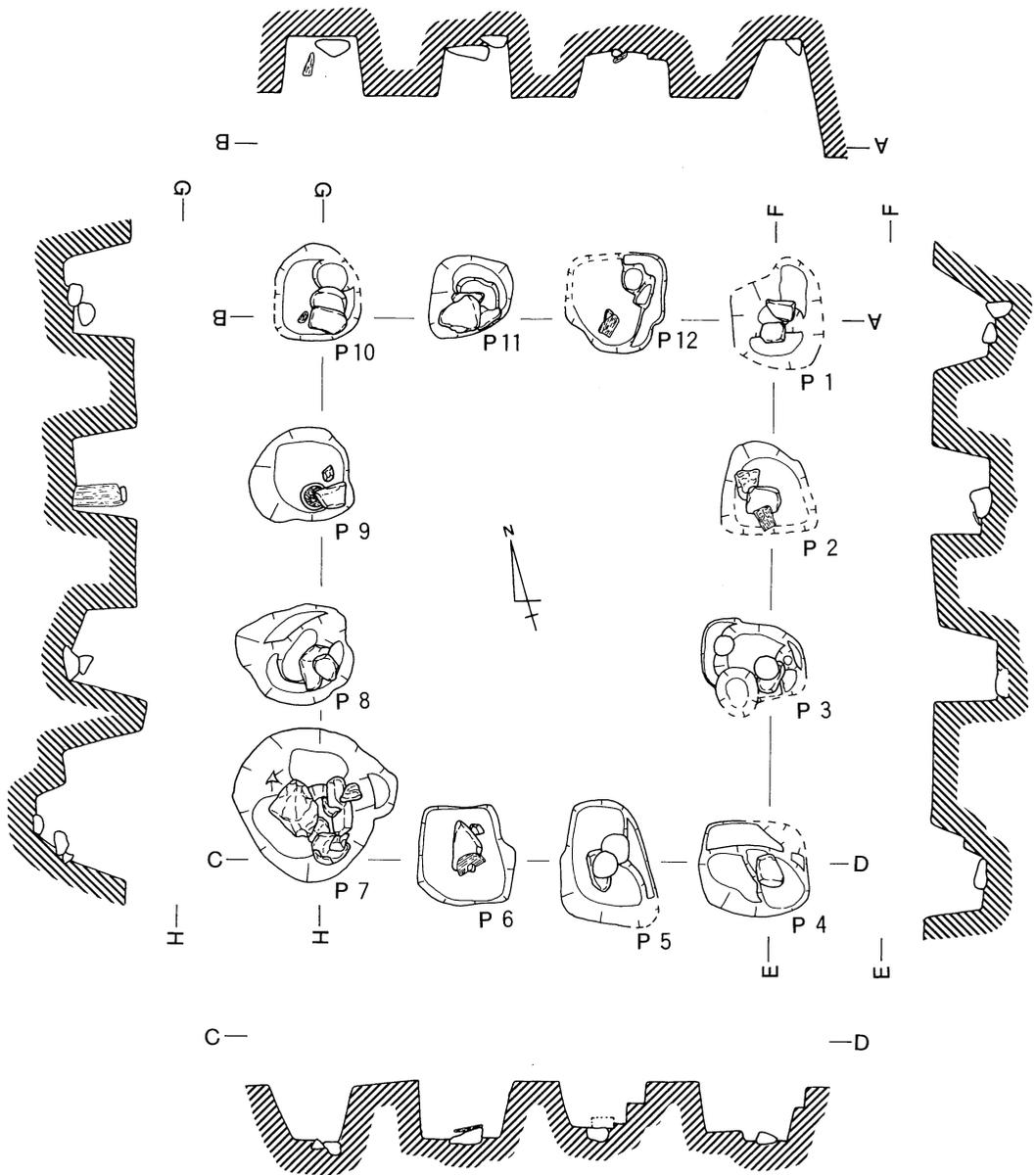
S B 4 (Fig 18)

S B 4 は 7 区の北東端部に位置する。建物の半分以上が調査区外に出ている。建物は桁行 5 間 (10.35m) × 梁間 1 間 (2.10m 以上) の南北棟と考えられる。棟方向は N-14°40'-E であり, 柱穴の平面プランは隅丸方形を呈し, 1 辺 65~100cm を測り, 柱痕が確認されたのは P 1 のみで直径 20.0cm である。これらの柱穴の検出面からの深さは 13~46cm である。柱間距離は桁行 2.10m 等間, 梁間 2.10m 間となっている。P 3 から削屑と考えられる木片が多数出土している。なお北東端の柱穴は攪乱によって破損され柱痕のみが残存すると考える。埋土は灰黒色粘質土単層である。

建物は S B 5・S B 6・S A 2 と重複する。S B 5・S B 6・S A 2 に切られる。

出土遺物 (Fig 24-200)

出土遺物は土師器, 須恵器の細片のみで, 図示できたのは 200 の須恵器蓋のみである。緩や



DL=7.00m

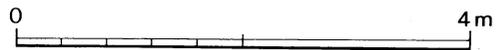


Fig 16 SB 2 实测图

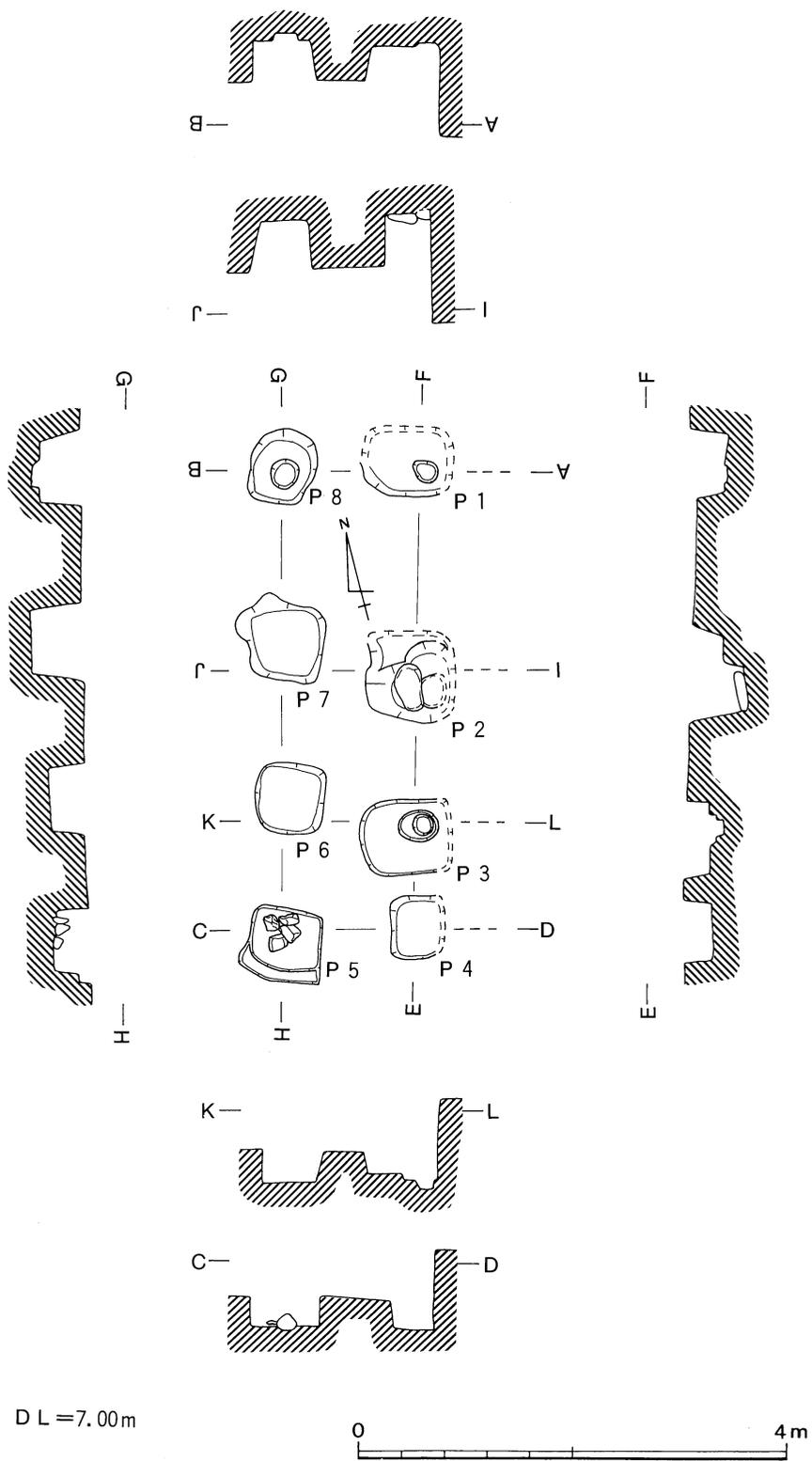


Fig 17 SB 3 实测图

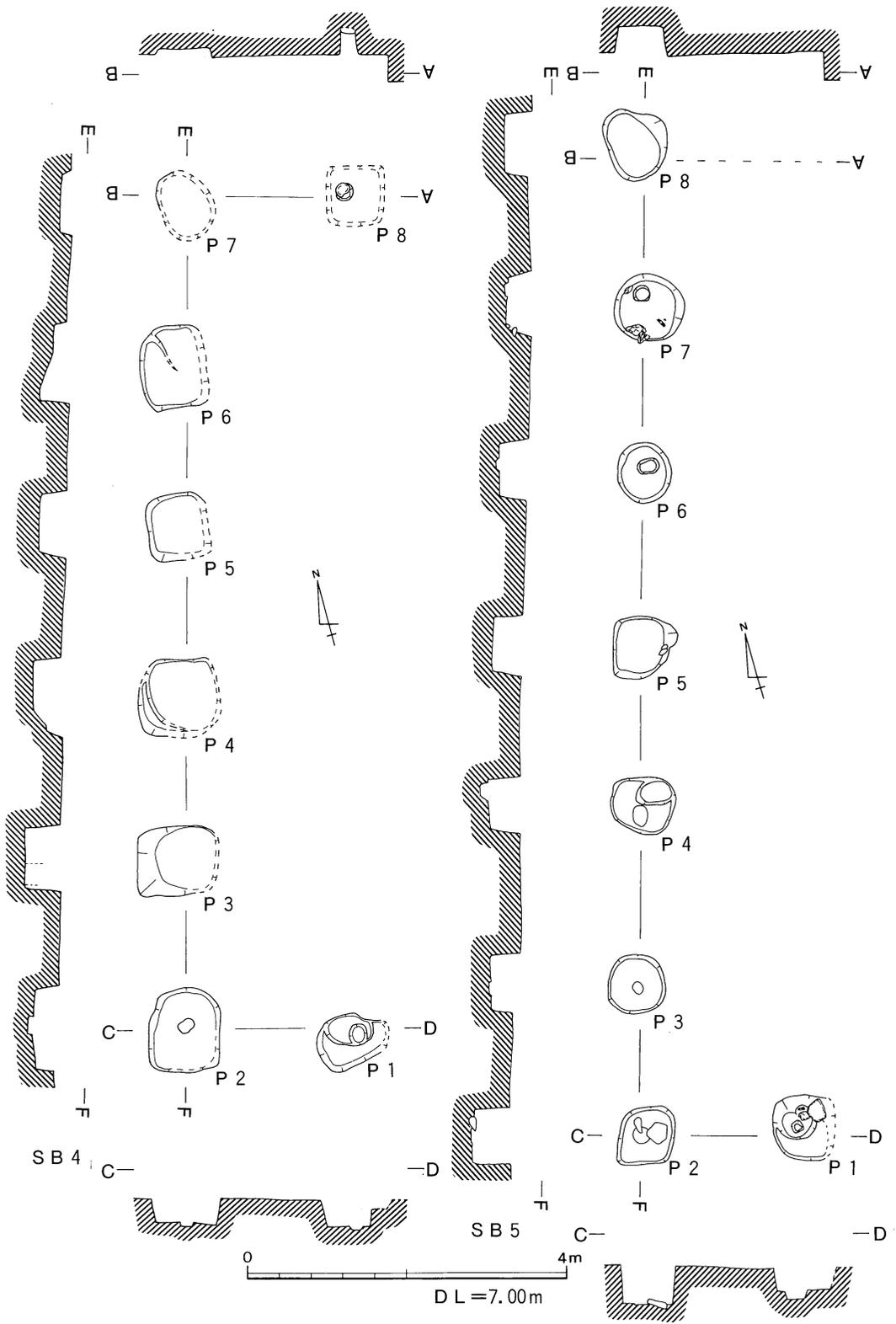


Fig 18 SB 4 · SB 5 实测图

かに下向して口縁部に至る。口唇部は面をなし下方に沈線が巡る。

S B 5 (Fig 18)

S B 5 は 7 区の北東端部に位置する。S B 4 とほぼ同位置で建て直されたと考えられる。建物は半分以上が調査区外に存する。建物は桁行 6 間 (12.45m) × 梁間 1 間 (2.0m 以上) の南北棟で棟方向は N-14°50'-E であり、柱穴の平面プランは隅丸方形及び円形を呈し、1 辺 55~90cm を測り、柱痕径は直径 17~37cm である。これらの柱穴の検出面からの深さは 35~52cm である。柱間距離は桁行 1.80~2.20m 間となっている。P 2 からは削屑と考えられる木片が多量に出土している。埋土は黄色粘質土に灰黒色粘質土がブロックで混じる。

建物は S B 4 ・ S B 6 ・ S A 2 と重複する。S B 4 を切り、S A 2 に切られている。S B 6 との先後関係は出土遺物等から S B 5 が先行するものと考えられる。

出土遺物 (Fig 24-201~205, 216, 262)

205 は土師器皿である。201 は須恵器蓋である。丸みを帯びた頂部から下行して口縁部との境には段を有す。202~204 は土師器杯である。202・204 は平底状の底部であり、203 は丸底状の底部を有し共に底部外面は回転ヘラ切り痕を残す。216 は製塩土器である。厚手の内面に布目痕を残し、外面は指頭圧痕を残す雑な造りの土器である。262 は黒色土器である。いわゆる A タイプであり高台は断面逆三角形を呈す。

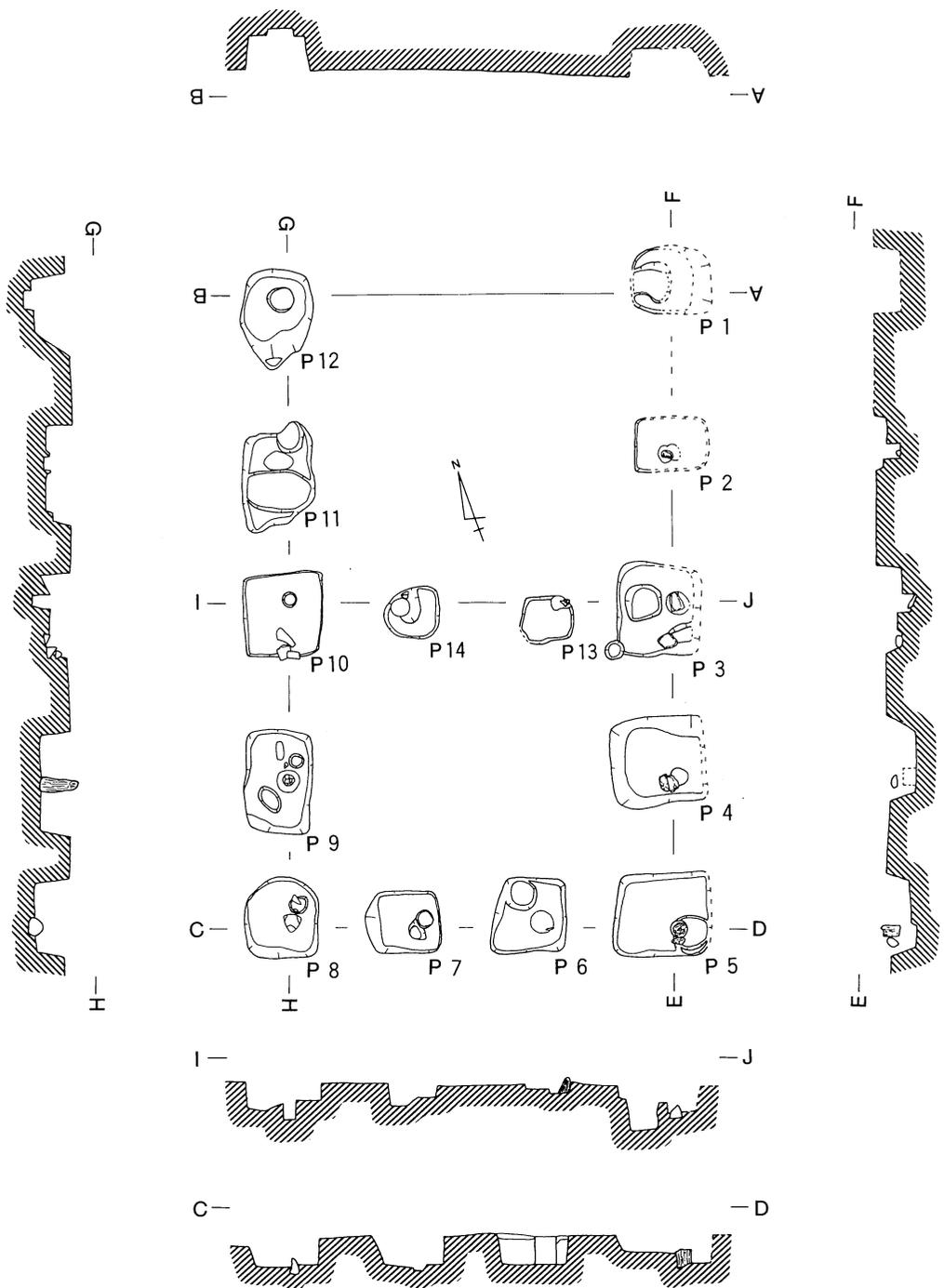
S B 6 (Fig 19)

S B 6 は、7 区の北部に位置する。建物は桁行 4 間 (7.3m) × 梁間 3 間 (4.40m) の南北棟で、北から 2 間目、南から 2 間目の建物の中央で間仕切られている。棟方向は N-16°30'-E であり、面積は 32, 12m² を測る。柱穴の平面プランは隅丸方形を呈し、1 辺 54~118cm を測り、柱根及び柱痕径は 17~25cm である。これらの柱穴の検出面からの深さは 14~54cm である。柱間距離は桁行 1.63~2.0m 間、梁間 1.3~1.7m 間となっている。P 1 ・ P 5 ・ P 9 (Fig 22) には柱根が遺存する。建物の北面中央の柱穴は確認できなかった。埋土は図示 (Fig 22) したものの以外は黄色粘質土に灰黒色粘質土がブロックで混じる。

建物は S B 4 ・ S B 5 ・ S D 22 と重複している。S B 4 ・ S D 22 を切る。S B 5 との先後関係は出土遺物から S B 5 が先行するものと考えられる。S B 6 は出土遺物から 9 世紀中~後期に比定することができる。

出土遺物 (Fig 24・25-206~218, 254~256)

211 は土師器皿である。口縁部は斜上外方に直線的に短く立ちあがる。206・207 は須恵器蓋である。206 は口唇部は面取りを施し、面をなす。212・213 は土師器杯である。平底状の底部から体部へ屈曲して体部は内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。254~256 は緑釉陶器である。254 は皿で削り出し高台から内湾して立ちあがり口縁端部で急に外反する。共に京都洛北産である。210 は須恵器壺である。214・215 は土師器皿である。214 の口縁は外反する。209 は須恵器皿である。口縁部は外反して端部外面は僅かに凹む。口唇部は丸くおさめる。217



D L = 7.00m

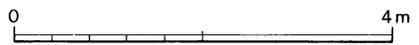
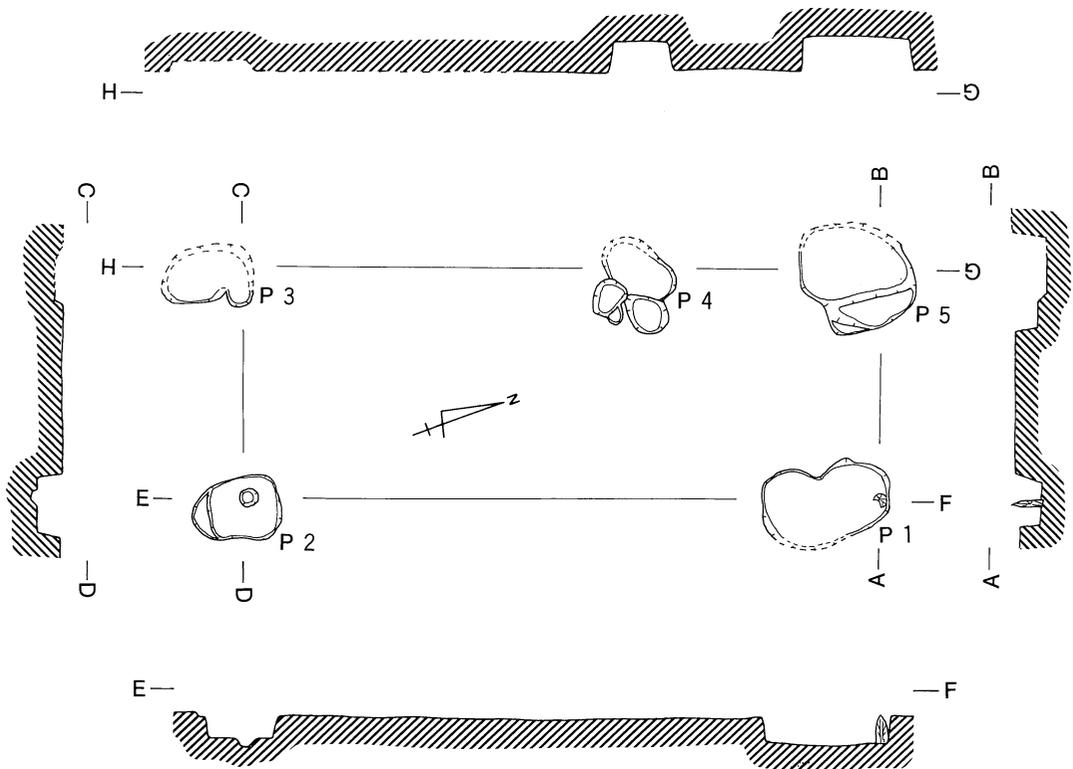
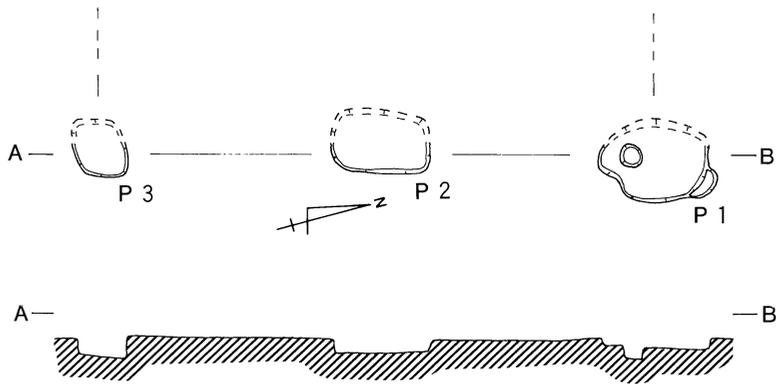


Fig 19 SB 6 实测图



SB 7



SB 8

DL = 7.00m

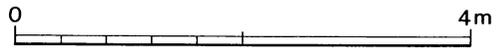


Fig 20 SB 7 · SB 8 実測図

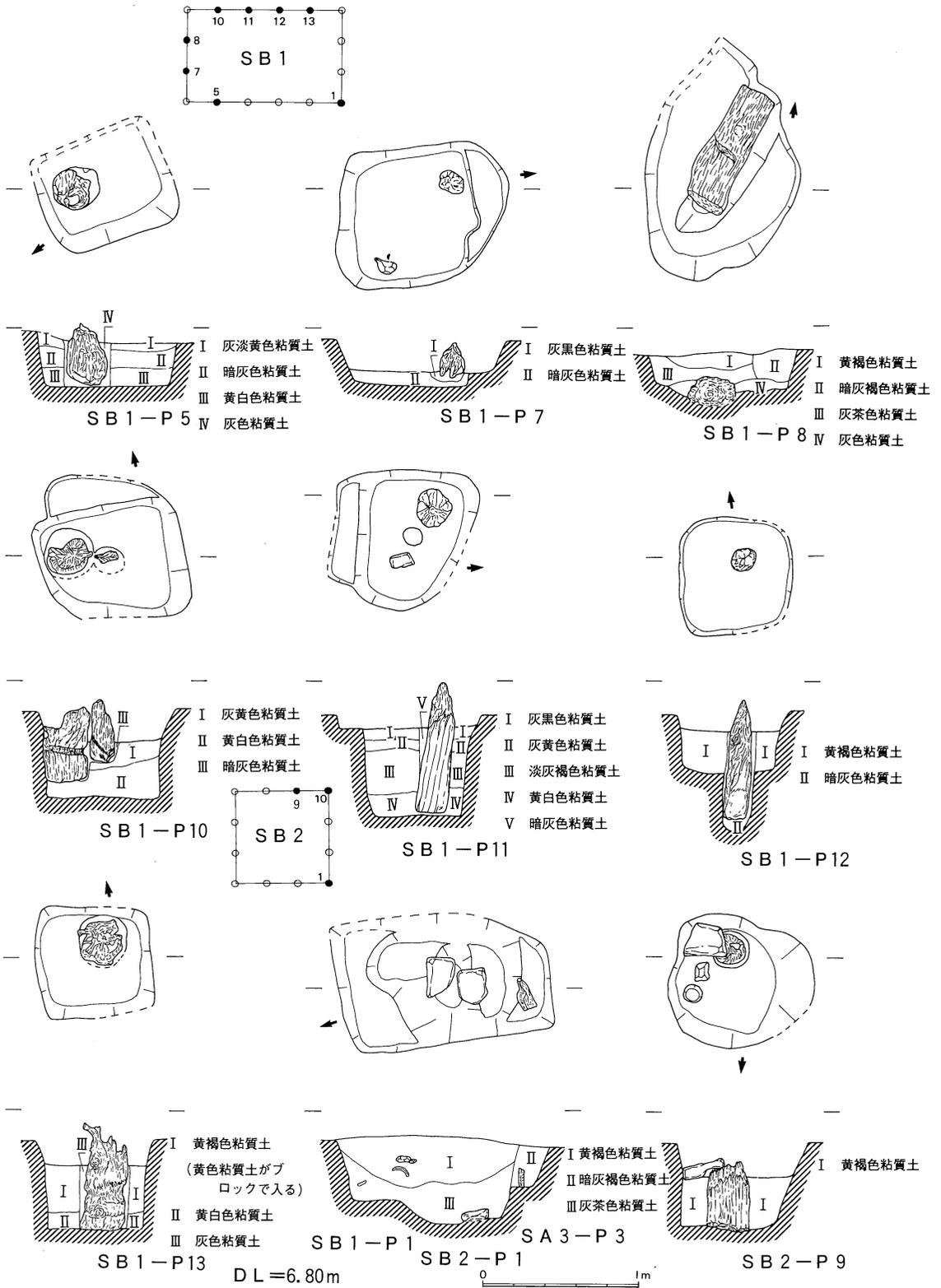


Fig 21 SB 1・2 柱穴断面図

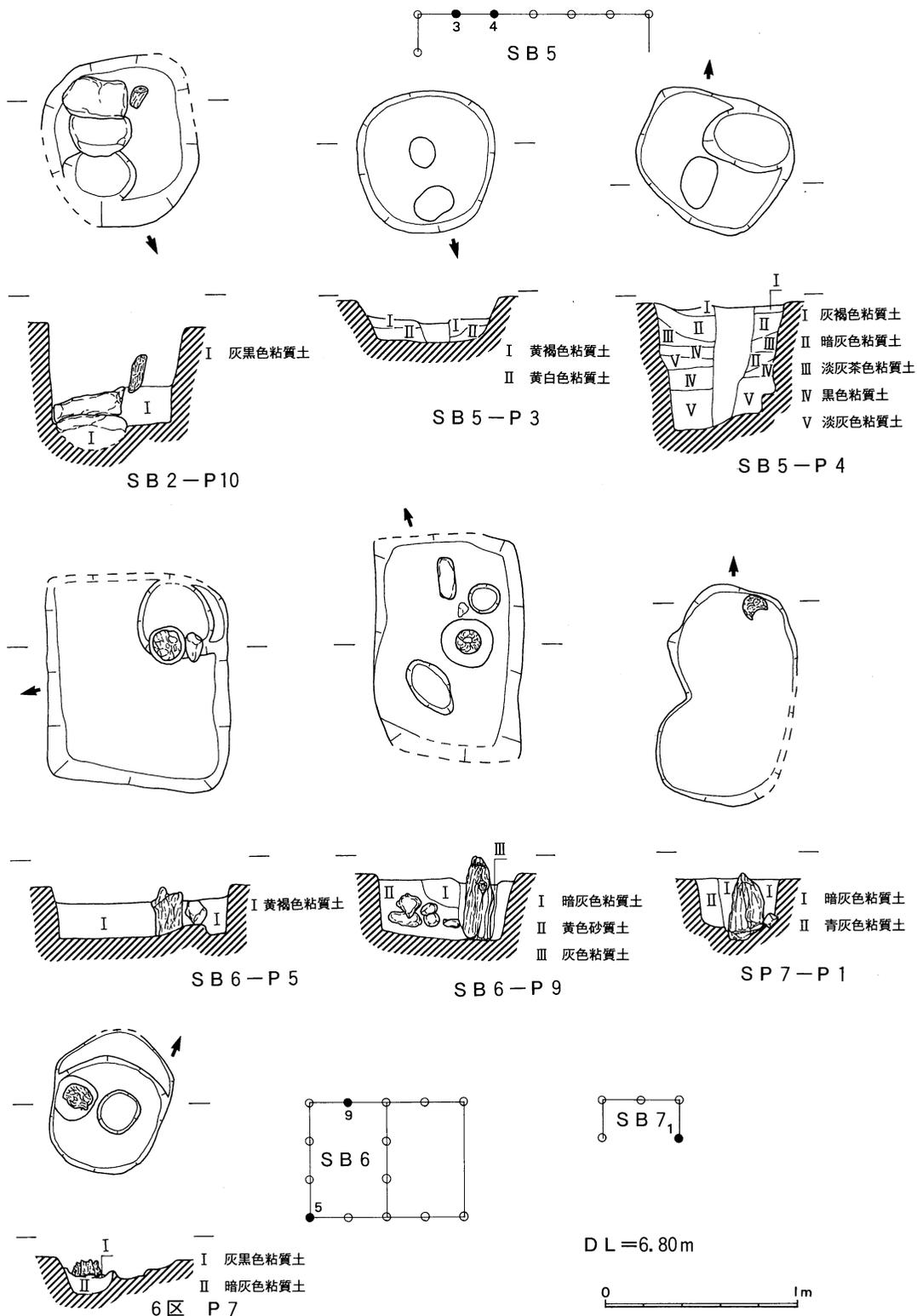


Fig 22 SB 2 · 5 · 6 · 7, 6区: P 7 柱穴断面图

・218は土師器甕である。口縁部は外反して端部外面は上方に肥厚する。口唇部は丸くおさめる。他に図示していないが黒色土器片（いわゆるAタイプ）も出土している。P4・P5・P7・P11から古代モモの種子が出土している。

S B 7 (Fig 20)

S B 7は6区の南端部に位置し、半分以上が調査区外にいる。建物は桁行2間(5.70m)×梁間1間(2.2m)以上の南北棟と考えられ、棟方向はN-20°20'-Eである。柱穴の平面プランは、隅丸方形及び不整形を呈し、1辺55~95cmを測る。P1には柱根が遺存する。柱根の直径は15cmを測る。これらの柱穴の検出面からの深さは23~32cmである。柱間距離は桁行2.2~3.7m間、梁間2.2m間となっている。

出土遺物 (Fig 25)

弥生土器・土師器・須恵器が出土しているが、細片で図示できたのは、土師器蓋219のみである。口縁部は「S」字状に屈曲する。

S B 8 (Fig 20)

S B 8は6区の中央よりやや北に位置し、大半が調査区外に出る。3個の柱穴を確認したのみで棟方向は不明である。柱穴の平面プランは隅丸方形を呈し、1辺35~97cmを測る。柱痕が確認できたのはP1のみで直径が17cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは13~18cmである。

柱間距離は2.35m等間である。埋土はI層：暗灰色粘質土、II層：青灰色粘質土となっている。

出土遺物

弥生土器、土師器、須恵器が出土しているが、少量でしかも細片であり図示できるものはない。

据柱礎石建物

S B 9 (Fig 23)

S B 9は上面で検出したが7区の中央よりやや南側に位置する。建物の東部は調査区外に出ている。建物は、桁行2間(3.9m)×梁間1間以上(1.38m以上)の南北棟で、棟方向はN-14°30'-Eであり、面積は6.8㎡以上を測る。礎石の大きさは17.0~35.0cmである。柱間距離は、桁行1.8m等間、梁間1.45mとなっている。

柵列

S A 1 (Fig 23)

S A 1は、S B 3とS B 5との間に位置する。規模は2間(5m)以上の東西方向で、主軸方向は、N-76°5'-Wを測る。柱穴の平面プランは円形及び不整形を呈し、直径50~90cmを測る。これらの柱穴の検出面からの深さは35~45cmである。柱間距離は2.5m等間である。P3には木材片が遺存する。

柵列はS B 1・S B 2と重複関係にある。S B 2に切られる。(Fig 16)

出土遺物 (Fig 25-220~221)

出土遺物は少量で図示できたのは、P2から出土した土師器皿(220~221)のみである。220は底部と体部外面との境に稜を有す。221は口縁部は摘んで強くヨコなで調整を施すことにより細る。なお、図示していないが黒色土器片(いわゆるAタイプ)が出土している。

S A 2 (Fig 23)

S A 2は、S B 6とS B 7との間に位置する。規模は3間(3.9m)以上の東西方向で、主軸方向は、N-75°05'-Wを測る。柱穴の平面プランは円形を呈し、直径30~90cmを測り、柱根の径は直径15cmを測る。これらの柱穴の検出面からの深さは15~48cmである。柱間距離は1.3~1.35m間である。P4に柱根が遺存する。

柵列は、S B 4・S B 5と重複関係にある。柵列はS B 4・S B 5を切る。

出土遺物 (Fig 25-222・223)

出土遺物は少量で図示できたのはP1から出土した土師器盤(222)、須恵器壺(223)のみである。222は平底状の底部から短く内湾して立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。S B 1の185に酷似する。223は緩やかに弧状を描いて口縁部に至る。口縁部は下方に屈曲する。

溝

S D 22 (Fig 23)

S D 22は、S B 4・S B 5の西側にほぼ平行して位置する。規模は長さ約9.6mの南北方向で幅約45~65cm、検出面からの深さは15~23cm、主軸方向はN-15°-Eを測る。南北端の比高差はほとんどなく、両端部が浅く掘られている。断面は逆台形を呈す。埋土は、灰茶色粘質土単純一層である。

溝はS B 6と重複関係にあり、S B 6に切られる。

出土遺物 (Fig 25-224・225)

出土遺物は少量で図示できたのは土師器皿(224)、土師器杯(225)のみである。224は平底状の底部外周端部は肥厚する。底部外面はヘラ切り後、弱い削りを施し、その後なで調整を施す。225は平底状の底部から体部外面の境に段を有して立ちあがる。

S D 23 (Fig 23)

S D 23は、7区の西南端部に位置する。主軸方向N-11°50'-Eの南北方向に約9.0m伸び、ほぼ中央で北東方向に枝分れし、南端部で約90°西へ約2.1m伸びて調査区外に出る。幅12~45cm、検出面からの深さは10~40cmを測る。断面は南北方向の溝は逆台形、東西方向の溝は段状を呈す。南北端の比高差は5~6cmあり、北から南方向に緩やかに流れていたものと考えられる。埋土はI層：灰茶色粘質土、II層：灰茶色砂質土である。

溝は、S B 1・S B 2と重複関係にある。S B 1・S B 2を切る。

出土遺物 (Fig 25-226)

出土遺物は少量で図示できたのは検出面で出土した須恵器杯(226)のみである。底部外面

は回転ヘラ切りの後、弱い削りを施し更になで調整を施す。

柱穴

P 7 (Fig 6)

P 7は、S B 6 - P 8の南側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、1辺67~75cmを測る。柱痕の径は直径28cmである。柱穴の検出面からの深さは56.8cmである。埋土はI層：黄色砂質土、II層：灰色粘質土である。

柱穴はS D 22と重複関係にあり、S D 22を切る。

出土遺物 (Fig 25-227・228)

出土遺物は少量で図示できたのは土師器皿 (227)、土師器羽釜 (228)のみである。227は底部外面にヘラ切り痕を残す。228は口縁端部より約2cm下がったところに鐳が付く。なお他に内面に布目を残す製塩土器片、古代モモの種子が出土している。

P 8 (Fig 6)

P 8は上面で検出し、S B 9の西北側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、直径28~38cmを測る。柱穴の検出面からの深さは、25.0cmである。埋土は灰茶色粘質土である。

出土遺物 (Fig 25-229)

出土遺物は土師器、須恵器があるが細片で図示できたのは須恵器甕 (229)のみである。口縁部は「く」の字状に一旦外反した後内湾気味に立ちあがり、口唇部は水平な面をなす。

P 17 (Fig 6)

P 17は上面で検出し、S B 9の西南端に重複する。平面プランは円形を呈し、直径28~35cm、柱穴の検出面からの深さは37.9cmを測る。埋土は濃茶灰色粘質土である。

柱穴はS B 9と重複するが先後関係は不明である。出土遺物から10世紀代に比定できる。

出土遺物 (Fig 25-230~232)

上面で土師器杯 (230, 231)、土師器椀 (232)が出土した。230はベタ高台の平底の底部から外方に直線的に立ちあがり口縁端部は僅かに外反する。底部外面にヘラ切り痕を残す。231はベタ高台を有す。232は底部外周端部に細長い高台を有す。底部外面にヘラ切り痕及び爪圧痕を残す。

P 20 (Fig 6)

P 20は7区の西南端に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、1辺80~100cmを測る。柱穴の検出面からの深さは45.0~59.5cmである。礎盤を置く。埋土はI層：黄褐色粘質土 (砂礫混じり)、II層：灰茶色粘質土である。

柱穴はS B 1と重複関係にある。S B 1 - P 8を切る。

出土遺物 (Fig 25-233~237, 269~271)

233は土師器皿である。平底状の底部から僅かに外反して立ちあがる。235・236は須恵器皿である。平底状の底部から僅かに外反して立ちあがる。口縁部と体部外面の境は強いなで調整

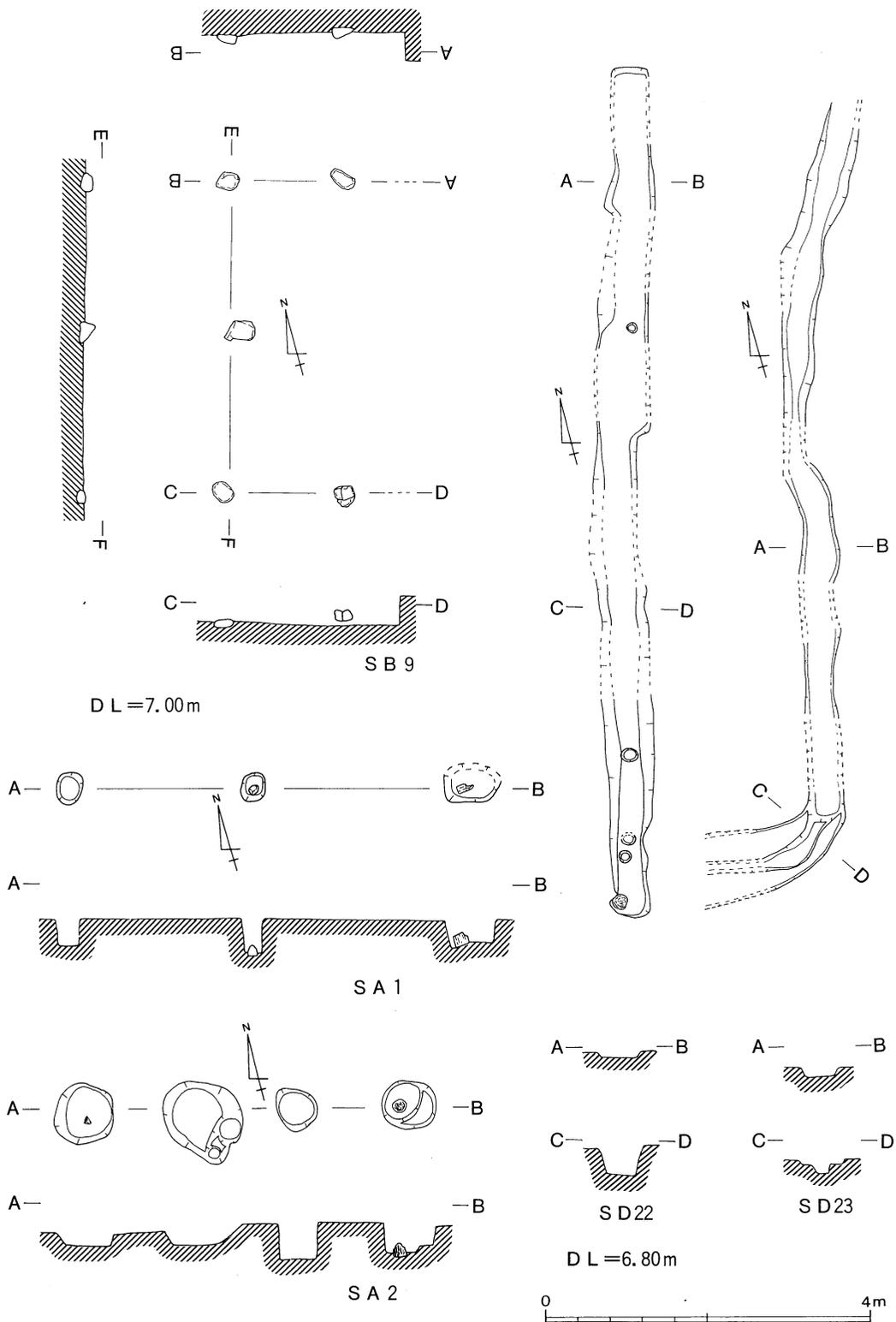


Fig 23 SB 9, SA 1 · 2, SD 22 · 23 实测图

で僅かに凹む。底部外面ヘラ切り痕を残す。234は土師器杯である。平底状のベタ高台を有す。体部は斜上外方に直線的に立ちあがり、口縁端部で僅かに外反する。237は須恵器蓋である。平坦な頂部から急に下方内側に屈曲し口縁部に至る。口唇部は面をなす。269～271は土師器土錘であるが、271は礎盤の下から出土した。なお図示していないが灰釉陶器片、黒色土器片（いわゆるAタイプ）及び古代モモの種子が出土している。

P 23 (Fig 6)

P 23はS A 2の南側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、1辺が66～75cmを測る。検出面からの深さは31.9～36.2cmである。埋土は淡茶色粘質土である。

柱穴はS B 4・S B 5・S A 2と重複関係にある。S B 4を切り、S B 5・S A 2に切られる。

出土遺物 (Fig 25-238・239)

238は土師器皿である。平底状の底部から外反気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。239は須恵器蓋である。口唇部は強いなで調整により僅かに凹む。口唇部は丸くおさめる。

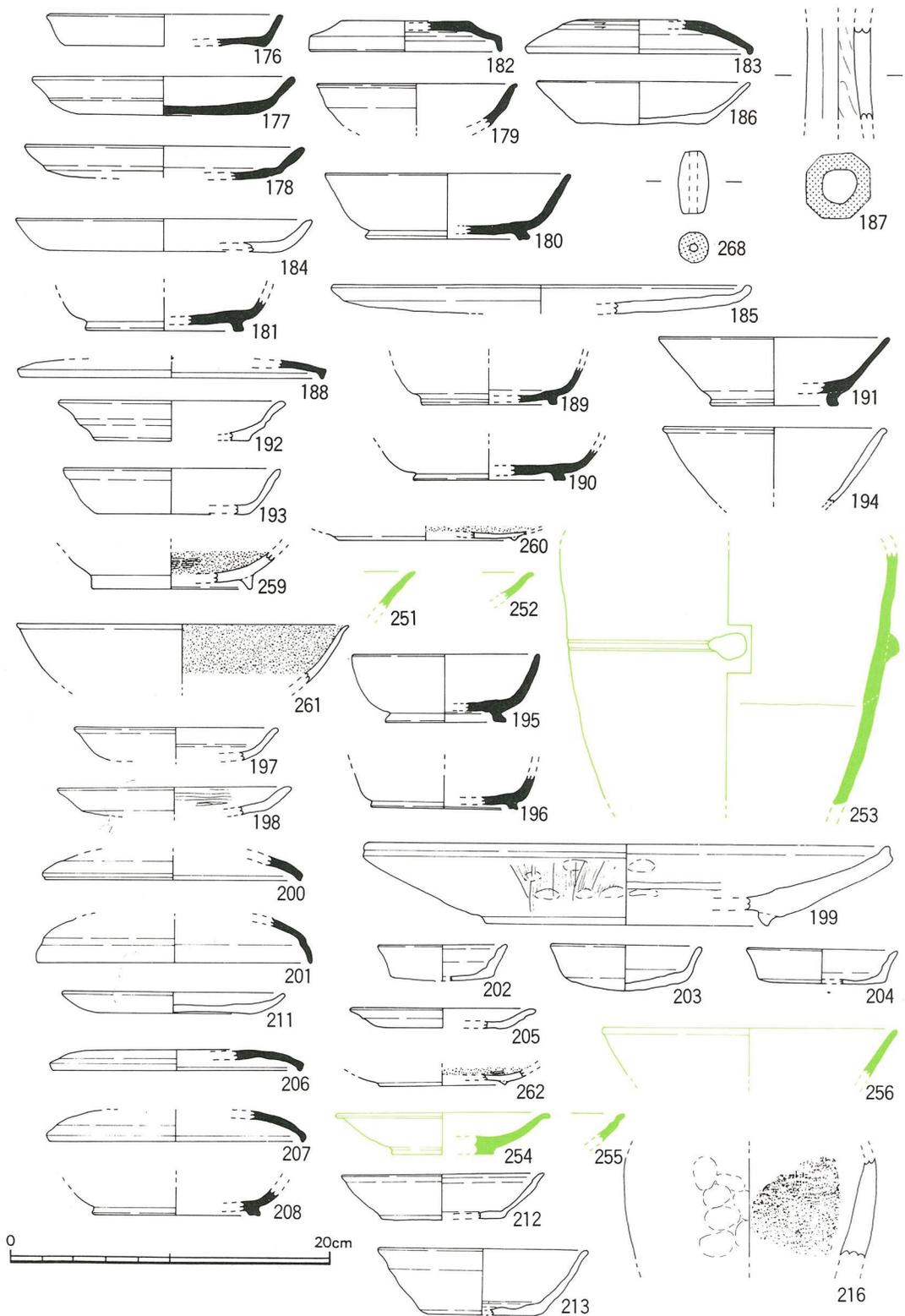


Fig 24 SB 1 ~SB 6 出土遺物実測図

(SB 1 : 176~187・268, SB 2 : 188~194・251~253・259・260)
 (SB 3 : 195~199・261, SB 4 : 200, SB 5 : 201~205・262,)
 (SB 6 : 206~208・211~213・216・254~256)

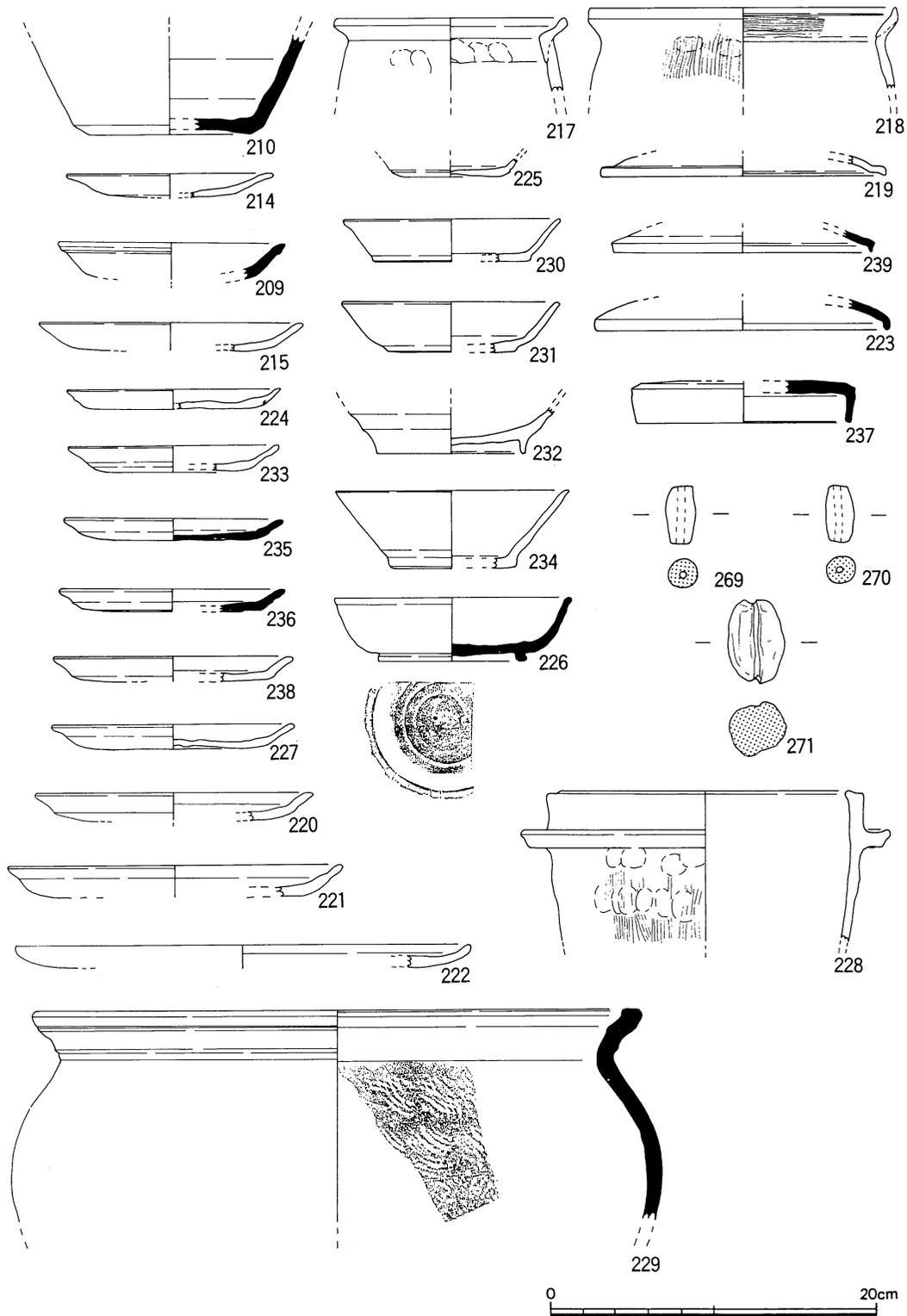


Fig 25 SB 6・7, SA 1・2, SD 22・23, P 7・8・17・20・23 出土遺物実測図

(SB 6 : 209・210・214・215・217・218, SB 7 : 219, SA 1 : 220・221,
 SA 2 : 222・223, SD 22 : 224・225, SD 23 : 226, P 7 : 227・228,
 P 8 : 229, P 17 : 230~232, P 20 : 233~237・269~271, P 23 : 238・239)

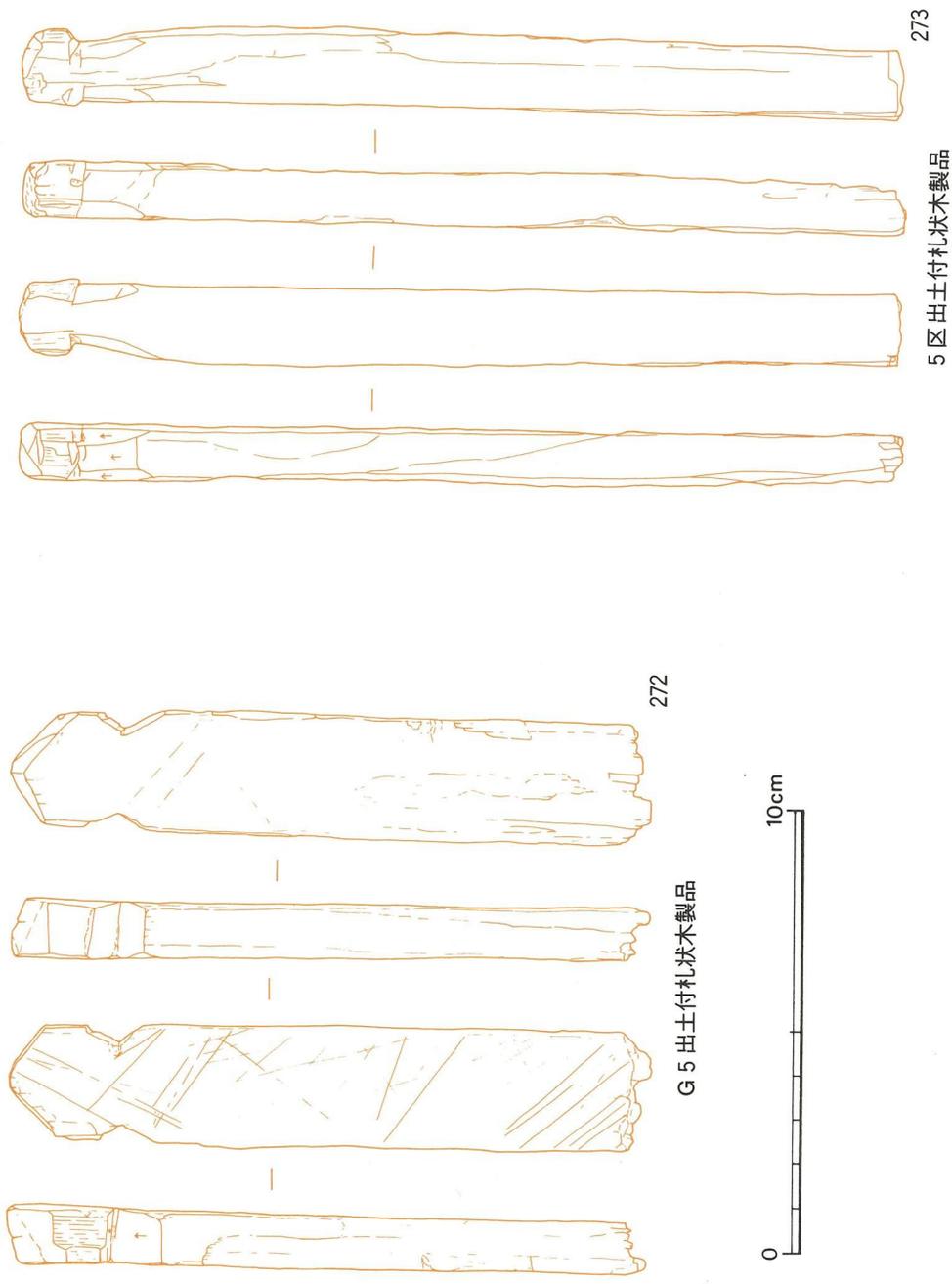


Fig 26 5 区・G 5 出土付札状木製品 実測図

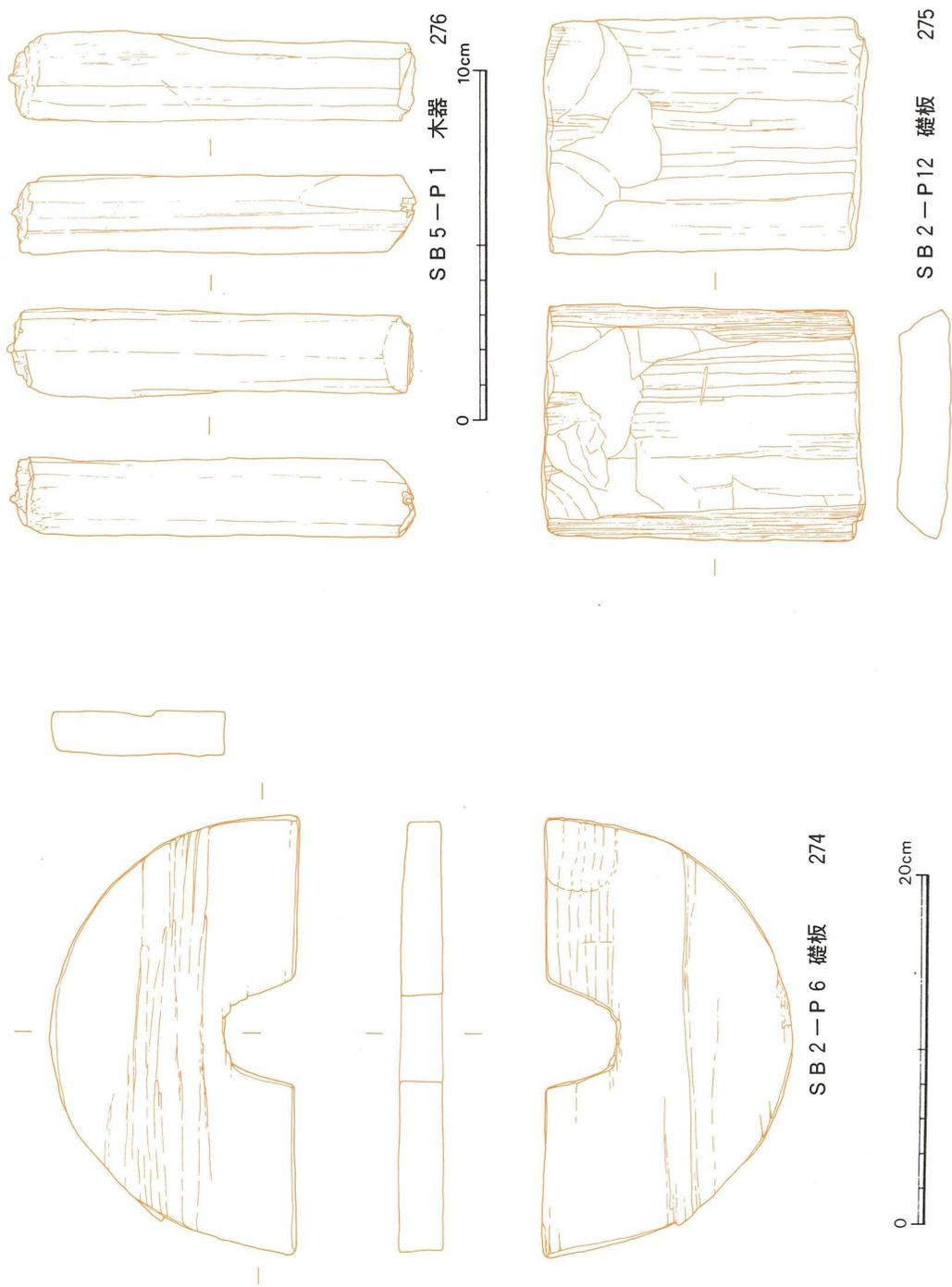
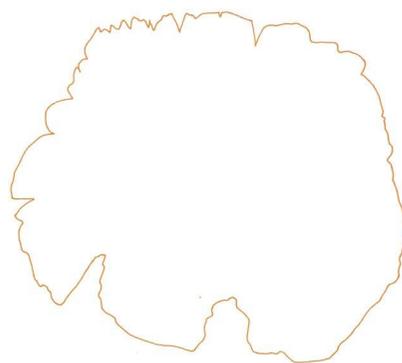
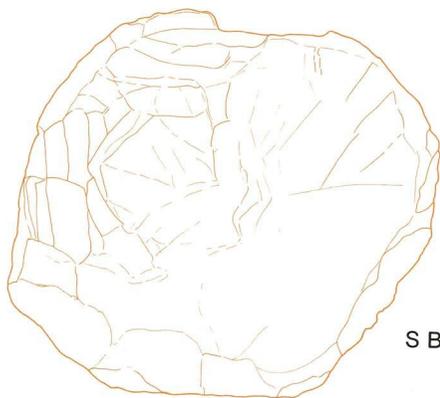


Fig 27 SB 2 - P 6 · P 12, SB 5 - P 1 出土木製品実測図



Fig 28 SB 1 - P 8 柱根实测图

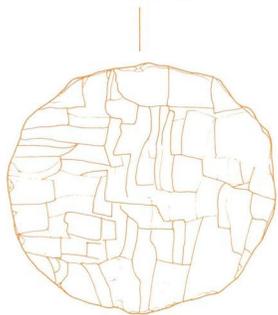
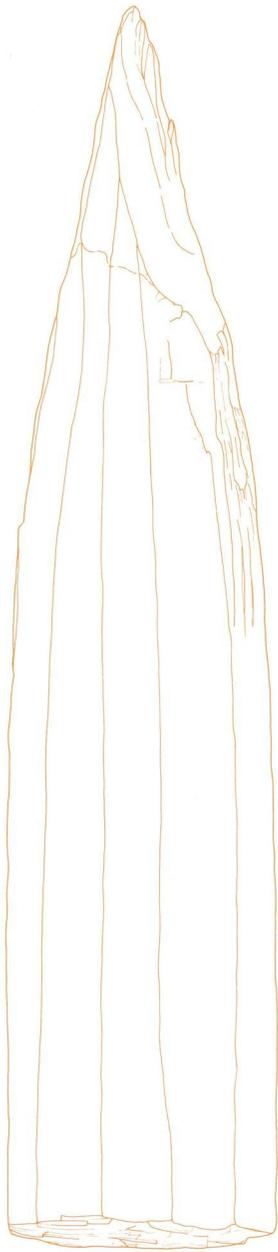


SB 1-P10
柱根

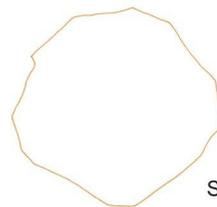
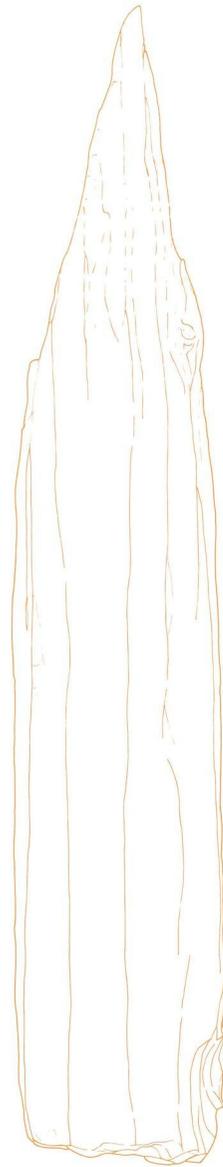
SB 1-P 5
柱根

0 20cm

Fig 29 SB 1-P 5 · P10 柱根実測図



SB1-P11
柱根



SB1-P12
柱根



Fig 30 SB1-P11 · P12 柱根実測図

第Ⅷ章 総 括

1 遺物を中心に

本遺跡で出土した遺物は、土器が多量を占めるが、他に陶磁器、土製品、木器、石器がある。土器には弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦質土器等が、陶磁器には緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、白磁等がある。木器には付札状木製品等があり、その他硯、瓦、管玉、石鏃等もある。

これらの出土遺物は、古く弥生時代、古墳時代のものもあるが、その大半は奈良時代後半から平安時代にかけてのものである。さて当地域における平安時代の土師器・須恵器の編年は出土資料の僅少さに因して未確立であるが、今回は9世紀代及び11世紀代の遺物が遺構に伴って出土し、これらの空白部分を埋めるのに十分な価値がある。特に、SB1～6 それに加えて一括遺物として認識でき得るSK5出土の土師器・須恵器・白磁を中心に若干の検討を加えることによって、問題点を投げかけることになると考える。

(1) SB1～SB6, P7, P20, P23資料

柱穴の掘方から出土したものが主であるが、柱根及び柱痕の残存するものからの出土の土師器・須恵器を中心に検討した。それも特に量の多かった土師器杯・皿及び須恵器皿についての形態上(A, B…)や法量上(大から小へI, II…)からの分類を行った。

土師器

皿A (184)

無高台のものである。平底から内湾気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。内・外面共に丁寧なヘラ磨きを施す。底部外面はヘラ切りである。法量は、口径18.8cm, 器高2.0cmである。

皿B (122, 221)

無高台のものである。平底から段を有して斜上外方に直線的に立ちあがり、口縁部は摘んで強くヨコなでを施す。底部はヘラ切りである。法量により皿B I (口径20.4cm, 器高2.0cm), 皿B II (口径15.0cm, 器高1.4cm) に分類される。

皿C (198, 211, 215, 223, 224, 227)

無高台のものである。平底から斜上外方に直線的に短く立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。内・外面共ヘラ磨き(198)のものがあるが他はロクロなで整形で、すべて底部はヘラ切りである。法量により皿C I (口径16.1cm, 器高1.7cm), 皿C II (口径14.4～14.7cm, 器高1.6～1.7cm), 皿C III (口径12.9cm, 器高1.2～1.6cm) に分類できる。

皿D (205, 214)

無高台のものである。平底から口縁部が外反して、口唇部は丸くおさめる。ロクロなで整形底部ヘラ切りである。法量により皿D I (口径12.6cm, 器高2.1cm), 皿D II (口径11.4～12.0cm, 器高1.3～1.4cm) に分類できる。

皿 E (123, 238)

無高台のものである。底部と体部との境が明瞭で、外反して短く立ちあがり口唇部は丸くおさめる。ロクロなどで整形、底部ヘラ切りである。法量により皿 E I (口径19.0cm, 器高1.5cm), 皿 E II (口径14.8cm, 器高1.5cm) に分類できる。

杯 A (186)

無高台のものである。平底の底部から直線的に斜上外方に立ちあがる。法量は口径13.2cm, 器高2.7cmである。底部の調整は観察できないがヘラ切りと考えられる。

杯 B (193)

無高台のものである。平底の底部から内湾気味に立ちあがり、口縁部で僅かに外反する。ロクロなどで整形である。法量は口径13.7cm, 器高2.9cmである。

杯 C (192, 212, 213)

ベタ高台の底部から内湾気味に立ちあがり、口縁部で僅かに外反する。ロクロなどで整形である。法量により杯 C I (口径13.0cm, 器高4.2cm), 杯 C II (口径12.8~14.0cm, 器高2.5~2.9cm) に分類できる。

杯 D (234)

ベタ高台の底部から直線的に立ちあがり、口縁端部で僅かに外反する。法量は口径14.4cm, 器高4.8cmである。

小杯 A (202, 204)

平底状の底部から外反気味に立ちあがる、ロクロなどで整形で、底部は回転ヘラ切りである。法量は口径8.1~9.3cm, 器高2.2~2.3cmである。

小杯 B (203)

丸底状の底部から外反気味に立ちあがる。ロクロなどで整形で、底部は回転ヘラ切りである。法量は口径9.3cm, 器高2.9cmである。

須恵器

皿 A (176)

無高台のものである。平底から直線的に立ちあがり、口唇部は面をなす。ロクロ整形。法量は口径14.4cm, 器高2.0cmである。

皿 B (177, 178)

無高台のものである。平底から段を有して斜上外方に直線的に立ちあがり、口縁部は摘んで強くヨコなどを施す。底部はヘラ切りである。法量は口径16.6~17.5cm, 器高2.1~2.4cmである。土師器皿 B と似る。

皿 C (235, 236)

無高台のものである。平底から口縁部が外反して、口唇部は丸くおさめる。口縁部と体部外面の境は強いなで調整で僅かに凹む。ロクロなどで整形、底部はヘラ切りである。法量は口径

13.3~13.6cm, 器高1.4~1.45cmである。

以上の如く分類を試みた。この分類の上に立ってこれらを幾内で詳細な編年が組まれている黒色土器, 緑釉陶器, 灰釉陶器を指標とすることによって, SB1~SB6, P7, P20, P23出土土師器, 須恵器等の時期比定行い, 併せて遺構の切り合い関係からもそれらの時期を追求し, 1つの試案として提出したのがFig 31である。土師器皿A(184)は, 口縁部が内湾気味に立ちあがり, 内・外面共に丁寧なヘラ磨きを施す奈良時代的なタイプである。土師器皿B(221), 須恵器皿B(177, 178)は, 県下では中村市風指遺跡⁽⁶⁾に例を見ることができ, 県外では平安時代前期Iの良好な一括資料を検出した斎宮跡SK4068⁽⁷⁾出土のものに近似する。口径に対して器高が高い等いわゆる「律令的土器様式」⁽⁸⁾に連なる土器であろうと考えられるが, 口縁部を摘んで強くヨコなでを施すこと等から土師器皿Aより新しい様相を持つものである。土師器皿Cは皿の中では最も出土数が多いが, 198は内・外面共ヘラ磨きが施される。古い手法の名残りと考えられ興味深い。須恵器皿C(235, 236)は, 須恵器が1部貯蔵形態に僅かに残るのに対して供膳形態が姿を消していく最終段階のもの可能性がある。ロクロ目が顕著で, 底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。幾内では糸切り底にすでに変化している時期であり, 土佐の後進性を示す。土師器皿D(205, 214)は, 平底から口縁部が外反して立ちあがり, 口径に対して器高が低くロクロなで整形を施す。土師器杯C(192, 212)は, ベタ高台を有し, ロクロ目が顕著であり土師器杯Aより新しい様相をもつものである。10世紀にも連続して出現するが, 土師器杯Cの初源を9世紀中頃とすることができるのではなかろうか。杯D(234)は, 県内では野市町深淵遺跡⁽⁹⁾に類似例を見るが, 9世紀後半~10世紀代にかけてのものともみて大きな差違はなかろう。SB1~SB6等を検出した7区出土の土器の比率を見れば, 土師器88%, 須恵器11%, 緑釉陶器, 黒色土器1%弱であり, 土師器の出土量が圧倒的に多い。香我美町十万遺跡⁽¹⁰⁾では, 土師器と須恵器の比率は3対1であったのに対して本遺跡では約9対1となっており, 本遺跡もロクロを使用した土師器の出現が同時に須恵器の退潮を物語るといふ全国的な傾向と一致する。このロクロ土師器を生産したのは, 本来須恵器を作っていた工人であり, ロクロ土師器が生産工程を合理化し, 生産を高めるべく出現したものである⁽¹¹⁾とするならば, 消費地の拡大要因となる歴史的背景の研究をも含めて, さらに土師器・須恵器研究を追求することが今後の課題となろう。

(2) SK5の土師器等

SK5からは, 土師器がほとんどを占める, ただ, 古い時期からの混入と考えられる少量の須恵器と時期決定の重要な資料の1つである白磁碗(116)が出土している。さて, SK出土の土師器のうち皿(103)は, 厚手の「て」の字状口縁のものである。「て」の字状口縁の皿は9世紀中頃から11世紀末葉まで存在し, 10世紀後半を境に器壁が薄手から厚手へと変化する傾向がある。⁽¹²⁾碗は, 短い貼付高台を有するものと, ベタ高台を有するものがあるが, いずれも底部外面は回転糸切り痕が顕著であり, ヘラ切りのものは1点も存しない。またロクロ

目が顕著でもある。その類似例として、土佐国衙跡⁽¹³⁾、十万遺跡 S D 2⁽¹⁴⁾を挙げることができるが、10世紀代に比定できる十万遺跡の S D 2⁽¹⁵⁾は、底部外面を静止糸切りのもとへラ切りのもとが混在することから S K 5 に先行すると考えてよからう。その点白磁碗からも S K 5 は11世紀末の年代観⁽¹⁶⁾を与えることができ得るのである。

(3) 緑釉陶器について

本遺跡からは、皿、碗、壺等が出土しているが、猿投産(86)が1点あるのみで他はすべて京都産である。253の壺(又は脚つきの甑)は、胎土の砂粒が多い等9世紀前半に比定できるものであるが、他は9世紀中頃から後期の範疇に置くことができる⁽¹⁷⁾。皿の底部外面は、糸切り痕のあるベタ高台(10)、削り出しのベタ高台(249, 254)と蛇ノ目高台(242)の三種がある。碗は輪高台(250)が付くものがある。9世紀における緑釉単彩陶器は、律令国家を支えた支配階級への供給を目的に出発した窯業部門であり、強い規制の下で閉鎖的に生産されたものである⁽¹⁸⁾。9世紀における緑釉陶器が、県下で最も多量に出土したことは、本遺跡の性格を考える上で重要な事柄である。また県下で出土した緑釉陶器(表3)は、253の壺以外は9世紀中頃以降のものであり、土佐に緑釉陶器が黒色土器等と共に多量に移入されてくるのは9世紀中頃以降ということに間違いのないようである。

以上本遺跡出土の土師器、須恵器、緑釉陶器等を簡単に序述してきたが、今後は資料の増加と共にこの作業をより一層緻密なものにしていくことが今後に課せられた問題点であろう。

第3表 緑釉陶器・二彩陶器県内出土地(平成元年3月現在)

器種	点数	出土地	報告書等
緑釉陶器 盤	1	吾川郡春野町石屋敷	山根・石屋敷遺跡
〃 杯	1	南国市比江新ラ田	土佐国衙跡発掘調査報告書第1集 S 55. 3
〃 不明	1	〃 ダイリ	土佐国衙跡発掘調査報告書第2集 S 56. 3
〃 碗	1	〃 府中	土佐国衙跡発掘調査報告書第3集 S 57. 3
〃 杯	2	〃 金星	土佐国衙跡発掘調査報告書第8集 S 63. 3
〃 碗・皿	6	香美郡野市町深測	深測遺跡発掘調査報告書 H 1. 3
二彩陶器 壺等	5	〃 〃	深測遺跡発掘調査報告書 H 1. 3
緑釉陶器 皿・碗・壺	45	香美郡野市町曾我	曾我遺跡発掘調査報告書
〃 皿	9	中村市森沢風指	後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ H 1. 3
〃 皿等	2	南国市国分	土佐国分寺発掘調査報告書 H 1. 3
〃 皿・碗等	20	南国市比江宇金屋	土佐国衙跡発掘調査報告書第9集 H 1. 3
〃 皿	4	幡多郡大方町加持宮崎	宮崎遺跡

第4表 古代モモ出土柱穴

柱穴	SB2-P1	SB2-P3	SB2-P7	SB6-P4	SB6-P5	SB6-P7	SB6-P9	SB6-P11	P7	P20
個数	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2

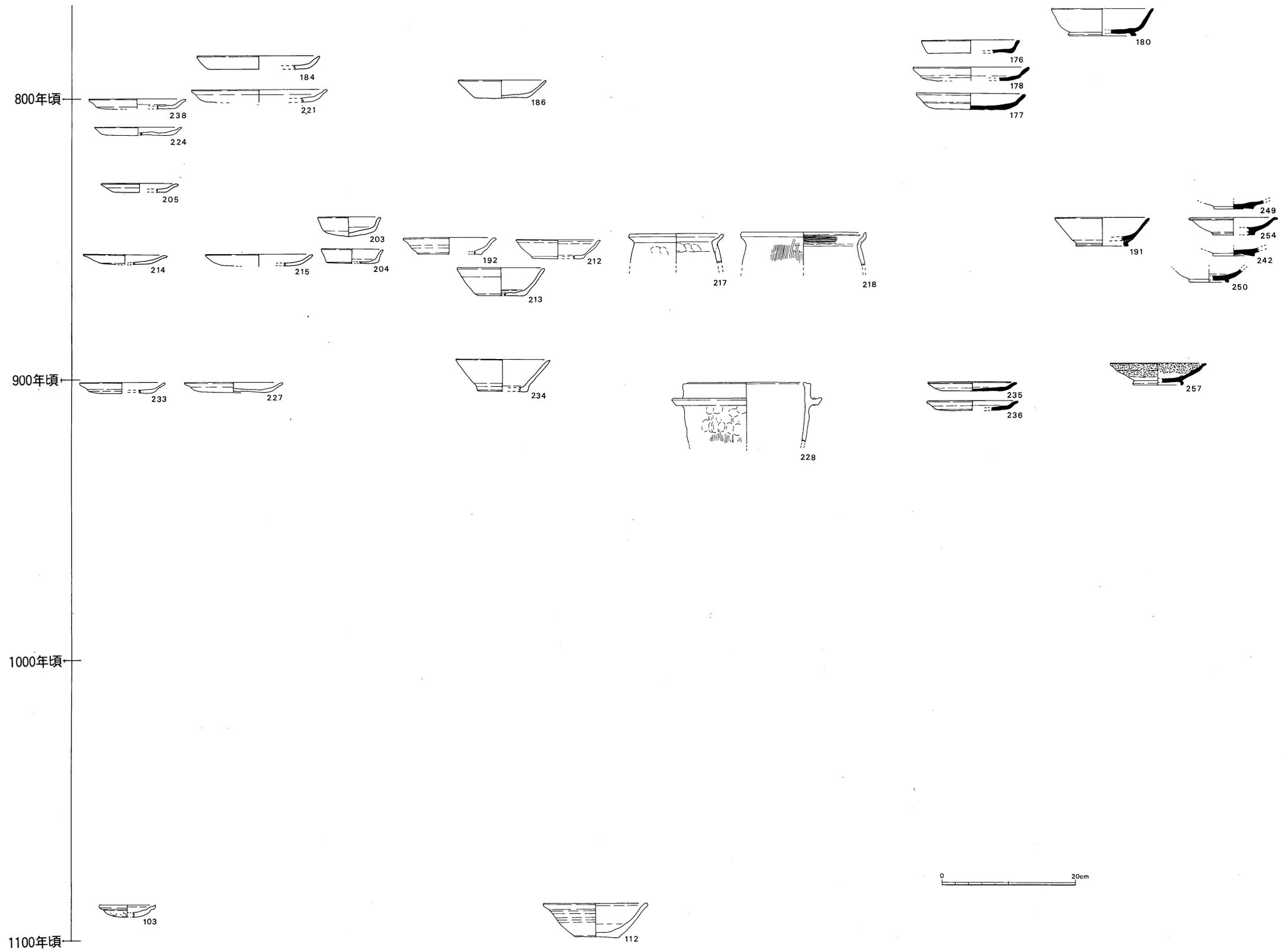


Fig 31 出土土器一覽

2 遺構について

当遺跡で検出した遺構は、掘立柱建物9棟、据柱礎石建物1棟、柵列6列、土坑5基、溝23条、不明遺構3、柱穴多数である。これらすべてについての所属年代や性格を明確にすることはできないが、建物の柱穴の切り合い関係、埋土、出土遺物等から奈良時代後半から平安時代の各遺構について第Ⅰ～Ⅵ期に大別し、変遷の大略を把むことが可能である。

第Ⅰ期（8世紀後半～9世紀初頭）

S B 1の時期である。S B 1は、柱根径が15～35cmとばらつきがあるが、これらは建て替えの結果と考えられる。そして、それらは桁行5間×梁間3間、面積で56.16㎡と大きく、「館」と考えて誤りはなかろう。

第Ⅱ期（9世紀初頭～9世紀中期）

S B 4、S B 5、S D 22の時期である。S B 4は桁行5間×梁間1間以上の建物であり、S B 5はS B 4を南北に拡張し桁行6間×梁間1間以上の建物を重複して建て替えたと考えられ、20～30年の時間差と考えてよかろう。主軸方向はN-14°35'-E前後である。S D 22はS B 6に切られ、S B 4・5に平行することからS B 4・5のいずれかに伴うのではなかろうか。

第Ⅲ期（9世紀中期～9世紀後期）

S B 2・S B 6・S A 2、S A 4、S D 7の時期である。S B 2は、すべての柱穴に礎盤または、礎盤の上に礎板が置かれ強固な造りと言える。また柱間距離も桁行1.45～1.65m間、梁間1.24～1.44m間と短く、面積は18.8㎡を測る規模の小さい建物であり収蔵施設としての利用が考えられる。S B 6は、間仕切りを有する4間×3間の建物であり、北面中央の2個の柱穴が存在しないことから間仕切りの北側は土間として使用の可能性を有す。又S B 6はS B 1と東西の柱筋をそろえて建てられているとも思われる。とすれば時期差が少ないのかもしれない。S B 2とS B 6は建物の西面及び東面を揃えて、約15尺の間隔をもって企画的に建てられている。S A 2は、S B 5を切ることで、S B 6の北面の柱筋に平行して位置すること等からS B 6に伴うものと考えたい。また3区のS A 4・S D 7は共に9世紀代と考えられるが、S B 2及びS B 6の主軸方向であるN-16°30'-Eと一致することから同時期と考えられる。S B 2・S B 6から出土した緑釉陶器は9世紀前半のもの（253）もあるが、他は9世紀中期～9世紀後期のものである。

第Ⅳ期（9世紀中期～9世紀後期）

S B 3・S B 2-P 7、S D 23の時期である。S B 3は総柱建物と考えられ、倉庫と思われる。S D 23はS B 2を切るが、S B 2-P 7は建物の柱穴としては他の柱穴に比べ規模、さらに廃棄の折に入れられたと思われる一抱え以上の数個の大石等不自然である。またS D 23の支流が切り込んでいること等からS B 2廃棄後は井戸として利用されたのではなかろうか。とすればS D 23と井戸としてのS B 2-P 7は同時期と考えることが合理的である。

第Ⅴ期（10世紀代）

S B 9・S B 10・P 7・P 20の時期である。S B 9は唯一の据柱礎石建物であるが、検出面の遺物の中に中世の土器は含まれず、IV層遺構検出面出土の灰釉陶器(257)から10世紀代の年代観が与えられる。P 7は下層面で検出したが削平の結果と考えられる。またP 20はS B 1を切るが灰釉陶器片の出土等から10世紀代と考えられる。

第VI期(11世紀末)

S K 5の時期である。検出された自然植物遺体及び昆虫遺体はいずれも水辺を好むこと等から、先述したように井戸と考えられる。周辺には建物跡が所在すると考えてよからう。

その他

S B 7は時期不明であるが、S B 8は、S B 1～S B 6と主軸方向がほぼ一致し、9世紀代と考えられる。

第5表 掘立柱建物・柵列・溝計測表

	桁行×梁間 (m) 及び柵・溝の長さ	棟方向及び 主軸方向	柱間距離 (m) 及び溝の幅(cm)	柱穴及び 溝の深さ(cm)
S B 1	5間(10.4)×3間(5.4)	N-14°30'-E	桁行1.96~2.10間 梁間1.66~1.80間	33~73
S B 2	3間(4.7)×3間(4.0)	N-16°30'-E	桁行1.45~1.65間 梁間1.24~1.44間	40~95
S B 3	3間(4.35)×1間以上	N-15°00'-E	桁行1.05~1.82間 梁間1.30~?間	28~52
S B 4	5間(10.7)×1間以上	N-14°40'-E	桁行2.10等間 梁間2.10~?間	13~46
S B 5	6間(12.45)×1間以上	N-14°50'-E	桁行1.80~2.20間 梁間2.0~?間	35~52
S B 6	4間(7.3)×3間(4.4)	N-16°30'-E	桁行1.63~2.0間 梁間1.3~1.7間	14~54
S B 7	2間(5.70)×1間以上	N-20°20'-E	桁行2.2~3.7間 梁間2.2~?間	23~32
S B 8	2間(4.7)×?	N-14°-E	2.35等間	13~18
S A 1	2間(5.0)	N-75°05'-W	2.5等間	35~45
S A 2	3間(3.95)	N-76°50'-W	1.3~1.35間	15~48
S A 4	6間(13.46)	N-16°30'-E	2.1~2.34間	22~34
S D 7	18.10	N-16°30'-E	60~84	34~40
S D 22	9.6	N-15°-E	45~65	15~23
S D 23	11.1	N-11°50'-E	12~45	10~40

以上、VI期に大別したが、各建物は近接しており、相互に関係を持ちながら営まれてきた可能性がある。SB1～SB6・SB8は、SB4・SB5のように柱筋を一にしての建て替えや、同じ柱穴を利用しての一部建て替えも認められるが、長い期間における使用ではなく約100年間を想定できる。これらの建物は主軸方向がほぼ一致しており、規格性をもって整然と建てられている。また「土佐の国府の地割は、ほぼ南北位をとるにかかわらず、付近の条理地割はN-12°~14°-Eの傾向きをもっている」⁽¹⁹⁾といわれ、特にSB1・SB3・SB4・SB5・SB8は条理制にほぼ則すると考えられる。建物群の柱穴の平面プランは円形及び隅丸方形で一辺が54~115cmを測る大きなものであり、一般の住居とは考えられない。

本遺跡で出土した特異な遺物として古代モモの種子が、建物の柱穴の掘方から出土しており、地鎮のためと考えられ、精神文化を知るうえで興味深い。また、注目に値する遺物として、円面硯6個、転用硯4個、「山」の字と考えられる墨書土器1点、緑釉陶器45点、付札状木製品2点等が出土しており、いずれも一般庶民と無縁のものと考えられる。

以上のことから、官衙跡であることは疑いないところである。SD7、SA4は官衙を区画する構と堀とを考えてよからう。

これらの建物群は官衙の中心を形成するとは考えられず、立地条件からむしろ官衙域の西端部に属し、本体は東及び東北方向の標高の1段高い平坦部に広がるのが想定される。6・7区から東へ約400mの下分遠崎遺跡⁽²⁰⁾の西端部で幅4m以上の平安時代の大溝が検出されており、ここを曾我遺跡の東限とする。しかしこれが即官衙域の東限ということについてはここ当分不明という語で表現せざるを得ない。

本遺跡に近接する十万遺跡⁽²¹⁾では、8世紀代に繁栄を極め11棟の規格性を持った「豪族の館」が出現したが、9世紀代には全く姿を消し、再び10世紀代に掘立柱建物が1棟のみを再現しているが、そこには8世紀代の繁栄は見られない。一方本遺跡は8世紀代の遺物は見られるが、出土遺物から十万遺跡⁽²²⁾と入れ変わりに活気を呈する感があり、曾我遺跡と十万遺跡⁽²³⁾のこれら2つの遺跡は密接に関係すると考えられる。

官衙としての曾我遺跡の性格については、トレンチ調査であるため判断することは難しい。出土遺物は、緑釉陶器、黒色土器、灰釉陶器、土師器等搬入品が多く中央との結びつきを想定させるものであるが、現時点では宗我郷⁽²⁴⁾の中心に所在すると考えられること等から「郷家」あるいは、郡衙クラスの役所とも考えられるが、なお、今後本遺跡を含めて広範な遺跡分布と発掘調査の上に立って検討していかなければならない研究課題である。 (高橋啓明)

第6表 古代「硯」県内出土地（平成元年3月現在）

硯	点数	出土地	期間	報告書
円面硯	1	南国市比江字神ノ木	S 54.4.20~5.2	土佐国衙跡発掘調査報告書第1集 S 55.3
〃	1	〃 〃 字宮ノ西	S 54.8.20~9.12	土佐国衙跡発掘調査報告書第1集 S 55.3
風字硯	1	〃 〃	〃	土佐国衙跡発掘調査報告書第1集 S 55.3
転用硯	1	〃 〃	〃	土佐国衙跡発掘調査報告書第1集 S 55.3
円面硯	1	〃 字クゲ	S 54.11.6~12.11	土佐国衙跡発掘調査報告書第1集 S 55.3
〃	1	〃 字府中	S 56.9.10~11.4	土佐国衙跡発掘調査報告書第3集 S 57.3
風字硯	1	〃 〃	〃	土佐国衙跡発掘調査報告書第3集 S 57.3
円面硯	1	香美郡野市町深測	S 62.9.28~11.30	深測遺跡発掘調査報告書 H 1.3
〃	6	〃 曾我	S 63.3.7~5.7	曾我遺跡発掘調査報告書 H 1.3
転用硯	4	〃 〃	〃	曾我遺跡発掘調査報告書 H 1.3
風字硯	1	〃 深測	S 63.6.22~8.13	深測遺跡発掘調査報告書 H 1.3
円面硯	1	南国市比江字金屋	S 63.10.12~12.10	土佐国衙跡発掘調査報告書第9集 H 1.3

種類	計
円面硯	12
風字硯	3
転用硯	5

第7表 古代「墨書・刻書土器」県内出土地（平成元年3月現在）

器種	文字	出土地	期間	報告書
須恵器底部(刻書)	「稜道」	南国市比江字松ノ下	S 61.10.16~12.19	土佐国衙跡発掘調査報告書第7集 S 62.3
土師器高杯脚(墨書)	「官」	〃 字宮ノ西	S 54.8.20~9.12	土佐国衙跡発掘調査報告書第7集 S 62.3
土師器杯(〃)	「水」	香美郡野市町深測	S 62.9.28~11.30	深測遺跡発掘調査報告書 H 1.3
須恵器蓋(〃)	「山」	〃 曾我	S 62.3.7~5.7	曾我遺跡発掘調査報告書 H 1.3
須恵器蓋(刻書)	「大」	〃 深測	S 63.6.22~8.13	深測遺跡発掘調査報告書 H 1.3
須恵器蓋(刻書)	「上」	〃 土佐山田町大法寺	不明	土佐山田町史・大法寺1号古窯址(大法寺古窯址群)
須恵器蓋(刻書)	「禾」	〃 〃	〃	土佐山田町史・大法寺1号古窯址(大法寺古窯址群)
須恵器蓋(刻書)	「力」	〃 〃	〃	土佐山田町史・大法寺1号古窯址(大法寺古窯址群)
土師器皿(墨書)	不明	幡多郡大方町加持字宮崎	S 63.12.8~12.10	宮崎遺跡 H 1.3
土師器皿(墨書)	「住」?	〃 〃	H 1.3.6~3.10	〃

(註)

- (1) 高橋啓明・出原恵三『下分遠崎遺跡発掘調査概報』高知県香我美町教育委員会 1987年
- (2) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』高知県香我美町教育委員会 1988年
- (3) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『深淵遺跡発掘調査報告書』高知県野市町教育委員会 1989年
- (4) 財団法人古代学協会『平安宮推定大極殿発掘調査報告書』 1983年
- (5) 『和名類聚抄』によれば、土佐国には7郡43郷があり、さらに香美郡には安須、大忍、宗我、物部、深淵、山田、石村、田村の8郷があった。
- (6) 出原恵三・廣田佳久・松田直則『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 風指遺跡・アゾノ遺跡』高知県教育委員会 1989年
- (7) 横山洋平・山沢義貴・田坂仁・泉雄二・上村安生『三重県齋宮跡調査事務所年報1987 史跡齋宮跡発掘調査概報』三重県教育委員会・三重県齋宮跡調査事務所 1988年
- (8) 西弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986年 『考古学論者』小林行雄博士古稀記念論文集 平凡社 1982年
- (9) (3)に同じ
- (10) (2)に同じ
- (11) 巽淳一郎「平城宮における焼物容器」『月刊文化財No234』文化庁 1983年
- (12) 木村泰彦『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第2集』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 1985年
百瀬正恒「乙訓郡出土の両面黒色土器について」『長岡京ニュース第31号』 1984年
- (13) 廣田佳久・森田尚宏他『土佐国衙発掘調査報告書』 第1集～第9集』高知県教育委員会、南国市教育委員会 1980～1989年
- (14) (2)に同じ
- (15) (2)に同じ
- (16) 奈良国立文化財研究所巽淳一郎氏の御教示による。
- (17) 京都市埋蔵文化財研究所平尾政幸氏の御教示による。
- (18) (1)に同じ
- (19) 『高知県史 古代中世編』高知県 1971年 藤岡謙二郎『都市及び交通路の歴史地理学的研究』
- (20) (1)に同じ
- (21) (2)に同じ
- (22) (2)に同じ
- (23) (2)に同じ
- (24) (5)に同じ

第8表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考	
Fig 7 1	1区	須恵器 蓋	15.2 1.0 — —	—	頂部欠損, 口縁部は「S」字状に 屈曲し口唇部は丸くおさめる。	全面ヨコなどで調整を施す。		
		蓋	— 1.9 — —	—	頂部欠損, 口縁部よりやや内側に 断面三角形のかえりを有す。	全面ヨコなどで調整を施す。		
		土師器 杯	14.5 (4.2) — —	—	内湾気味に立ちあがり, 口縁部は 外反して口唇部は丸くおさめる。	体部外面にロクロ目が顕著である。 内・外面共にヘラ磨きを施す。		
		須恵器 杯	— (1.9) — 5.6	—	外方に踏ん張る短い貼付高台を有し, 高台端部は丸味をおびる。	体部外面下端に左方向に走る弱い 削りを施す。底部外面に糸切り 痕を残す。		
		杯	— 9.8 (2.5) — —	—	ベタ高台を有す。底部と体部との 境に段を有す。体部は内湾気味に 立ちあがる。内・外面共に火樫を 認める。	体部外面に僅かにロクロ目を残す。 底部外面に回転糸切り痕を残す。		
		須恵器 杯	— (1.5) — 8.2	—	外方に踏ん張る貼付高台を有し, 畳付けは僅かに凹む。体部は底部 から丸みをもって立ちあがる。	底部外面はヘラ切り後, 左方向 の削り調整を施す。		
		土師器 杯	15.5 3.6 — —	—	内湾気味に立ちあがり中位で僅かに 凹状をなす。口縁端部は内方に 肥厚し, 内側に弱い段を有す。口 唇部は丸くおさめる。	体部外面は横方向に丁寧なヘラ 磨きを施す。体部内面上半は右 上り, 下半は縦方向の暗文を施す。	搬入品。	
		皿	21.6 2.1 — —	—	内湾気味に立ちあがり口縁端部は 肥厚し, 口唇部は丸くおさめる。	体部外面は丁寧なヘラ磨きを施す。 体部内面は中心から放射状に 暗文を施す。	搬入品。	
		須恵器 甕	15.0 (12.0) — —	—	肩の張った胴部上端から頸部はや や外反気味に短かく立ちあがり口 縁端部は肥厚して僅かに凹む。	胴部外面叩き調整の後横方向の ハケ調整を施す。胴部内面に青 海波文を認める。		
14	I区 IV層	土師器 甕	29.3 (8.2) — —	—	口縁部は「く」の字状に屈曲して 外反する。口縁端部は強いヨコな で調整によって凹み上方に肥厚し, 口唇部は丸くおさめる。	胴部外面は荒い木理のハケ原体 による縦方向のハケ調整を施す。	胴部外面は煤ける。 胴部内面にこびり つきを認める。	
15	2区	杯	— (2.2) — 6.6	—	底部外周端部に断面逆三角形の高 台を有す。底部から内湾気味に立 ちあがる。	観察不可能。		
16		須恵器 蓋	14.7 2.2 — —	—	平坦な頂部から内湾気味に下降し 口縁部に至る。口唇部は丸くおさ める。	頂部外面 2/3, 左方向のヘラ 削り他は内・外面共ヨコなどで調 整を施す。		
17		杯	16.0 (2.6) — —	—	内湾して立ちあがり, 口縁部は外 反して口唇部は丸くおさめる。	全面ヨコなどで調整を施す。		
18		III層	高杯	— (5.7) — 8.5	—	脚部は一旦「ハ」の字状に下降し, 下端部で水平状に開く。端部は下 方向に揃み丸くおさめる。	全面ヨコなどで調整を施す。	
19		土師器 羽釜	22.0 (5.6) — —	—	口縁端部は僅かに外傾して面をな す。断面台形の鑊は口縁端部と平 行する。	鑊接合部に指頭圧痕を残す。鑊 上面にヨコなどで調整を施す。他 は観察不可能。		
20		瓦質土器 鍋	17.6 (4.5) — —	—	口唇部は面をなす。口縁端部から 2cm下がったところにしっかりし た鑊を施す。	胴部外面上端は横方向のなどで調 整, 内面は横方向のハケ調整を 有す。		
24		2区 IV層	須恵器 杯	— (2.6) — 6.8	—	ベタ高台を有し, 内湾気味に立ち あがる。内面に火樫を認める。	底部外面に糸切り痕を認める内 面ヨコなどで調整を施す。	
12	I区 III層	瓦	—	—	凸面は平行叩き。凹面の布目は細 かい。		軟質。	

第9表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig 9 25	3区	土師器 杯	14.1 (3.0) — —	底部から直線的に外方に立ちあがり、体部中位で再び内側に屈曲して立ちあがる。口唇部は丸くおさまる。	内・外面には指頭圧痕を残す。	
26		小皿	8.2 1.6 5.0 —	口縁部は短く上外方へのび、口唇部は丸くおさまる。	底部外面には回転糸切り痕がみられる。	
27		小皿	8.3 1.7 — 4.2	口縁部は外方へのび、口唇部は僅かに肥厚して丸い。	底部外面には回転糸切り痕がみられる。	
28		椀	14.0 (3.4) — —	内湾気味に立ちあがり、口縁部はやや外反する。	外面はロクロによるヨコなで調整を施す。	
29	4区 Ⅵ層	土師器 椀	12.1 (3.9) — —	口縁部破片であり、斜め上方へのび、端部は細く外傾する。	内・外面共にロクロによるヨコなで調整を施す。	
30		椀	— (3.0) 6.6 —	外方に踏んばる輪高台を有する。高台脇には弱い沈線がある。	内面はヘラ磨きを施す。	内・外面に炭素が付着する。
31		椀	— (1.6) 6.8 —	直立気味の高台をもつ。	回転糸切り後、高台を貼付する。高台脇には強いなで調整がみられる。	
32	3区 Ⅴ層	須恵器 蓋	— (1.8) — —	頂部外面にヘラ記号「×」がみられる。	内・外面共に磨耗が激しく調整不明。	
33		杯	14.7 3.8 — —	底部から丸味をもって立ちあがる。	体部内外面、内底は強いヨコなで調整を施す。内底にはロクロ成形で生じた凹凸が顕著である。	
34		杯	— 2.4 9.0 —	底部から丸味をもって立ちあがる。高台底面は凹状を呈す。	高台は底部外縁に貼付し、貼付後内面に強いヨコなでを行う。	
35		壺	— (4.9) 12.0 —	外傾する高台をもつ底部であり、平坦な底部より直立して立ちあがる。	内・外面共に強いヨコなで調整がみられる。	
36		壺	— (6.3) 14.0 —	外傾する高台をもつ底部より、直線的に立ちあがる。	底部外面は左方向への弱いヘラ削り、内・外面共にヨコなでを施す。	
37	4区	壺	— (3.9) 16.4 —	安定した高台をもつ。	外面はヘラ削りを行った後、なで調整を施す。	内・外面に自然釉がかかる。
38	Ⅵ層	杯	— (1.9) 6.2 —	ベタ高台を有する。	底部外面は回転糸切り後、部分的にヘラ削りを施す。	
40	3区 Ⅲ層	瓦質土器 鍋	20.6 (5.2) — —	口縁部は弱い段部をつくって立ちあがり、口唇部は面をなす。口縁端部から約1.8cm下がったところにしっかりした凸帯を有す。	外面には指頭圧痕を残す。	
41	Ⅳ層	鍋	20.7 (3.5) — —	口縁部は外方にやや肥厚し、口唇部は面をなす。口縁端部から約2.0cm下がったところに断面三角形の凸帯を有す。	外面はなで調整を施し、内面には指頭圧痕を残す。	
43	Ⅵ層	製塩土器	— (5.7) — —	内湾気味に立ちあがる。	内面に布目痕があり、外面には指頭圧痕を残す。	
47	Ⅳ層	瓦	—	平瓦である。	凹凸両面にハケ調整を施し、凹面のハケは交錯している。	軟質
49	5区 Ⅱ層	土師器 高杯	— (4.3) — —	長方形の透しをもつ。分割成形によるもので、杯部との接合面で剝離している。	接合面は接合を容易にするため凹凸を施す。外面にはスリップがみられる。	搬入品と考えられる。

第10表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig 9 50	5区 IV層	土師器 皿	15.5 (2.3) — —	底部から直線的に立ちあがり、口唇部は丸くおさまる。	器面は磨耗が著しく調整不明。	
51		椀	16.2 (3.3) — —	体部から口縁部にかけて緩やかに立ちあがる。口縁部は短く外反し、口唇部は丸くおさまる。	口縁部外面はヨコなで調整を施す。	
52	II層	椀	— (3.5) — 5.3	輪高台を有する底部から緩やかに立ちあがる。	内・外面共に磨耗が激しく調整不明。	
53	III層	椀	— (2.7) — 6.8	輪高台を有する底部から内湾気味に立ちあがる。	内・外面共に磨耗が激しく調整不明。	
54	II層	椀	— (1.8) — 7.0	ベタ高台を有する底部から内湾気味に立ちあがる。	外面にはロクロによるなで調整を施す。外底には回転糸切り痕が残る。高台の切り出しは丁寧である。	
55	IV層	椀	— (1.9) — 7.6	ベタ高台を有する底部から内湾気味に立ちあがる。	高台外面は強いヨコなで調整を施す。	
Fig 11 56	V層	壺	5.6 (4.2) — —	丸味を帯びた上胴部から口縁部が垂直に立ちあがり、口唇部は丸くおさまる。	内・外面共にヨコなで調整を施す。	搬入品と考えられる。
57		壺	7.5 (5.1) — —	肩が強く張り、口縁部は短く外反する。	内面にはなで調整を施す。	搬入品と考えられる。
58		壺	— (4.1) — 7.2	若干膨らみ気味の底部から強く屈曲して直線的に立ちあがる。	外面はヘラ削りの後をなで消し、さらに左下がりのハケ調整を施す。	搬入品と考えられる。
59		甕	12.5 9.6 — —	口縁部は強く外反し、口唇部は丸くおさまる。	外面には右上がりの平行叩きを施し、指頭圧痕を残す。上胴部外面は叩き目をなで消している。	搬入品と考えられる。
60		甕	26.6 (5.8) — —	口縁部はやや内湾気味に外反し、口唇部は内傾する平面を有す。	体部外面はハケ調整、口縁部内面はヨコ方向のハケ調整を施す。	
61		甕	32.3 (13.3) — —	口縁部は頸部から大きく外反する。	口縁端部は垂直につまみ上げ、ヨコなでを行う。外面は横ハケ調整、口縁部内外面はヨコなで調整を施す。	内・外面共に炭素が付着する。
62		甕	43.5 (6.6) — —	口縁部は内面に稜をなして外反し、端部は凹面を有す。	外面にはなで、内面にはハケ調整を施す。外面には指頭圧痕を残す。	
63	IV層	須恵器 蓋	10.8 (1.6) — —	口縁部内面には、端部から約0.8cmのところから断面三角形のかえりがある。	口縁部内・外面共に強いヨコなで調整を施す。	外面には僅かに自然釉が残る。
64	V層	蓋	8.8 (2.0) — —	頂部は緩やかなドーム状を呈するが、口縁部付近で屈曲する。口縁部内面には、端部から約0.5cmのところから断面三角形のかえりがある。	口縁部はつまみ出し、ヨコなで調整を施す。	
65		蓋	10.7 (2.0) — —	口縁部は僅かに肥厚し、口唇部は丸くおさまる。口縁部内面には、端部から約0.8cmのところから断面三角形のかえりがある。	口頂部面には左方向のヘラ削りが顕著にみられる。	
66		蓋	11.4 1.7 — —	平坦な頂部から緩やかにカーブを描き口縁部に至る。	口縁端部は下方へ強くつまみ出し、ヨコなで調整を施す。内・外面共にヨコなでを行う。	
67		蓋	15.9 1.4 — —	平坦な頂部をなし、口唇部は丸くおさまる。	口縁端部は小さく下方へつまみ出し、強いヨコなで調整を施す。外面は左方向のヘラ削り後、なで調整を施す。内面にはなで調整がみられる。	

第11表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 量 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig 11 68	5区 IV層	須恵器 蓋	14.8 (1.1) —	平坦な頂部から「S」字状に屈曲し、口縁部へ至る。口縁部は面をなす。	内・外面共にヨコなで調整を施す。	
69	V層	蓋	14.5 1.8 —	擬宝珠形をつまみをもつ。	頂部外面にはヨコなで調整後、左方向のヘラ削りを行う。	
70		転用硯	13.4 (1.4) —	高台状をつまみを有し、口縁部は内側に傾き、下方へつまみ出されている。	頂部は右方向のヘラ削り後、横なで調整、口唇部は強い横なで調整を施す。	内面の転用硯面は著しく磨耗し、墨が付着する。
71		蓋	—	平坦な頂部に擬宝珠形をつまみが付く。	内面にはロクロによるヘラ削りが顕著にみられる。	外面には自然釉がかかる。
72		蓋	— (1.6) 6.2	平坦な頂部に環状をつまみが付く。	内面にはロクロによるヨコなで調整を施す。	
73	II層	杯	12.1 — —	受部は水平であり、立ちあがりは内傾する。口唇部は丸くおさまる。	全面にヨコなで調整を施す。	
74	IV層	杯	9.7 (2.2) —	受部は水平であり、口唇部は丸くおさまる。退化した立ちあがり内傾する。	全面にヨコなで調整を施す。	
75		杯	11.7 4.3 —	高台は外方へ強く踏んばり、底部から直線的に立ちあがる。口唇部は丸くおさまり、外面に沈線が巡る。	内・外面共にヨコなで調整を施す。	
76		杯	12.2 4.4 —	高台を有す底部から直線的に立ちあがり、口唇部は丸くおさまる。	内・外面共にヨコなで調整を施す。	
77	V層	杯	7.3 — (1.9) —	高台を有す底部からやや内湾気味に立ちあがる。	底部外面はヘラ削り後、なで調整を施す。内面にはヨコなで調整がみられる。	
78		杯	8.8 — (2.6) 9.6	平らな底部には高さ0.7cmの高台が付く。端部はやや丸味を帯びる。	底部外面は回転ヘラ切り後、一部なで調整を施す。高台脇は面取りを行う。内面はヨコなで調整を施す。	
79	IV層	杯	13.7 4.1 —	断面逆台形の高台を有し、体部は底部外周端部から斜上外方に立ちあがる。口縁部外面は僅かに凹む。	内・外面共にヨコなで調整を施す。体部内面には僅かにロクロ目を残す。	
80		杯	13.6 3.8 —	平らな底部に「ハ」の字状の高台が付く。底部から丸味をもって立ちあがり、僅かに内湾気味に口縁部へ至る。口唇部は丸くおさまる。	底部外面は左方向のヘラ削り後、ヨコなで調整を施す。内・外面共にヨコなで調整を施す。	
81	II層	碗	— (2.1) —	外方に踏んばる高台を有す。高台底部は僅かに凹む。	外面にはヘラ削りが顕著にみられる。高台底部は強いなで調整を施す。	
82	V層	壺	— (6.1) —	僅かに外方に張り出す高台を有し、下胴部はやや膨らみ、内側へ狭く立ちあがる。	外面はなで調整を施す。	搬入品と考えられる。
83	IV層	壺	18.0 (6.2) —	頸部は一旦垂直に立ちあがった後、外方に伸びる。口縁部は上下に肥厚し、口唇部は面をなす。口縁部内面にヘラ記号「+」がある。	胴部外面には木理が荒い平行叩き目がみられる。口縁部内・外面はヨコなで調整を施す。	
84	V層	墨書土器	18.6 (3.5) —	平坦な頂部から緩やかに口縁部に至る。内面に「山」とみられる墨書を読む。	頂部外面は回転ヘラ削り後、なで調整を施す。口縁部は下方に強くつまみ出し、内・外面はヨコなで調整を施す。	
Fig 9 44		製塩土器	— (5.2) —	内湾気味に立ちあがる。	内面に布目痕があり、外面には指頭圧痕を残す。	
48	II層	瓦	—	平瓦である。	凸面は縄目の叩きを施し、凹面には細い布目痕が残る。端部にはヘラ整形みられる。	凹面の細い布目痕は、一部端部まで及ぶ。軟質。

第12表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig 12 89	3区 S B10	土師器 杯	9.2 1.7 — 5.4	口縁部は斜め上方へのび、僅かに外反する。口唇部は丸くおさまる。	底部外面には粘土紐接合痕がみられる。	
90	S K 4	高杯	(5.3) — —	円柱状の脚部で、外反しながら下降する。	外面はヨコなで調整を施す。	
91		須恵器 蓋	13.7 (1.1) — —	口縁部破片で、口唇部は面をなす。	口縁端部を下方につまみ出し、内・外面共にヨコなで調整を施す。	
92	S D 6	蓋	9.7 (0.85) — —	内面には端部から約1.1cmのところから断面三角形のかえりがある。	頂部外面は回転ヘラ削り、口縁端部内・外面共にヨコなで調整を施す。	
93	S D 7	蓋	13.8 1.5 — —	平坦な頂部から下方へ傾斜し、口唇部は丸くおさまる。	外面はロクロによるヨコなで調整を施す。	
94		蓋	22.6 1.7 — —	平坦な頂部から若干下方へ傾斜し、口唇部は内傾する面をなす。	頂部外面は左方向の回転ヘラ削りが顕著である。	
95		蓋	— — — —	口縁端部は一旦反り上がった後、下方へ傾斜する。	口縁端部は強いヨコなで調整を施す。	
96	S D 7'	土師器 蓋	— — — —	口縁部破片で、口縁端部内面は段をなす。	口縁端部は下方につまみ出し、ヨコなで調整を施す。	
97		蓋	16.8 (1.7) — —	平坦な頂部からやや外反しながら口縁部に至る。口唇部は丸味を帯びる。	頂部は回転ヘラ削り、体部はヨコなで調整を施す。口縁端部は斜外方につまみ出す。	
98		椀	— (3.3) — —	輪高台を有す底部から内湾して立ちあがり、高台は内傾して面をなす。	器面は磨耗が著しく調整不明。	白く発色している。
99		須恵器 蓋	13.6 2.4 — —	やや平坦な頂部に擬宝珠形のつまみをもつ。	口縁部は下方につまみ出し、内・外面共にヨコなで調整を施す。	
100	P 3	土師器 甕	— (6.6) — —	丸味を帯びた底部をもつ。	外面は木理の荒いハケ調整を縦方向に、細かいハケ調整を右下がりに施す。内面は荒いハケ調整を施す。	二次的な火を受けて紅色に変色している。
101	P 46	須恵器 蓋	17.6 (1.1) — —	平坦な頂部をなし、口縁部は下方につまみ出す。口縁端部は屈曲して面をなす。	内・外面共に磨耗が著しく調整不明。	
102	5区	土師器 壺	— (8.4) 7.9 5.7	幅広い底部から直線的に外方へ立ちあがり、胴部中位で僅かに内傾し、肩部で強く内湾する。	肩部には径0.8cmの円孔を焼成前に4カ所穿つ。	底部から胴部下半にかけて煤が付着する。搬入品と考えられる。
103		皿	8.6 1.8 — —	「て」の字状が口縁を有し、口唇部は面をなす。	口縁部はつまみ出し、外面には指頭圧痕があるがなで消す。内面はなで調整を施す。	搬入品と考えられる。
104		杯	11.9 (2.3) — —	体部から口縁部にかけて緩やかに立ちあがり、口縁端部は内傾する面をなす。	口縁端部は外方につまみ出す。外面は横方向のヘラ削り、内面は右下がりのヘラ削りを施す。	
105	S K 5	椀	15.0 (2.8) — —	口縁部は直線的に開き、口唇部は丸くおさまる。	外面はヨコなで調整の後、弱いヘラ削りを施す。	
106		椀	15.0 2.7 — —	体部は緩やかに内湾して立ちあがり、口縁部はやや外反し終わる。口唇部は丸くおさまる。	内・外面共にロクロによるヨコなで調整を施す。	
107		土師器 椀	14.4 (2.6) — —	内湾気味に立ちあがり、口縁端部はやや肥厚する。	内・外面共にロクロによるヨコなで調整を施す。口縁部外面には火樺がみられる。	

第13表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 法量 (cm) 底径	形態・文様	手法	備考
Fig 12 108	5区 S K 5	椀	13.8 (3.0) — —	内湾気味に立ちあがり、口縁部は短く外反する。口唇部は丸くおさまる。	内・外面共にロクロによるヨコなで調整を施す。	
109		椀	15.9 (3.8) — —	内湾気味に立ちあがり、口縁部は短く外反する。口唇部は丸くおさまる。	内・外面共にロクロによるヨコなで調整を施す。口縁部内外面には火摺がみられる。	
110		椀	15.8 (4.6) — —	体部は緩やかに内湾し、口縁部は短く外反する。	内・外面共にロクロによるヨコなで調整を施す。	
111		椀	— (4.0) — 6.0	高台は「ハ」の字状に開き、丸味を帯びて立ちあがる。	外面はロクロ成形後、左方向の弱いヘラ削りで最終調整を行う。高台内面は強いヨコなで調整を施す。	
112		椀	15.5 5.25 — 6.5	内湾気味に立ちあがり、口縁部は短く外反する。口唇部は丸くおさまる。	外面はロクロ成形、内面はロクロ成形後、左方向の弱いヘラ削りを行う。底部外面には回転糸切り痕が顕著にみられる。	
113		椀	— (4.7) — 6.6	ベタ高台を有し、緩やかに内湾して立ちあがる。	外面にロクロ目を残し、底部には回転糸切り痕が顕著にみられる。	焼成はやや不良である。
114		須恵器 蓋	14.6 (1.8) — —	口縁端部は僅かに凹み、口唇部は丸くおさまる。	口縁部は下方につまみ出し、強いヨコなで調整を施す。内面は丁寧なハケ調整を行う。	
115		杯	— (1.7) — 10.4	「ハ」の字状に開く高台を有す。	底部は回転ヘラ削りを施し、高台脇には強いヨコなで調整がみられる。内面は不定方向のなで調整を施す。	
116		白磁	— (2.6) — —	細いタイプの玉縁状口縁を有す。	釉調は黄白色を呈す。	胎土は灰白色で粗い。

第14表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考	
Fig 13 119	7区 Ⅲ層上	土師器 杯	11.2 3.4 7.0	平底状の底部から斜上方に直線的に立ちあがり口縁部で僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	底部外面回転ヘラ切り痕を残す。体部外面にロクロ目を僅かに残す。他は観察不可能。		
120		杯	13.0 (3.0) 8.4	体部は内湾気味に立ちあがり、口縁部で外反して口唇部は丸くおさめる。	ロクロ目を残す。内・外面共にヨコなで調整を施す。		
121		杯	12.6 3.25 7.4	平底から外反気味に立ちあがり、体部中央は外方に僅かに膨らみ口縁部に至る。口唇部は尖り気味である。	底部外面ヘラ切り痕を認める他は観察不可能	完形。	
122		皿	15.0 1.4 13.2	短い体部は強いヨコなで調整で外面が僅かに凹む。口唇部は丸くおさめる。	観察不可能。		
123		皿	19.0 1.5 16.0	中央外面が僅かに凹む平らな底部から外反気味に立ちあがり、口縁部は肥厚する。口唇部は丸くおさめる。口縁端部内面に段を有す。	底部外面はヘラ磨きを施すが他は観察不可能		
124		皿	18.2 (2.7) —	体部は内湾気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。口縁端部は丸くおさめる。口縁端部内面に段を有す。	体部外面はヘラ削りの後丁寧なヘラ磨きを施す。体部内面上半はヨコなで調整、下端はヘラ磨きを施す。		
125		須恵器 皿	19.2 1.8 12.8	平底状の底部から僅かに内湾気味に立ちあがり口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	観察不可能。		
126		蓋	11.8 (1.8) —	平坦な頂部から段をなして下降し、口縁部は下方に屈曲し、口唇部は丸くおさめる。	内・外面共にヨコなで調整を施す。		
127		6区 Ⅲ層上	蓋	11.4 1.2 —	平坦な頂部端部外面に1条の沈線を施す。なだらかに湾曲する口縁部を有し口唇部は丸くおさめる。口縁端部内面に僅かに段を有す。	内・外面共にヨコなで調整を施す。	
128		7区 Ⅲ層上	杯	13.8 3.35 10.0	底部外周より僅かに内側に貼付高台を有し、短かく外方にやや張り出す。高台底部は凹む。体部は斜上外方に直線的に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	内・外面共にヨコなで調整を施す。	
129	合子		— (4.2) 16.0 10.0	短い断面台形の貼付高台を有し、体部下半で一旦凹み内湾して立ちあがり、内方に急に屈曲して再び上方に屈曲する。	内・外面共にヨコなで調整を施す。		
130	壺		8.4 (9.0) —	口縁部は外方に直線的に立ちあがり、口唇部は面をなす。頸部中央に2条の沈線を施す。肩の張りが強い。	内・外面共にヨコなで調整を施す。口唇部は強いヨコなで調整で僅かに凹む。		
131	土師器 羽釜		22.2 (4.8) —	口縁端部に平行して鐫を貼付ける。口縁端部は内側に肥厚して口唇部は僅かに凹んで面をなす。	胴部外面に縦方向のハケ調整を施す。		
132	須恵器 蓋		13.6 2.8 —	平坦な頂部から屈曲して口縁部に至る。口縁端部は肥厚して面をなす。	外面ヘラ削りを残す。		
133	7区 Ⅲ層下	蓋	15.3 2.0 —	平坦な頂部から僅かに屈曲して口縁部に至る。口縁端部は肥厚して口唇部は丸くおさめる。	頂部外面左方向のヘラ削りを施す。内面は不定方向のなで調整を施す。		
134		蓋	16.0 1.6 —	平坦な頂部から緩やかに屈曲して口縁部に至る。口縁端部は僅かに下方に摘み出す。口縁端部内面に段を有す。口唇部は丸くおさめる。	頂部外面は左方向のヘラ削りの後なで調整、内面はなで調整を施す。他はなで調整を施す。		
135		蓋	15.2 2.3 —	平坦な頂部から緩やかに屈曲して口縁部に至る。口縁端部は肥厚し、口唇部は丸くおさめる。中高の扁平なつまみを有す。	観察不可能。		
136		蓋	14.4 2.6 —	扁平な中高のつまみを有する。平坦な頂部から緩やかに下行し、口縁部との境いは僅かに凹んで口縁部に至る。口唇部は面をなし、口縁部は丸くおさめる。口縁端部内面に僅かに段を有す。	頂部外面ヘラ削りを施し、他は内・外面共なで調整を施す。頂部内面に墨が残る。	転用硯。	

第15表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig 13 137	7区 Ⅲ層下	須恵器 壺	16.4 1.6 —	頂部つまみ欠損、凹んだ頂部から緩かに屈曲し、口縁部に至る。口縁端部は肥厚し、内面に僅かに段を有す。口唇部は丸くおさめる。	頂部外面左方向のヘラ削りの後などで調整を施す。内面などで調整を施す。	
138		壺	18.0 2.4 —	頂部から緩かに屈曲し、口縁端部で下方に揃って折り曲げる。口唇部は丸くおさめる。	頂部外面左方向のヘラ削りの後などで調整を施す。内面などで調整を施す。	
140		土師器 皿	14.8 1.3 — 12.8	平底状の底部から内湾気味に立ちあがり口縁部は外反し、口唇部は丸くおさめる。	観察不可能。	
141		皿	16.4 1.6 — 13.9	平底状の底部から内湾気味に立ちあがり、口縁部は外反する。口縁端部は僅かに肥厚する。口唇部は丸くおさめる。	観察不可能。	
139		須恵器 皿	15.4 2.6 — 12.4	僅かに凹む底部から内湾気味に立ちあがり、口縁部は上方に揃みあがる。口縁端部内面は僅かに凹む。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共などで調整を施す。	
142		土師器 杯	15.2 4.2 — 10.1	平底状の底部からにぶい段をなして内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口縁端部を僅かに上方に揃み上げる。口縁端部内面は段を有す。口唇部は丸くおさめる。	観察不可能。	
143		杯	15.4 (4.0) —	丸底風の底部から斜め上方に直線的に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	観察不可能。	
144		杯	17.2 (2.7) —	僅かに外反気味に立ちあがり、口縁部に至る。口縁端部を僅かに上方に揃み上げる。口縁端部内面は段を有す。口唇部は丸くおさめる。	体部内面横方向のヘラ磨きを施す。	体部内面に煤が付着する。
146		杯	15.6 4.5 — 9.0	貼付高台を有し、端部は内・外に肥厚する。体部は一旦内湾して立ちあがり、体部下半で稜をなして屈曲し、直線的に外方に立ちあがり口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。	体部外面はヘラ削りの後ヨコなどで調整を施す。	
Fig 14 148		盤	— (2.9) — 11.4	外方に踏んばった長い貼付高台を有す。	内面はヘラ磨きを施す。底部外面ヘラ削りを残す。底部外面以外丹塗り。	
Fig 13 151		須恵器 杯	13.8 4.2 — 9.8	底部外周端部に外方に張り出す箱形の貼付高台を有す。体部は僅かに内湾気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共にヨコなどで調整を施す。底部内面は不定方向のなどで調整を施す。	
152		杯	14.6 3.3 — 11.2	底部外周より僅かに内側に貼付高台を有し短かく外方にやや張り出す。高台底部は凹む。体部は、斜上外方に直線的に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	内・外面共にヨコなどで調整を施す。	
153		杯	14.8 4.0 — 10.0	断面箱形の貼付高台を有し、高台底部は凹む。体部は斜上外方に直線的に立ちあがり、上端部で外方に僅かに肥厚し口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共にで調整を施す。底部外面はヘラ切り後弱いヘラ削りを施す。	
154		杯	14.6 4.3 — 9.4	外方に踏んばる貼付高台を有し、端部内面は肥厚し段を有す。高台底部は内傾する面を有す。口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共にヨコなどで調整を施す。底部内面は不定方向のなどで調整を施す。	
155		円面硯	11.8 (3.0) —	周縁部は斜上外方に立ちあがり上端部は内傾する面をなし、僅かに内側に肥厚する。海部は認められない。脚部の透しは幅の広い透しと考えられる。	内面は横調整を施す。周縁部外面はヨコなどで調整を施すが他は観察不可能。	
147		須恵器 杯	— (2.3) — 11.8	底部外周より僅かに内側に断面逆台形の貼付高台を有し、体部は内湾気味に立ちあがる。	観察不可能。	
145	土師器 盤	26.0 1.9 — 25.4	口縁部は短く肥厚し、口唇部は丸くおさめる。	観察不可能。		

第16表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考	
Fig 14 156	7区	須恵器 壺	— (3.3) — 17.2	—	外方に強く踏んばる貼付高台を有し、端部は内・外に大きく肥厚し段を有す。	内・外面共なで調整を施す。		
157		壺	— (6.8) — 10.2	—	外方に踏んばった高台を有し、端部は僅かに肥厚して高台底部は凹む。体部は球形状に内湾して立ちあがる。	内・外面共なで調整を施す。	焼失は堅緻で灰白色を呈す。	
158		壺	— (6.9) — 19.8	—	長い高台は「ハ」の字状に強く踏ばり、端部は内・外に肥厚し端部内面に段を有す。体部下端と高台の継ぎ目にヘラ状原体による刺突を施す。	内・外面共なで調整を施す。		
149		土師器 不明	— (8.2) — —	—	体部にヘラ状原体により方形の1孔を穿つ。	内面指頭圧痕が顕著。	移動式カマドか?	
159		Ⅲ層 下	須恵器 高杯	— (4.6) — —	—	脚部は「ハ」の字状に開く。上半に鈍い2条の沈線を施す。	全面なで調整を施す。	
160			高杯	— (7.4) — 8.6	—	脚部は「ハ」の字状に開き、端部は僅かに凹んで面をなす。脚端部内面は僅かに段を有す。	脚部外面にロクロ目が顕著である。	
150			土師器 把手	— — — —	—	環状の把手である。	全面指頭圧痕が残る。	
161			弥生土器 手捏土器	3.8 2.6 — 1.3	—	平底気味の底部から内湾気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	内・外面共に指頭圧痕を認める。	
162	7区 Ⅳ層	須恵器 罍	— (4.2) — 5.4	—	外方に張り出す貼付高台を有す。胴部は内湾気味に立ちあがり、土胴部で内側に屈曲する。胴部中位に円孔を穿つ。	内面は強いヨコなで、外面はヨコなで調整を施す。	底部外面に「ニ」のヘラ記号を認める。	
163	6区 Ⅳ層	杯	12.7 3.5 — 8.3	—	底部外周端部に断面台形の貼付高台を有す。体部は直線的に外方に立ちあがり口唇部は僅かに外反し、口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共ヨコなで調整を施す。底部内面は不定方向のなで調整を施す。		
164	7区	杯	13.5 4.4 — 10.0	—	底部外周端部にやや外方に張り出す断面箱形の貼付高台を有す。体部は直線的に斜上外方に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	底部内面不定方向のなで調整を施す。体部及び口唇部内面はヨコなで調整を施すが、外面は観察不可能。		
165	Ⅳ層	杯	13.8 4.1 — 7.2	—	体部は内湾気味に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	体部外面下半にロクロ目が顕著である。内・外面共なで調整を施す。底部外面にヘラ切り痕を残す。		
166	7区 Ⅴ層	杯	14.3 3.2 — —	—	平底状の底部から内湾気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	底部外面にヘラ切り痕を残す。他は全面なで調整を施す。		
167	6区 Ⅳ層	高杯	— (9.3) — —	—	脚部は3孔の縦方向に長い長方形のヘラ切りによる透しが穿たれる。	脚外面はヨコなで調整を施す。		
168	7区 Ⅲ層 下	円面甕	11.6 (1.8) — —	—	脚部は外方に短く張り出すと考えられる。周縁部は僅かに内湾して立ちあがり、上端部は内傾する面をなし僅かに内方に肥厚する。海部は僅かに凹む程度である。陸部と海部との境に僅かに段を有す。陸部は平滑である。	周縁上端部に粘土接合帯が認められる。陸部外面は不定方向のなで調整を施す。他はヨコなで調整を施す。		
169	7区 Ⅳ層	土師器 高杯	— (6.2) — 10.2	—	脚部は「ハ」の字状に下降し、端部近くで外反、端部は丸くおさめる。3孔の縦方向に長い長方形のヘラ切りによる透しが穿たれている。	分割成形の脚部上面で欠損、剝離面には接合をしやすいするため凹凸を施している。脚部外面はヨコなで調整を施したのち橙色のスリップを施す。	一部透しの側面にスリップが流れた痕跡を認める。搬入品	
170		皿	16.2 2.1 — 13.0	—	体部は直線的に外方に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。口縁端部は肥厚して、内面は僅かに段を有す。	体部外面ヘラ磨き、内面は暗文を施す。	搬入品	

第17表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig 14 171	7区 IV層	杯	18.8 (3.2) — —	内湾気味に立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。口縁端部は僅かに肥厚し、内面は僅かに段を有す。	口縁端部は摘みあげて強いヨコなどで施す。体部外面は丁寧なヘラ磨きを施す。内面は放射状に暗文を施す。	搬入品
172		土師器 皿	25.0 3.3 — —	平底状の底部から内湾気味に立ちあがり、口縁端部で内側に僅かに肥厚して、口唇部は丸くおさめる。	観察不可能	砂粒をほとんど含まない。
173		土師器 椀	— (4.3) — 10.1	外方に張り出す長い貼付高台を有す。体部は僅かに内湾気味に立ちあがる。	内・外面共にロクロ目を残す。	
174		土師器 甕	18.6 (17.0) 19.7 —	下膨らみの胴部から口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上方に拡張する。口唇部は凹状をなす。	口縁端部は摘んでヨコなどで調整を施す。荒い木理のハケ原体で胴部外面は不定方向、口縁部内面及び胴部上端内面は横方向のハケ調整を施す。胴部内面に指頭圧痕を残す。	搬入品と考えられる。
175		甕	25.5 (26.7) 26.6 —	下膨らみの胴部から口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上方に拡張する。口唇部は凹状をなす。	荒い木理のハケ原体で胴部外面上半は縦方向、下半は不定方向、口縁部内面は左下り、胴部上端部は横方向のハケ調整を施す。内・外面に指頭圧痕を残す。	搬入品と考えられる。
Fig 13 263	7区 III層 上	瓦	—	一枚造りと考えられる。凸面は縄目叩き、凹面は布目が細い。	縄目叩きの後、部分的にハケ調整を施す。	陶質。

第18表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
Fig 24 176	S B 1 P 13	須恵器 皿	14.4 2.0 — —	平底状の底部から斜上方に直線的に立ちあがり、口唇部は面をなす。底部外面は凹む。	内・外面共なで調整を施す。	
177	P 5	皿	16.6 2.4 — —	平底状の底部から内湾気味に立ちあがり、段を有して口縁部に至り僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共ヨコなで調整を施す。底部外面にヘラ切り痕を残す。	
178	P 4	皿	17.5 2.1 — —	平底状の底部から段を有して立ちあがり、口縁部は斜上方に立ちあがる。口縁部は僅かに肥厚する。口唇部は丸くおさめる。	外面なで調整を施す。内面観察不可能。	
184	P 14	土師器 皿	18.8 2.0 — —	平底状の底部から斜上方に内湾気味に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共に丁寧なヘラ磨きを施す。底部外面にヘラ切り痕を残す。	
185	P 13	盤	26.0 (1.8) — —	平底状の底部から短く内湾気味に立ちあがり、口縁端部は肥厚して口唇部は丸くおさめる。	底部内面はヘラ磨きを施す。底部外面はヨコなで調整の後ヘラ磨きを施す。全面丹塗り。	
186	P 9	杯	13.2 2.7 — 8.0	平底状の底部から斜上方に直線的に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。底部外面は僅かに凹む。	観察不可能。	
179	P 16	須恵器 杯	12.5 (2.7) — —	内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面にロクロ目を残す。内・外面共なで調整を施す。	
180	P 11	杯	15.3 4.1 10.0 —	断面台形の外方に張り出した貼付高台を有す。高台底部は僅かに凹む。体部は下端で丸みをもって斜上方に直線的に立ちあがり、口唇部は丸くおさめる。	底部外面は石廻りの弱いヘラ削りを施す。体部内・外面共ヨコなで、底部内面は不定方向のなで調整を施す。	
181	P 3 柱痕	杯	— (2.1) — 9.8	底部外周端部よりやや内側に断面台形の貼付高台を有す。体部は直線的に立ちあがると考えられる。	内・外面共なで調整を施す。底部内面は不定方向のなで調整を施す。	
182	P 2	蓋	12.0 1.9 — —	垂直に立ちあがる口縁部から内反り気味に立ちあがり平坦な頂部に至る。口唇部は丸くおさめる。	外面ヨコなで、内面不定方向のなで調整を施す。	
183	P 3	蓋	13.9 2.1 — —	僅かに屈曲した口縁部から斜上方に立ちあがり平坦な頂部に至る。口唇部は丸くおさめる。	頂部外面にヘラ削り痕を残す。	内面に墨が付着し、滑らかな面を有す。転用碗。
187	P 10	土師器 高杯	— (5.8) — —	断面八角形の脚である。	内面紋目目痕が顕著。	
188	S B 2 P 1	須恵器 蓋	19.1 (1.1) — —	緩やかに下向き口縁部に至る。口縁部は端部を下方に揃み出す。	頂部端部は左方向のヘラ削りを施す。内・外面共なで調整を施す。	
192	P 4	土師器 杯	14.0 2.5 — —	ベタ高台の底部から内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面にロクロ目を残す。内・外面共なで調整を施す。	
193	P 7	杯	13.7 2.9 — 9.4	内湾気味に立ちあがり、口縁部で僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面にロクロ目を残すが他は観察不可能。	
194	P 7	杯	13.8 (4.8) — —	直線的に立ちあがり、口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	観察不可能。	
189	P 9	須恵器 杯	— (2.3) — 8.5	外方に僅かに張る短い断面逆台形の高台を有す。丸味のある体部下端から斜上方に直線的に立ちあがると考えられる。	内面灰緑色の自然釉がかかる。	
190	P 11	杯	— (2.0) — 9.4	外方に踏んばる貼付高台を有す。高台底部は僅かに凹む。体部は内湾気味に立ちあがる。	底部外面ヘラ切り後削り、更にその上をなで調整する。内面は不定方向のなで調整を施す。体部内・外面共なで調整を施す。	

第19表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig 24 191	S B 2 P 1	須恵器 杯	14.4 4.3 — 7.9	底部外周端部より僅かに内側に屈曲する貼付高台を有す。体部は斜上外方に直線的に立ちあがり、口唇部は丸くおさめらる。	観察不可能。	
195	S B 3 P 7	杯	11.7 4.2 — 7.5	外方に踏んばる貼付高台を有す。体部は内湾気味に立ちあがり、口縁部に至る。口唇部は丸くおさめらる。	内・外面共なで調整を施す。	
196	P 8	杯	— (2.1) — 9.2	外方に僅かに張り出す貼付高台を有す。高台底部は僅かに凹む。体部は直線的に斜上外方に立ちあがる。	内・外面共なで調整を施す。	
197	P 2	土師器 皿	12.6 (2.1) — —	平底状の底部から丸味をもって立ちあがり、口縁端部は僅かに肥厚する。	観察不可能。	
198	P 1	皿	14.4 1.7 — —	平底状の底部から斜上外方に立ちあがる。口唇部は丸くおさめらる。	体部内・外面共横方向のヘラ磨きを施す。	
199	P 2	盤	32.6 5.0 — 17.4	断面逆三角形の貼付高台から内湾気味に立ちあがり口縁端部は上方に摘みあげる。口縁端部内面に段を有す。口唇部は面をなし、強いなで調整で凹む。	体部内面に粘土接合痕を残す。体部外面は縦方向のハケ調整を施す。内・外面共指頭圧痕を残す。	
200	S B 4 P 2	須恵器 蓋	16.1 (1.6) — —	緩やかに下向して口縁部に至る。口唇部は面をなし下方に沈線が巡る。口縁端部内面は僅かに段を有す。	内・外面共なで調整を施す。	
201	S B 5 P 6	蓋	17.2 (2.9) — —	丸味を帯びた頂部から下向して口縁部との境は段を有す。口縁部は僅かに内湾して、口唇部は丸くおさめらる。	内・外面共ヨコなで調整を施す。	
202	P 6	土師器 杯	8.1 2.3 — 6.4	平底状の底部から僅かに外反して立ちあがる。口唇部は丸くおさめらる。	体部内面にロクロ目を残すが底部外面回転ヘラ切り痕を残す。	
203	P 6	杯	9.3 2.9 — —	丸底状の底部から僅かに外反して立ちあがる。口唇部は丸くおさめらる。	底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。底部内面に指頭圧痕を残す。体部内・外面にロクロ目を残す。	
204	P 7	杯	9.3 2.2 — —	平底状の底部から外反気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめらる。	内面にロクロ目を残す。内・外面共なで調整を施す。	
205	S B 5 P 1	皿	11.4 1.3 — 7.0	平底気味の底部から内湾気味に立ちあがり、口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめらる。	体部外面にロクロ目を残す。内・外面共ヨコなで調整を施す。	
216	P 1 柱痕	製塩土器	— (6.5) — —	内湾気味に立ちあがる。	内面に布目の痕跡を残し、外面には指頭圧痕を残す。	胎土に0.5～3mmの砂粒を多く含む。
211	S B 6 P 9	土師器 皿	13.8 1.35 — 9.1	口縁部は斜上外方に直線的に短く立ちあがり、底部外面中央がやや凹む。全体的にゆがんでいる。	底部外面にヘラ切り痕を残すが、他は観察不可能。	
206	P 14	須恵器 蓋	15.6 1.3 — —	僅かに凹むと考えられる頂部から緩やかに下向し口縁端部は僅かに肥厚し丸くおさめらる。口縁端部内面は段を有す。口唇部は面をなす。	口唇部は面取りを施す。内・外面共なで調整を施す。	
207	P 13	蓋	16.1 (2.0) — —	頂部から緩やかに下向し口縁部に至る。口縁端部は肥厚し、内面は僅かに段を有す。口唇部は丸くおさめらる。	頂部外面端部は右方向のヘラ削りを施す。	
212	P 5	土師器 杯	12.8 2.9 — 7.8	平底状の底部から体部へ屈曲して、斜上外方に僅かに内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめらる。	体部外面はなで調整を施すが、他は観察不可能。	
213	P 9	杯	13.0 4.2 — 6.9	平底状の底部から体部へ屈曲して、斜上外方に僅かに内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめらる。	観察不可能。	

第20表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
Fig 24 208	S B 6 P 12	須恵器 杯	— (1.7) — 10.5	底部外周端部に外方に張り出す貼付高台を有す。高台底部は僅かに凹む。	内・外面共なで調整を施す。	
Fig 25 210	P 13	壺	— (6.1) — 10.0	底部外面中央は僅かに凹む。底部外面と体部との境に面取りがあり胴部は直線的に立ちあがる。	底部と胴部との境に右方向のヘラ削りを施し面取りを施す。胴部内面にシロロ目が見える。内・外面共なで調整を施す。	
214	P 10	土師器 皿	12.0 1.45 — —	平底状の底部から斜上外方に短く立ちあがり口縁部で外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面にシロロ目を残すが他は観察不可能である。	
215	P 2 柱痕	皿	16.1 1.7 — —	平底状の底部から僅かに外反しながら斜上外方に短く立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	観察不可能	
209	P 6	須恵器 皿	14.0 (2.2) — —	口縁部は外反して端部外面は僅かに凹む。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は揃み上げてヨコなで調整を施す。体部内面ヨコなで調整を施す。	
217	P 13	土師器 甕	14.1 (4.6) — —	口縁部は「く」の字状に外反し口縁端部は上方に肥厚する。口唇部は丸くおさめる。	胴部上端に粘土帯接合痕を認める。内・外面共指痕圧痕を残す。	
218	P 8	甕	18.9 (5.0) — —	口縁部は「く」の字状に外反し口縁端部で上方に肥厚する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は上方に揃み上げる。口縁部内面は横方向のハケ調整。胴部外面は縦方向のハケ調整を施す。口縁部内面下端に粘土帯接合痕を認める。胴部外面に指痕圧痕を残す。	
219	S B 7 P 2	土師器 蓋	17.5 (1.3) — —	口縁部は「S」字状に屈曲する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共ヨコなで調整を施す。	
220	S A 1 P 2	土師器 皿	16.8 (1.7) — —	平底状の底部から外反気味に立ちあがり口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。底部と体部外面との境に稜を有す。口唇部は丸くおさめる。	観察不可能。	
221	P 2	皿	20.4 2.0 — —	平底状の底部から斜上外方に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は揃んで強くヨコなで調整を施すことにより細る。	
222	S A 2 P 1	盤	27.8 (1.4) — —	平底状の底部から短く内湾して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	観察不可能。	
223	P 1	須恵器 蓋	18.0 (1.8) — —	緩やかに弧状を描いて口縁部に至る。口縁部は下方に屈曲する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共ヨコなで調整を施す。	
224	S D 22	土師器 皿	13.2 1.2 — 11.2	平底状の底部外周端部は肥厚する。斜上外方に直線的に短く立ちあがり口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共なで調整を施す。底部外面へラ切り後弱い削りを施し、その後なで調整を施す。	
225	S D 22	杯	— (1.1) — 7.4	平底状の底部から体部外面の境に段を有して立ちあがる。底部外面中央がやや凹む。	観察不可能。	
226	S D 23	須恵器 杯	14.6 3.9 — 9.2	底部外周よりやや内側に僅かに張り出す断面台形の貼付高台を有す。体部は内湾気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	底部外面に回転へラ切り痕を残す。回転へラ切りの後弱い削りを施し、更になで調整を施す。体部内・外面共、ヨコなで調整。底部内面なで調整を施す。	
227	7区 P 7	土師器 皿	14.7 1.6 — —	底部外面中央は凹む。平底状の底部から僅かに外反して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	底部外面にへラ切り痕を残すが他は観察不可能。	
228	P 7	羽釜	17.7 (9.2) — —	口縁部より約2cm下がったところに鋳が付く。口唇部は凹んで内側に僅かに肥厚する。	鋳の端部は上方に揃み上げる。口唇部は強いなで調整を施す。胴部外面縦方向のハケ調整を施す。胴部内面なで調整を施す。鋳の接合部及び胴部外面に指痕圧痕を残す。	

第21表 遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig 25 229	7区 P 8	須恵器 甕	37.2 (13.0) 40.2 —	口縁部は「く」の字状に一旦外反した後、内湾気味に立ちあがる。口唇部は水平な面をなす。	胴部外面横方向のハケ調整を施す。胴部内面は青海波文を残しその上になで調整を施す。	
230	P 17	土師器 杯	13.2 2.6 — 9.8	ベタ高台気味の平底の底部から外方に直線的に立ちあがり口縁端部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共なで調整を施す。底部外面にヘラ切り痕を残す。体部内面と底部内面との境に爪圧痕を残す。	
231	P 17	杯	13.2 (3.1) — 7.9	ベタ高台を有す。平底気味の底部から体部下端で屈曲して斜上外方に直線的に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	観察不可能。	
232	P 17	椀	— (2.9) — 9.2	底部外周端部に細長い高台を有す。高台から体部は内湾気味に立ちあがる。	体部外面にロクロ目を残す。底部外面にヘラ切り痕及び爪圧痕を残す。	
233	P 20	皿	12.9 1.6 — —	平底状の底部から僅かに外反して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	観察不可能	
235	P 20	須恵器 皿	13.3 1.4 — 9.1	平底状の底部から僅かに外反して立ちあがる。	口縁部と体部外面の境は強いなで調整で僅かに凹む。内・外面共になで調整を施す。底部外面にヘラ切り痕を残す。	
236	P 20	皿	13.6 1.45 — 10.9	平底状の底部から僅かに外反して立ちあがる。	口縁部と体部外面の境は強いなで調整で僅かに凹む。内・外面共になで調整を施す。底部外面にヘラ切り痕を残す。	
237	P 20	蓋	13.1 2.6 — 13.9	平坦な頂部から急に下方内側に屈曲し口縁部に至る。口唇部は面をなす。	内・外面共に灰褐色の自然釉がかかる。	
234	P 20	土師器 杯	14.4 4.8 — 8.0	平底状のベタ高台を有す。体部は斜上外方に直線的に立ちあがり口縁端部で僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	観察不可能。	
238	P 23	皿	14.8 (1.5) — 12.4	平底状の底部から外反気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	観察不可能。	
239	P 23	須恵器 蓋	16.0 (1.4) — —	口唇部は凹状をなし、口縁端部は丸くおさめる。	口唇部は強いなで調整を施し僅かに凹む。	

第22表 施釉陶器遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig 7 10	1区 V層 2区 III層	緑釉陶器 皿	— (1.7) — 6.4	ベタ高台を有す。中央部が僅かに凹む。底部から内湾気味に立ちあがる。	底部外面は糸切り痕を残す。全面施釉。釉は緑灰色。	胎土に砂粒をほとんど含まない。緑釉の剥落が著しい。軟質。京都産。
Fig 9 39	3区 V層	皿	—	口縁部は外反し、口唇部は丸くおさまる。	内・外面共にヨコなで調整を施す。釉調は薄黄緑濁色である。	
Fig 11 85	IV層	椀	—	斜め上方に立ちあがり、口縁部は短く外反する。口唇部は丸くおさまる。	内・外面共に丁寧なヨコなで調整を施す。釉調は薄緑濁色である。	
86		壺	— (1.9) — 12.0	底部より直立気味に立ちあがる。	内・外面共に釉が厚く丁寧なへら磨きを行う。内面にはロクロ目を残す。釉調は黄緑色である。	猿投産。
87	III層	椀	— (2.8) — 5.8	体部はベタ高台から内湾して立ちあがる。高台は凹状を呈す。	体部外面は丁寧なへら磨きを行う。外底は回転糸切り後、へら削りを施す。釉調は薄緑濁色である。	
240	7区	椀	— (2.8) —	直線的に立ちあがり口縁部はヨコなで調整により僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共ヨコなで調整を施す。全面施釉。釉は淡黄緑色。	砂粒を含む。硬質。京都産。
241	III層上	椀	— — — —	斜上外方に直線的に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	全面へら磨きを思わせるような丁寧な器面調整を施す。全面施釉。釉は黄緑色。	砂粒を含まない硬質。京都産。
242	6区 III層上	皿	— (1.3) — 6.2	削り出し蛇の目高台から内湾気味に立ちあがる。	底部内面は丁寧なへら磨きを施す。全面施釉。釉は黄緑色。	0.5mmの砂粒を含む。硬質。京都産。
243	1区 表採	椀	— — — —	外反気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共ヨコなで調整を施す。全面施釉。釉は暗緑色。	砂粒を含まない。硬質。京都産。
244	7区 III層上	椀	— — — —	口縁部は外方に屈曲する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共ヨコなで調整を施す。全面施釉。釉は灰黄緑色。	砂粒を含まない。硬質。京都産。
245	7区 III層下	皿	— — — —	直線的に斜上外方に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	全面施釉。釉は黄緑色。	砂粒をほとんど含まない。緑釉の剥落が著しい。軟質。京都産。
246		皿	— — — —	僅かに外反して立ちあがり口唇部は丸くおさめる。体部下端内面に段を有す。	内・外面共ヨコなで調整を施す。全面施釉。釉は暗緑色。	砂粒をほとんど含まない。硬質。京都産。
247		皿	— — — —	斜上外方に内湾気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。口縁部内面に鈍い段を有す。	内・外面共ヨコなで調整を施す。全面施釉。釉は暗黄緑色。	砂粒をほとんど含まない。緑釉の剥落が著しい。硬質。京都産。
248		皿	— (1.5) — 8.2	削り出し高台から僅かに内湾気味に立ちあがる。底部外面は僅かに凹む。	全面施釉。釉は灰緑色。	砂粒をほとんど含まない。緑釉の剥落が著しい。軟質。京都産。
249		皿	— (1.3) — 6.0	削り出し高台から僅かに内湾気味に立ちあがる。底部外面は僅かに凹む。	内・外面共丁寧なヨコなで調整を施す。全面施釉。釉は灰緑色を呈すが、内・外面共剥離が著しい。	0.5mmの砂粒を含む。硬質。京都産。
250		椀	— 2.0 — 6.0	貼付高台を有す。断面は丸味をおびた逆台形を呈す。体部は内湾気味に立ちあがる。	内・外面共ヨコなで調整を施す。全面施釉。釉は淡黄緑色。	砂粒を含まない。硬質。京都産。
Fig 24 251		S B 2 P 7	椀	— — — —	僅かに外反気味に立ちあがり端部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共ヨコなで調整を施す。全面施釉。釉は暗緑色。
252	皿		— (1.7) —	内湾気味に立ちあがり口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共ヨコなで調整を施す。全面施釉。釉は淡黄茶色。	砂粒を含まない。外面及び口縁部内面の緑釉の剥落が著しい。硬質。京都産。

第23表 施釉陶器遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
Fig 24 253	S B 2 P 2	緑釉陶器 壺	— — — —	— — — —	底部から内湾気味に上外方に立ちあがり、肩部屈曲部に最大径を有する。胴部中位に2条の沈線が巡り、更にその上に溜状の突起を貼付する。	内面にロクロなどによる凹凸が僅かに認められる。胴部断面に粘土帯の接合部が見られる。外面施釉。釉は淡黄緑色。	0.5～3mmの砂粒を含む。釉は外面全面にかかるがムラが見られる。軟質。京都洛北産。
254	S B 6 P 8	皿	13.6 2.6 — —	— — — —	削り出し高台から内湾して立ちあがり口縁端部で急に外反する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共ヨコなどで調整を施す。全面施釉。釉は淡緑色。	砂粒をほとんど含まない。緑釉は内面上半の剥落が著しい。硬質。京都洛北産。
255	P 8	椀	— — — —	— — — —	内湾気味に立ちあがり、口縁部は外反する。口縁部下端内面に段を有す。	内・外面共ヨコなどで調整を施す。口縁部は揃いで強いヨコなどで調整を施す。全面施釉。釉は暗灰緑色。	砂粒をほとんど含まない。硬質。京都産。
256	P 10	椀	18.6 (3.0) — —	— — — —	斜上外方に直線的に立ちあがり口縁端部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共ヨコなどで調整を施す。全面施釉。釉は黄茶色。	砂粘を含まない。軟質。京都洛共産。
Fig 7 22	2区 Ⅲ層	灰釉陶器 椀	— (2.1) — —	— — — —	僅かに外方に張り出す断面逆三角形の高台を有す。畳付けは狭い面をなす。体部は底部から内湾気味に立ちあがる。	内・外面共横などで調整を施す。釉は内面にみられるが、中央部はやや剥離する。	0.5mmの砂粒を僅かに含む。猿投窯産
Fig 14 257	7区 Ⅳ層	杯	14.6 3.3 — —	— — — —	細い高台を有し、端部は肥厚する。体部は僅かに内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。底部内面に目跡を残す。	体部外面左方向の弱い削り調整を施す。釉は内外面共に下半までかかる。	砂粒をほとんど含まない。猿投窯産。
Fig 7 23	2区 Ⅲ層	青磁 椀	— (4.2) — —	— — — —	外面は不明瞭な蓮弁文を配す。	釉は青濁色で厚くかかっている。高台面まで施釉。	胎土は極めて精緻。

第24表 黒色土器

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
Fig 13 258	表採	黒色土器 皿	— (11.0) — —	— — — —	断面逆三角形のシャープな貼付高台を有す。全面的に器壁は薄い。いわゆるAタイプである。	内面へラ磨きを施す。外面は観察不可能。	京都産。
Fig 24 259	S B 2 P 2	皿	— 0.5 — —	— — — —	断面逆三角形の短い貼付高台を有す。全体的に器壁は薄い。平底状の底部から体部は僅かに斜上外方に立ちあがる。いわゆるAタイプである。	内面は丁寧などで調整を施す。外面は観察不可能。	
260	S B 2 P 3	椀	— (2.3) — —	— — — —	外方に張り出す断面逆台形の貼付高台を有す。体部は緩やかに内湾して立ちあがる。いわゆるAタイプである。	体部及び底部内面はへラ磨きを施す。外面は観察不可能。	
261	S B 2 P 7	椀	21.0 (3.7) — —	— — — —	内湾気味に立ちあがり、口縁端部で器厚は薄くなり僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。いわゆるAタイプである。		
262	S B 5 P 1 柱痕	皿	— (1.0) — —	— — — —	断面逆三角形のシャープな貼付高台を有す。全体的に器壁は薄い。いわゆるAタイプである。	内面は丁寧なへラ磨きを施す。外面はなどで調整を施す。	京都産。

第25表 計測表

挿図番号	遺構番号	器種	全長 cm	直径 (全幅)cm	孔径 cm	重量 g	形態・手法
11	1区・Ⅱ層	土錘	4.1	2.8	0.7	22.4	円筒形を呈す。
13	1区・Ⅲ層	砥石	13.5	8.4×2.6	—	415	使用面は4面である。
21	2区・Ⅲ層	鍋脚	(12.75)	2.35	—	—	
45	3区・Ⅳ層	土錘	5.9	2.9	0.7	39.1	ほぼ紡錘形を呈す。
46	5区・Ⅴ層	◇	5.8	4.55	1.2	94.0	ほぼ球形を呈す。
117	5区・SK5	◇	8.0	4.2	—	108.8	杏仁形を呈す。
118	◇	◇	3.4	1.9	0.4	11.1	紡錘形を呈す。
42	3区・Ⅳ層	鍋脚	(8.4)	2.7	—	54.3	脚の基部。体部との接合部で剝離している。
88	5区・Ⅱ層	石鏃	1.8	1.6	—	4.0	凹基式を呈し、両面共に剝離面がみられる。
264	7区・Ⅲ層上	土錘	2.8	1.9	0.7	9.0	円筒形を呈す。
265	◇	◇	(7.2)	1.7	1.7	27.0	断面円形の棒状を呈し、両端近くにそれぞれ1個ずつの小円孔を穿つ。
266	7区・Ⅲ層下	◇	5.5	3.7	—	56.8	大型で両側面に溝状の抉りを造っている。
267	◇	◇	7.2	4.8	—	85.0	大型で両側面に溝状の抉りを造っている。
268	◇	◇	4.0	1.9	0.5	14.2	円筒形を呈す。
269	7区・P20	◇	3.6	1.8	0.45	12.0	円筒形を呈す。
270	◇	◇	3.5	1.7	0.4	10.0	円筒形を呈す。
271	◇	◇	5.1	3.5	—	56.0	大型で両側面に溝状の抉りを造っている。

圖 版



調査前全景(北から)



調査前全景(南から)

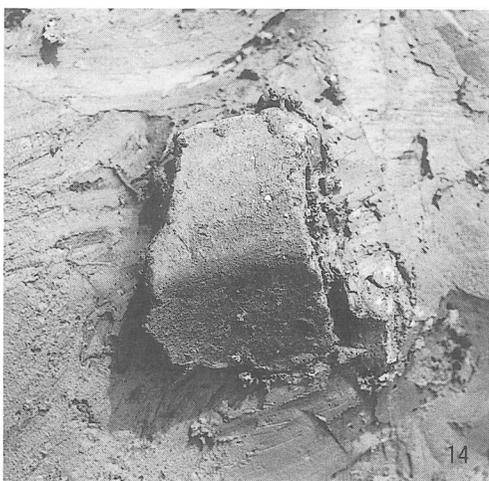
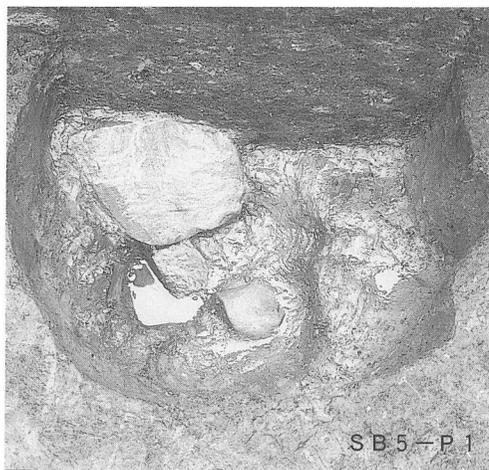
PL 2



2区 完掘状態(東から)



1区 完掘状態(南から)



SB 5 の柱掘形及び 1 区・2 区包含層遺物出土状態



7区 SB1 西面検出状態(南から)



2区 SD1・2 完掘状態(南東から)



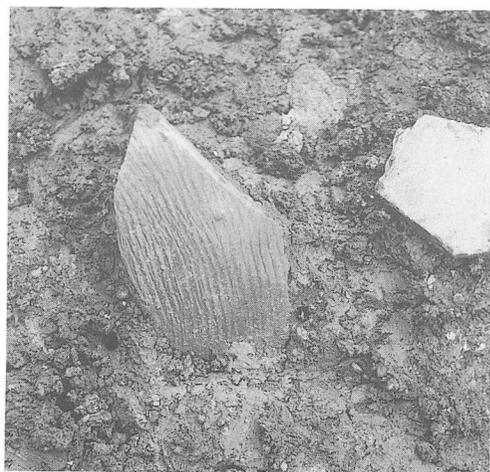
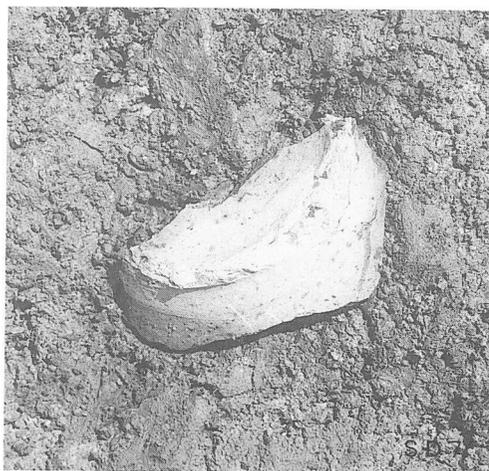
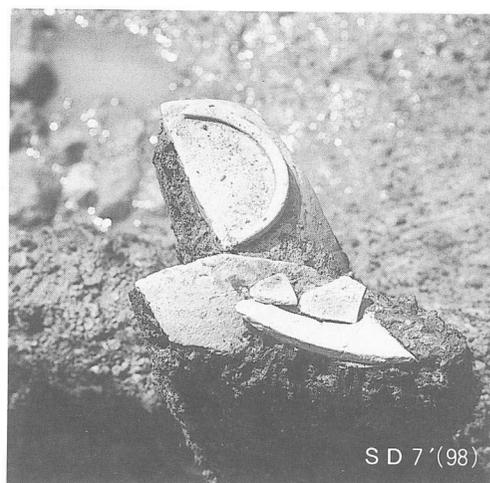
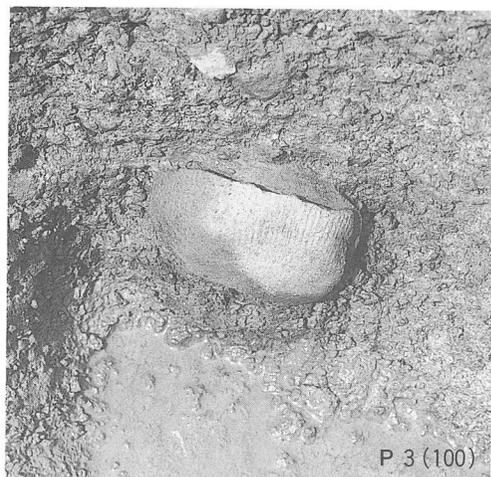
3区 完掘状態(北から)



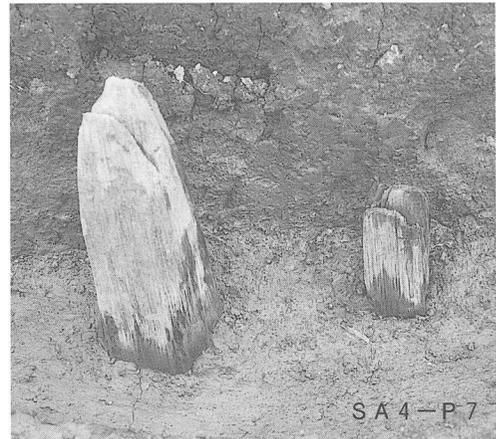
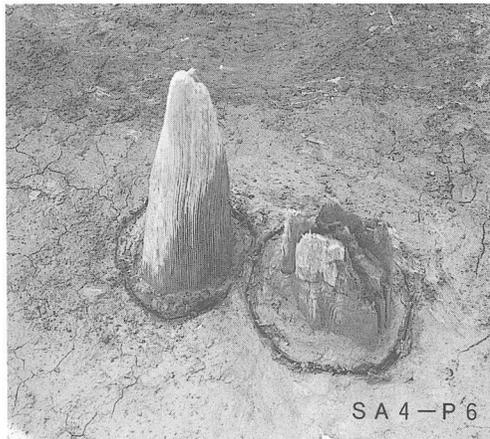
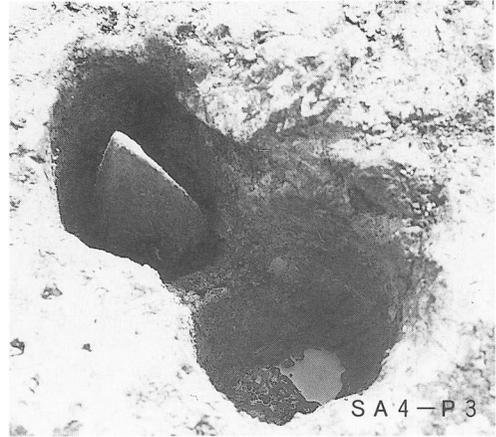
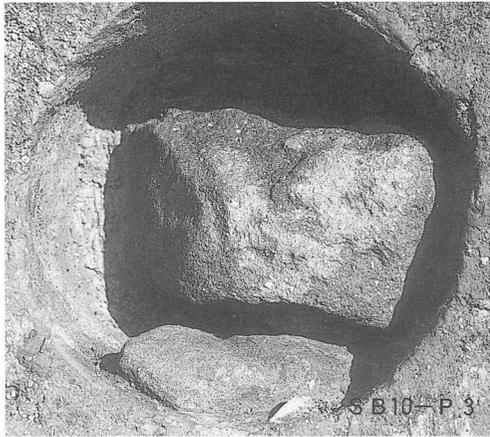
3区 SD7・7' 遺物出土状態(北から)



3区 SD7・7' セクション(南から)



3区 SK 4, SD 7・7', P 3, 5区 包含層出土遺物



4区 東壁セクション(西から)



5区 完掘状態(東から)



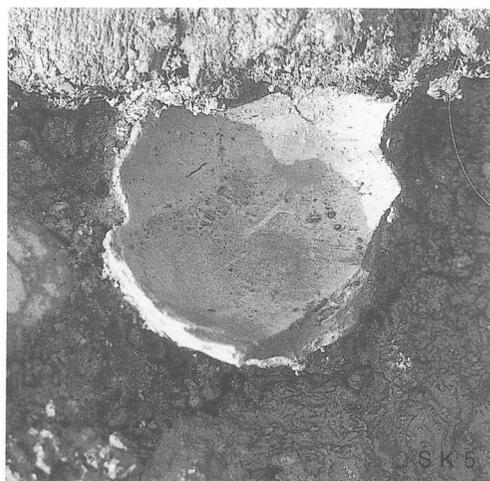
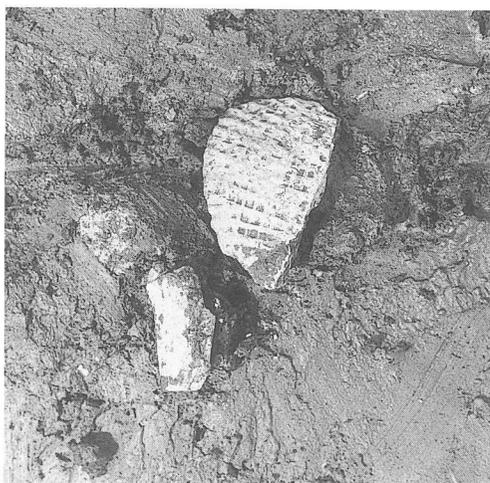
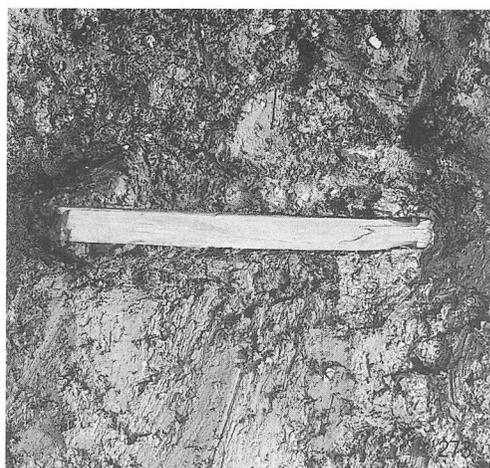
5区 SK5 検出状態(東から)



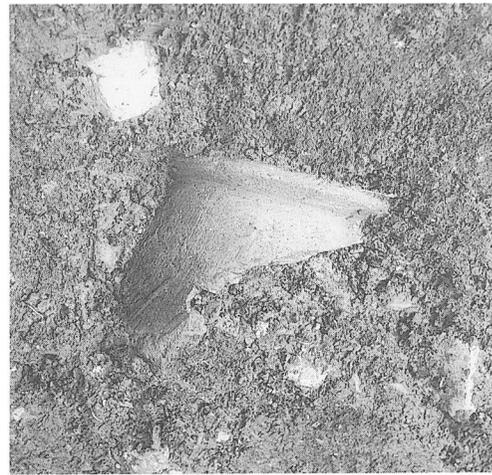
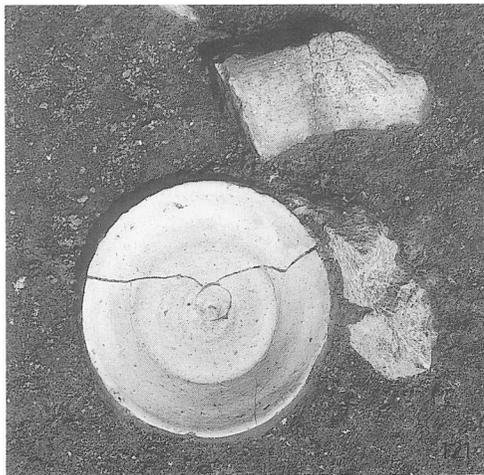
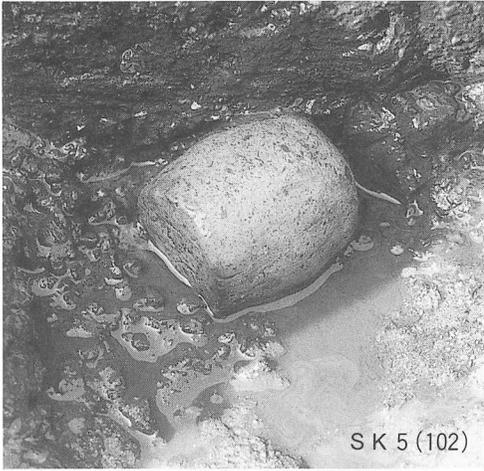
5区 SK5 遺物出土状態(南から)



5区 SK5 完掘状態(東から)



5区 包含層及びSK 5 出土遺物



5区 SK 5 及び 7区 包含層遺物出土状態



7区 完掘状態(北から)



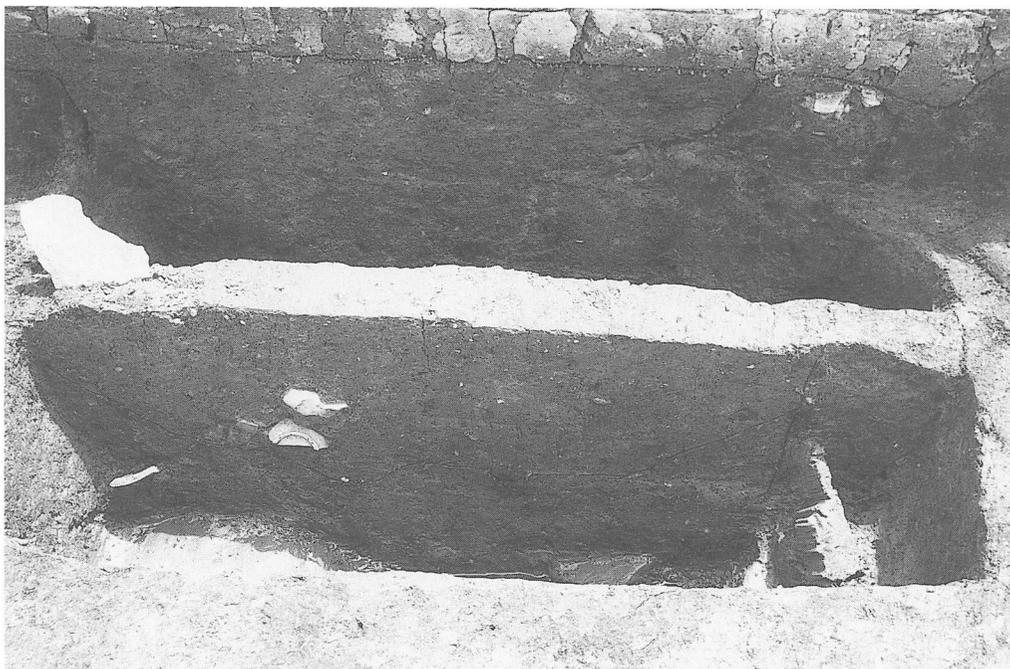
S B 6 西面柱穴列及びS D 22 検出状態(南から)



S B 1 - P 5 検出状態(西から)



S B 1 - P 8 検出状態(南から)



SB1-P1, SB2-P1, SA1-P3 検出状態(西から)



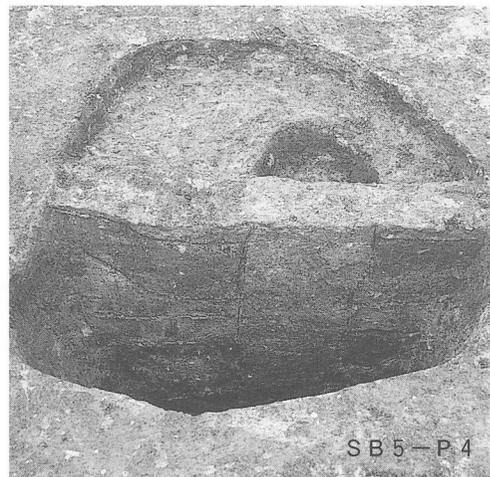
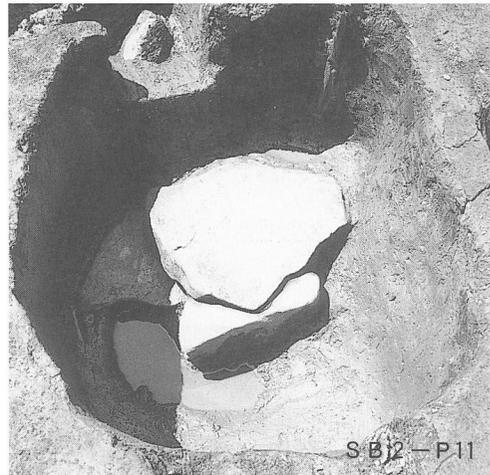
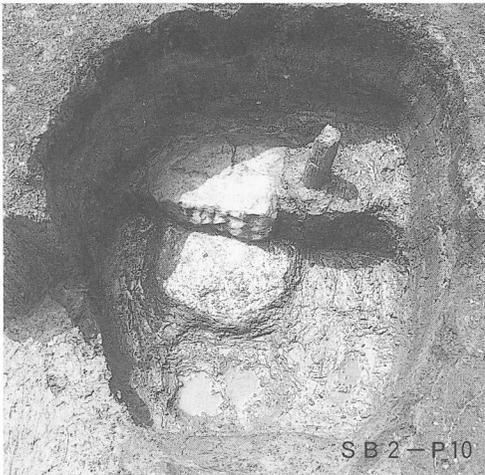
SB1-P5, SB2-P10 検出状態(北から)



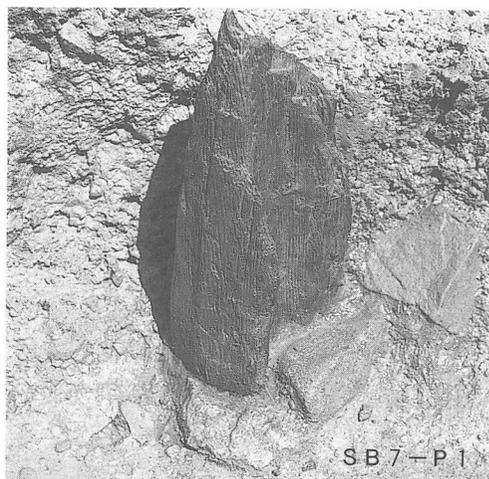
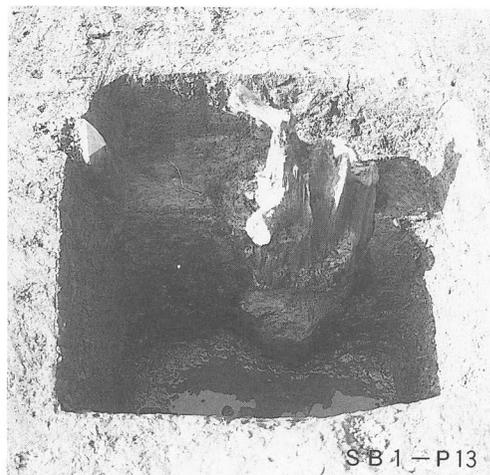
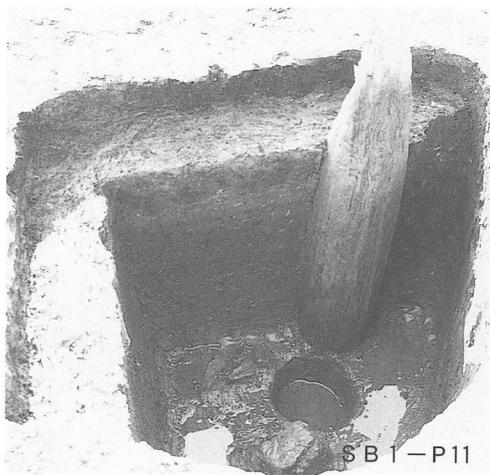
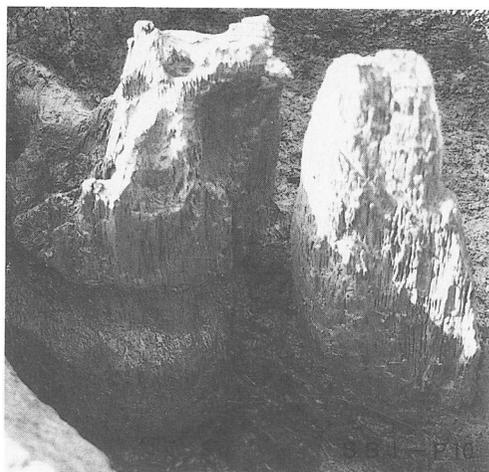
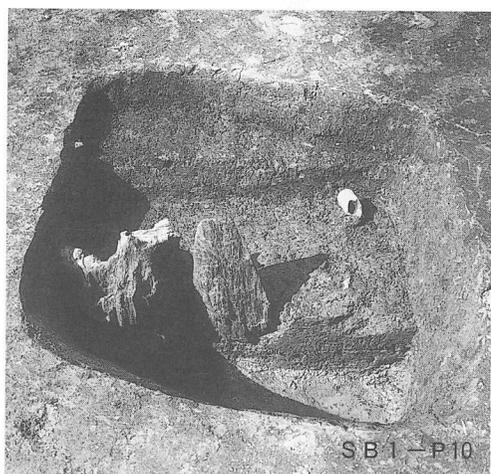
SB1-P7 検出状態(南から)



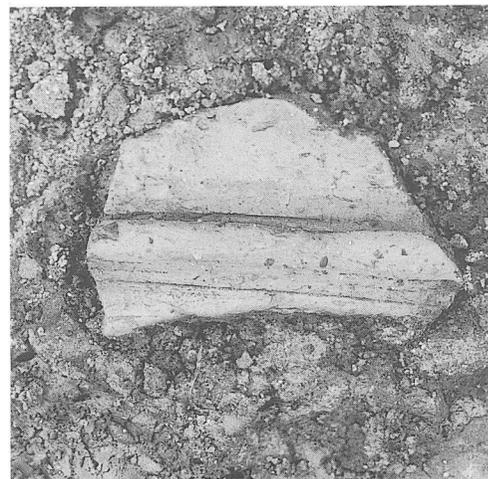
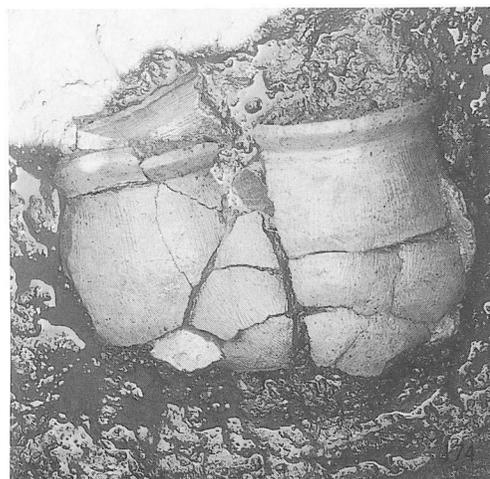
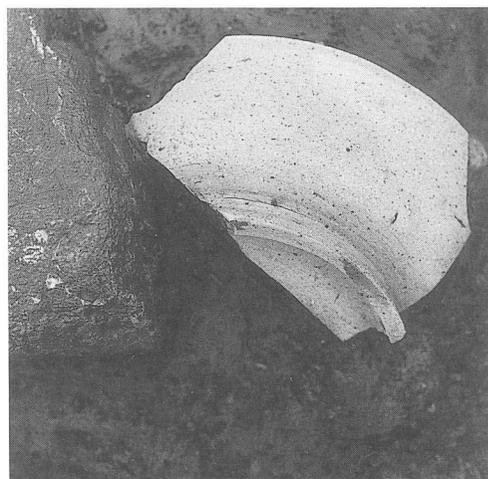
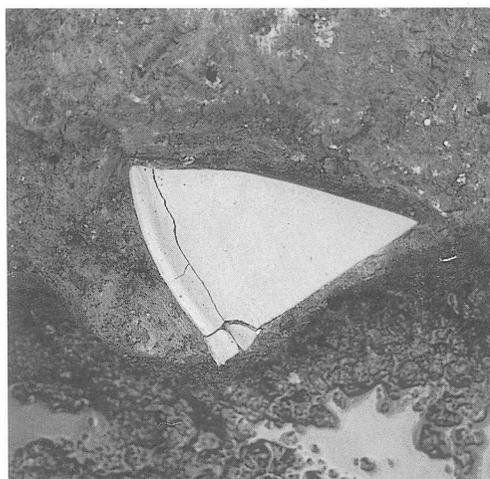
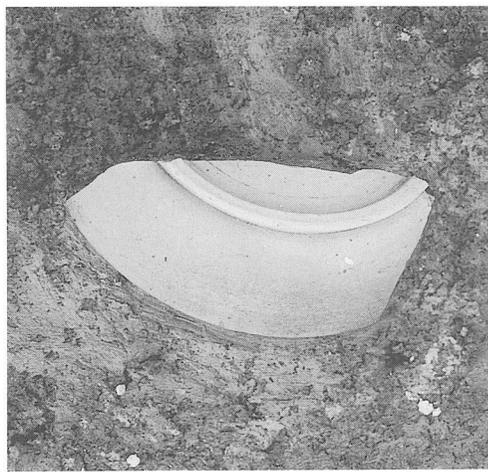
SB2-P12 木器出土状態



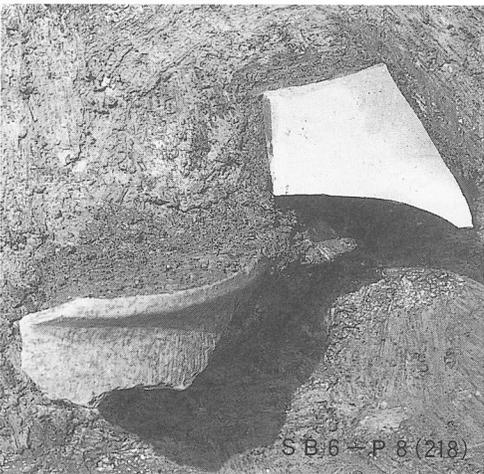
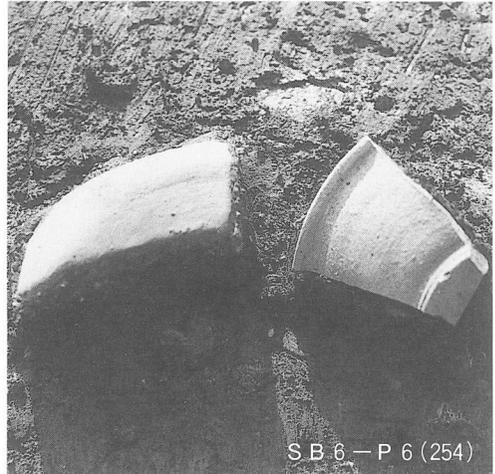
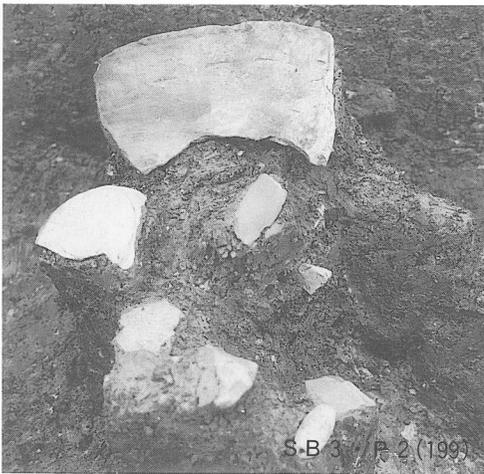
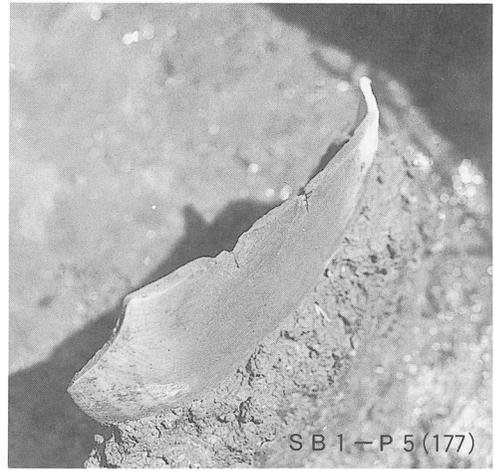
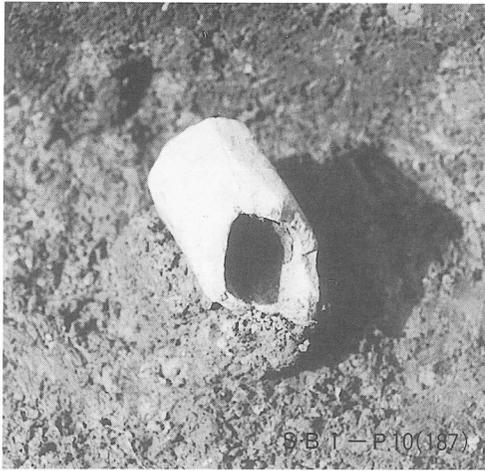
SB2・3・5の柱掘形



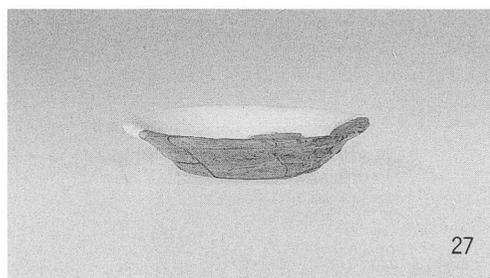
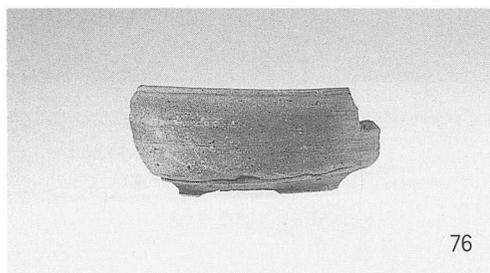
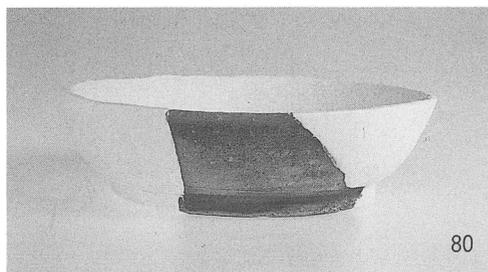
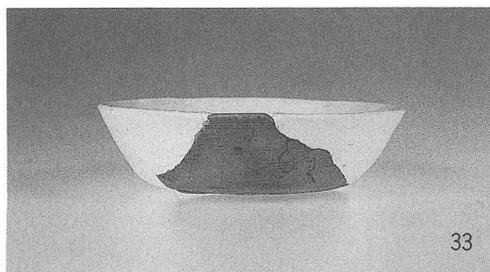
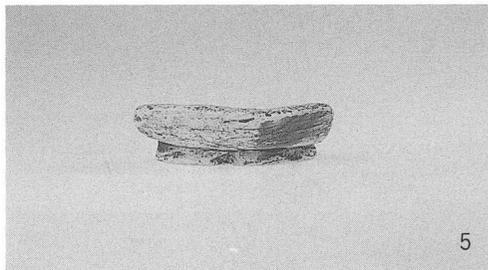
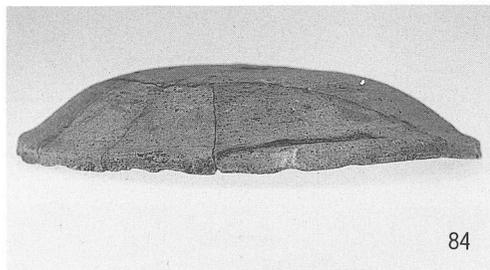
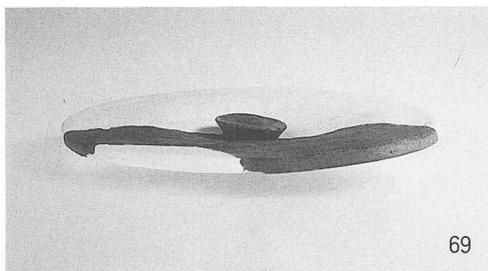
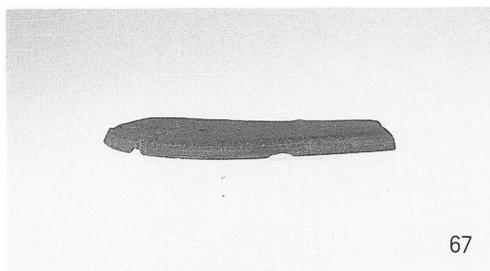
SB1・7の柱掘形



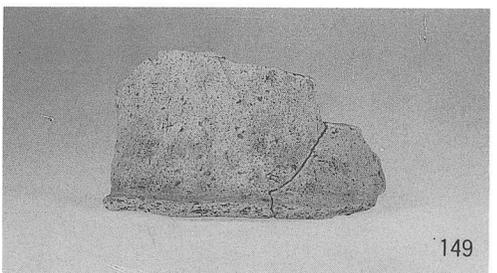
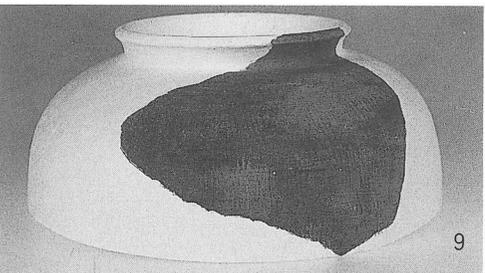
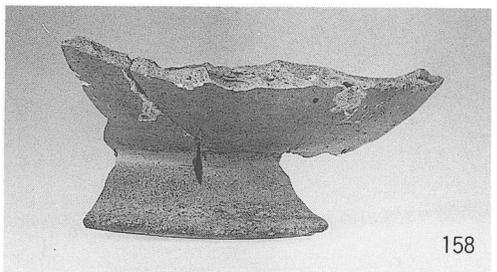
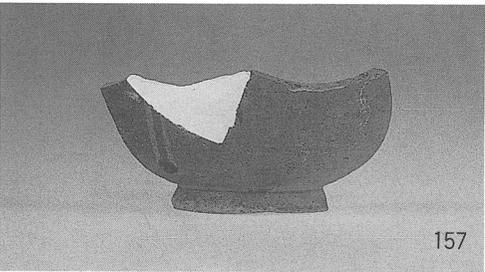
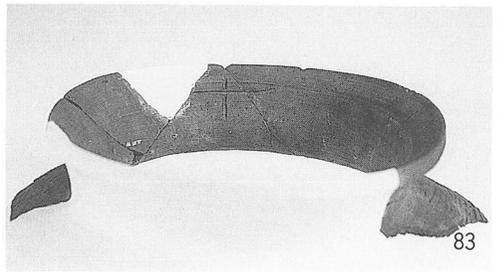
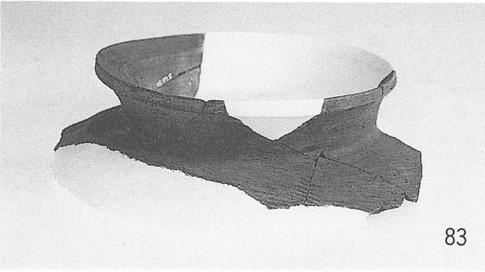
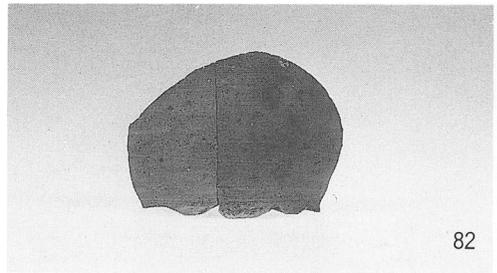
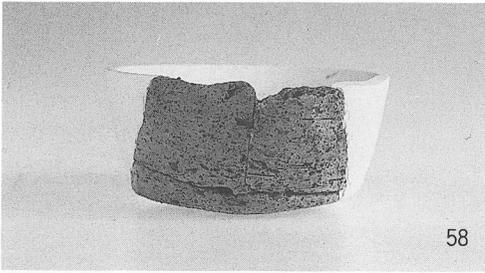
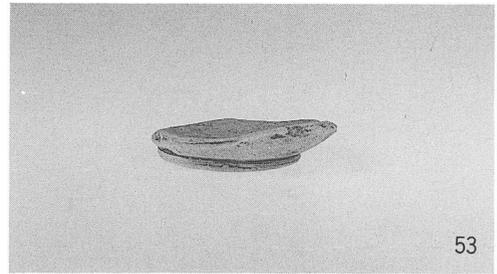
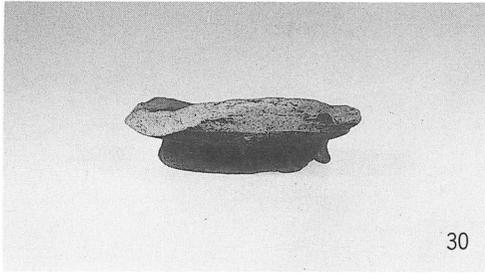
7区 包含層出土遺物



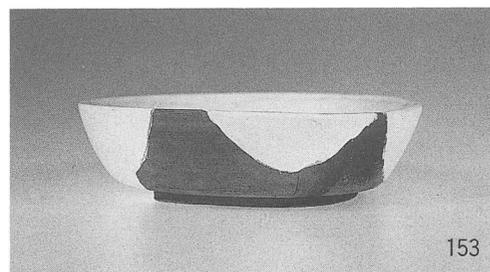
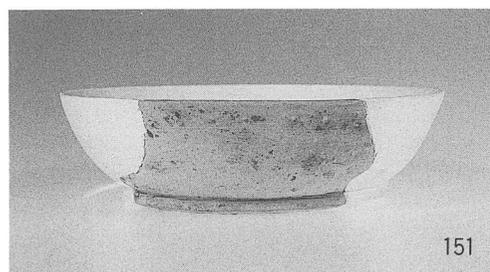
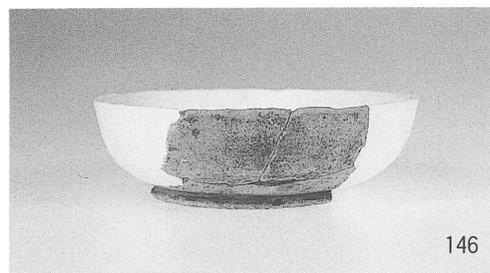
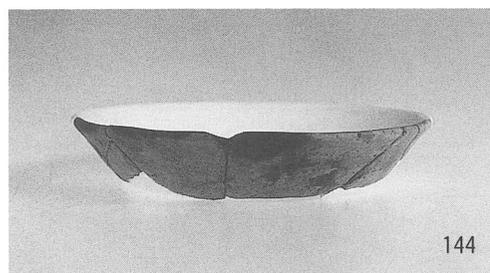
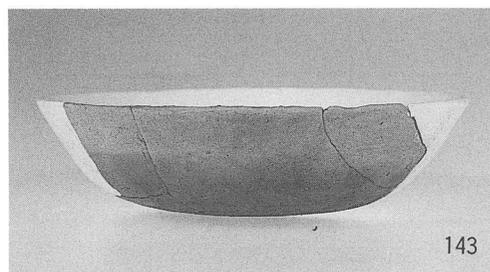
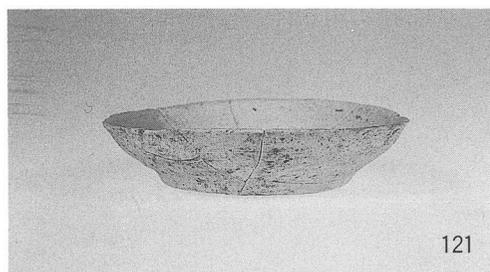
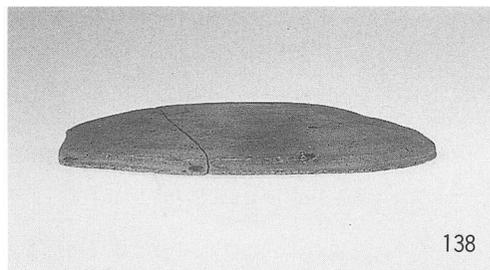
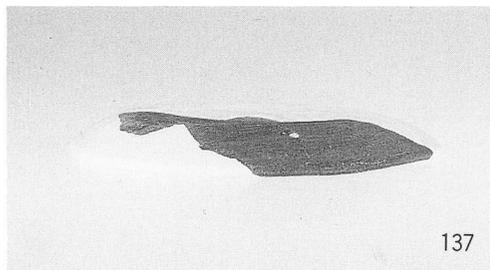
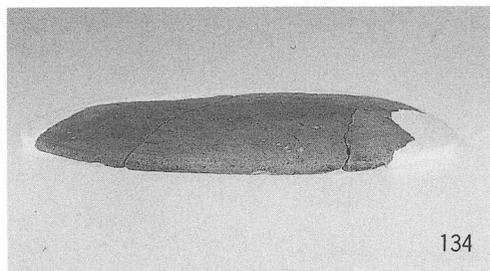
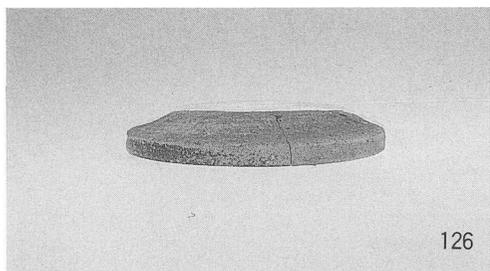
7区 SB 1・3・6 遺物出土状態



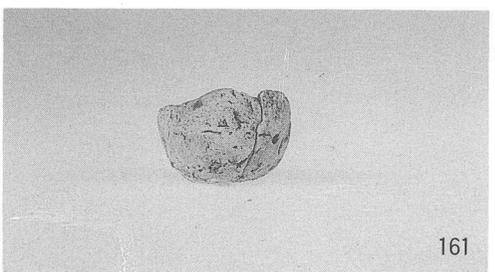
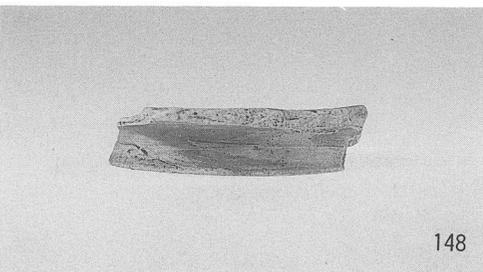
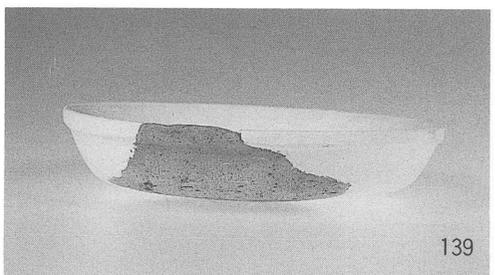
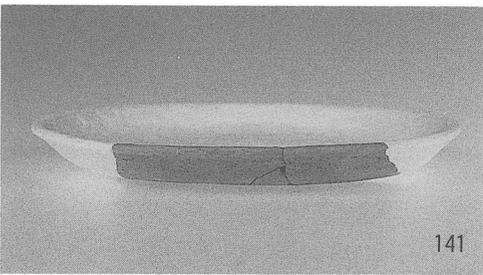
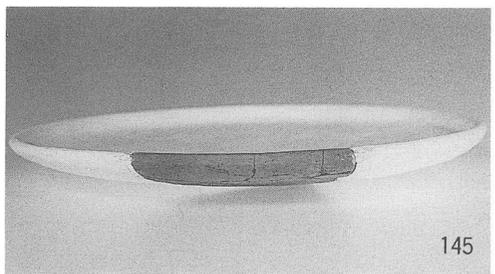
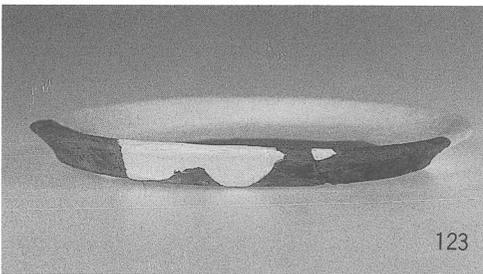
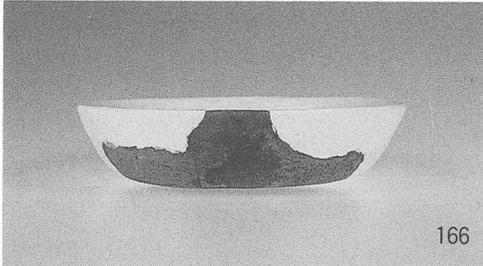
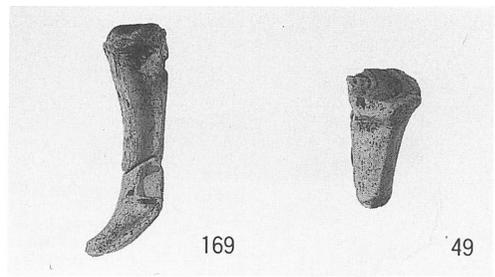
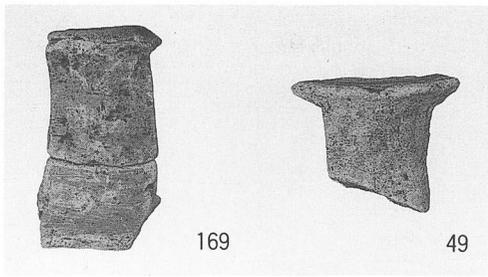
1・3～6区 包含層出土遺物



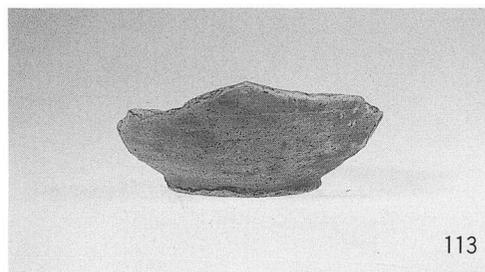
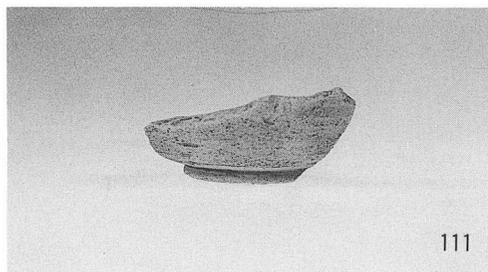
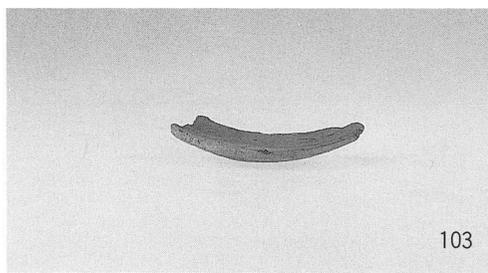
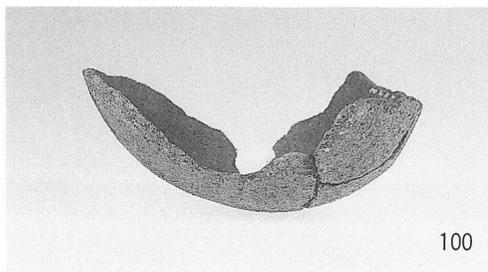
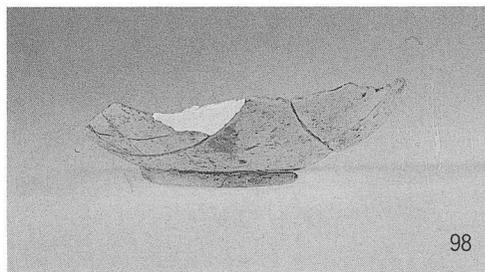
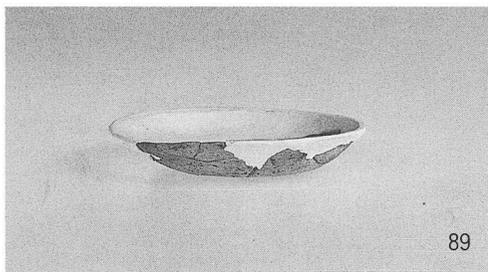
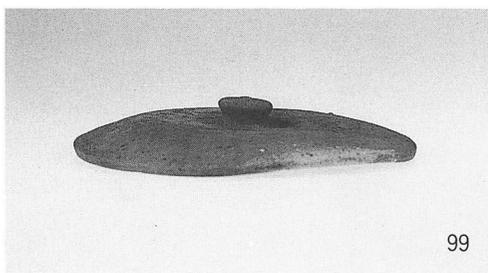
1・4・5・7区 包含層出土遺物



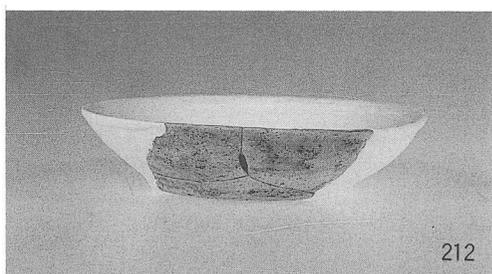
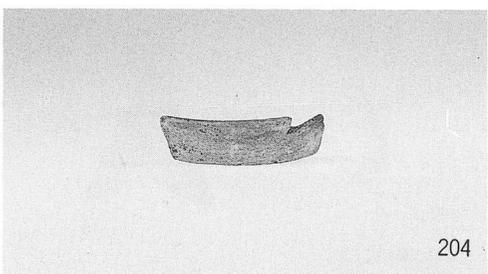
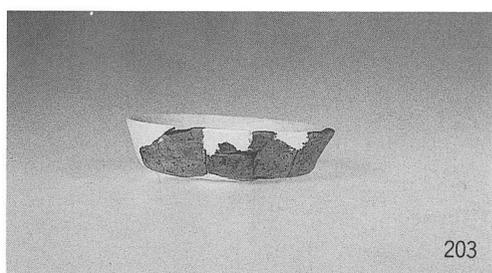
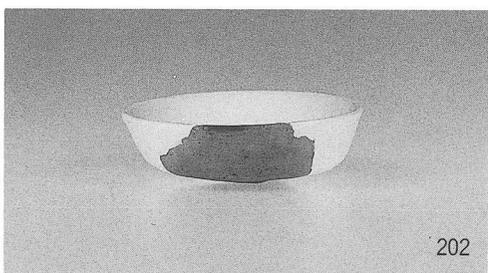
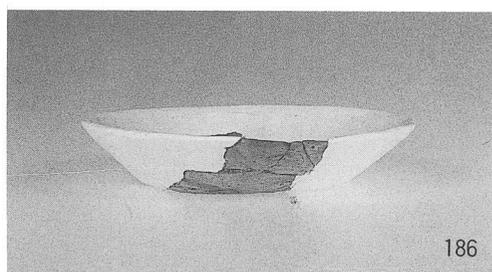
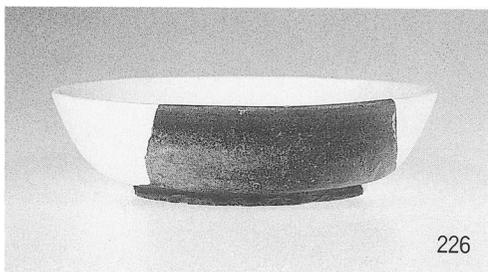
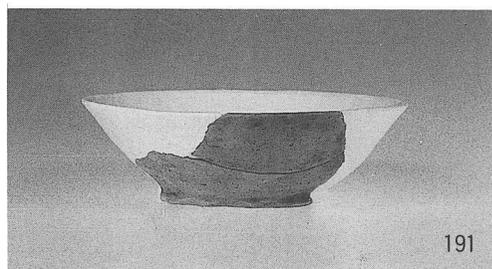
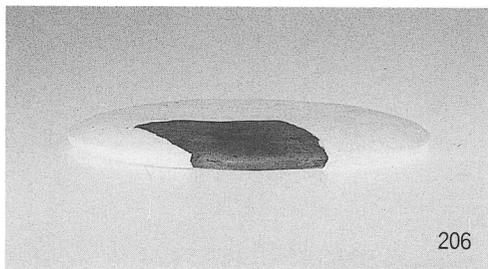
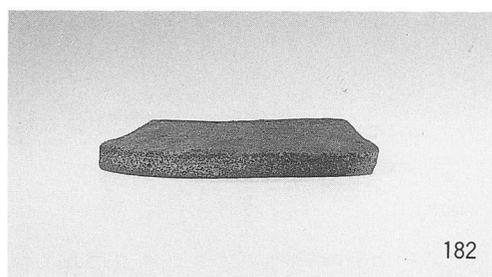
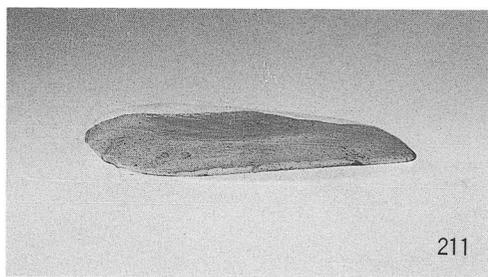
7区 包含層出土遺物



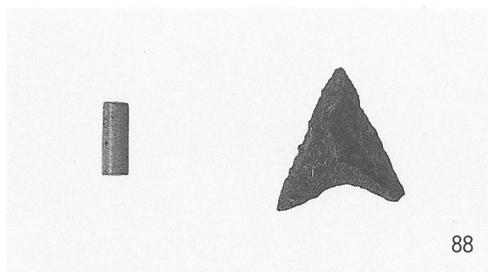
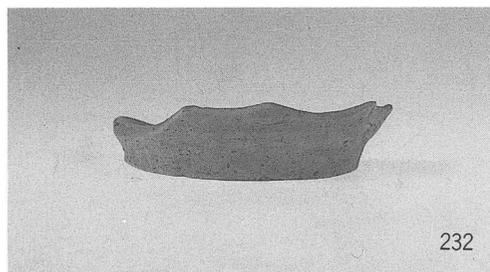
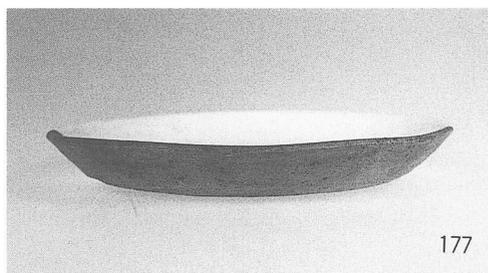
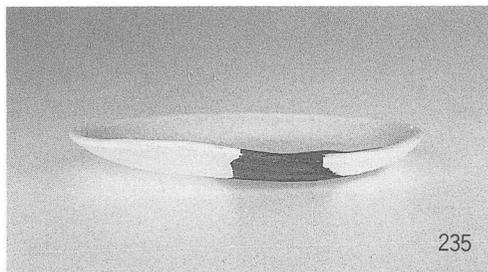
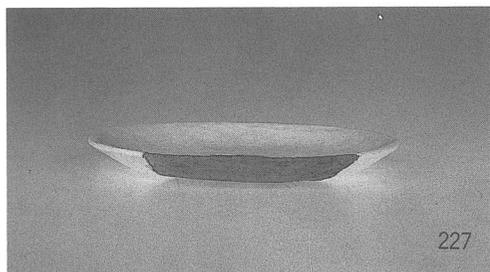
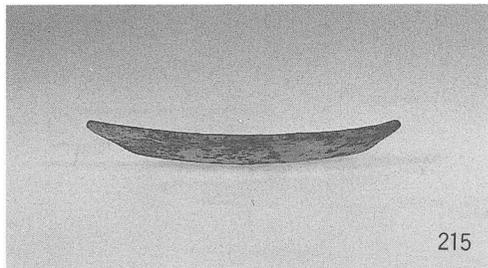
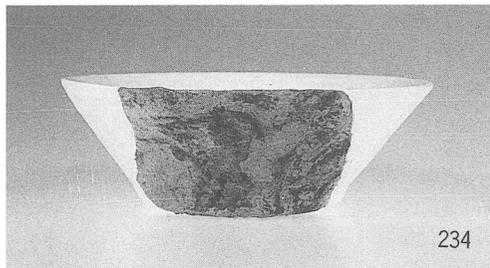
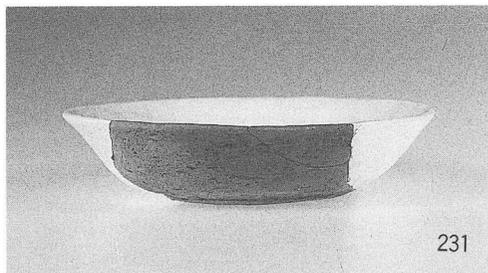
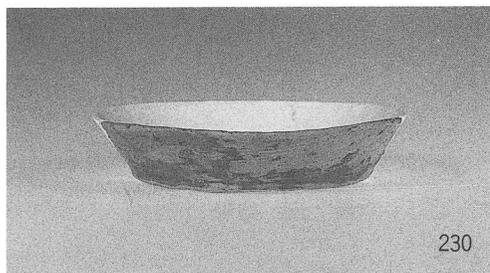
5・7区 包含層出土遺物



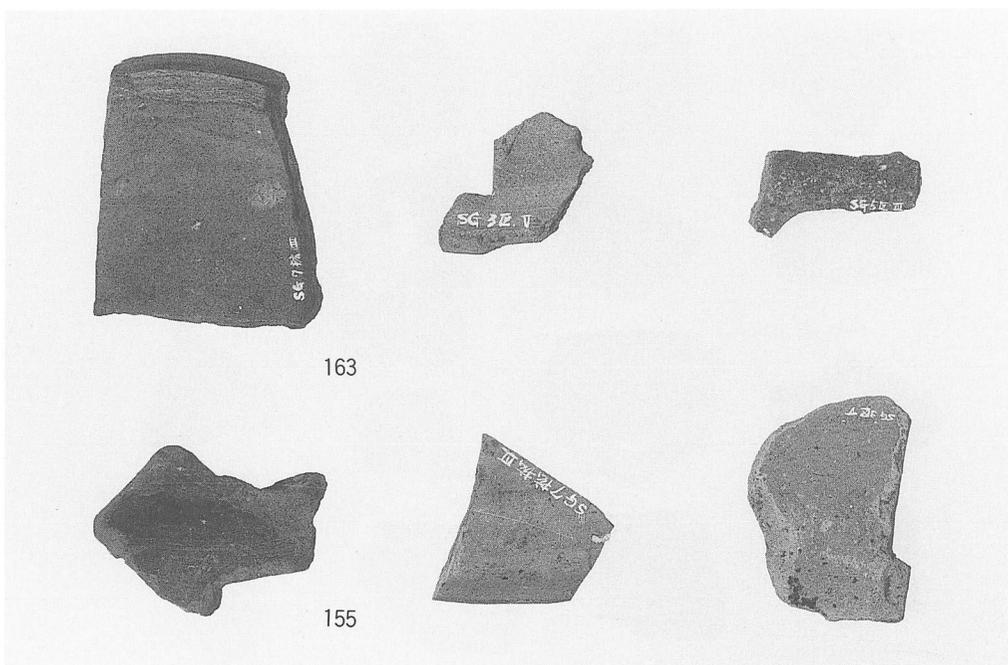
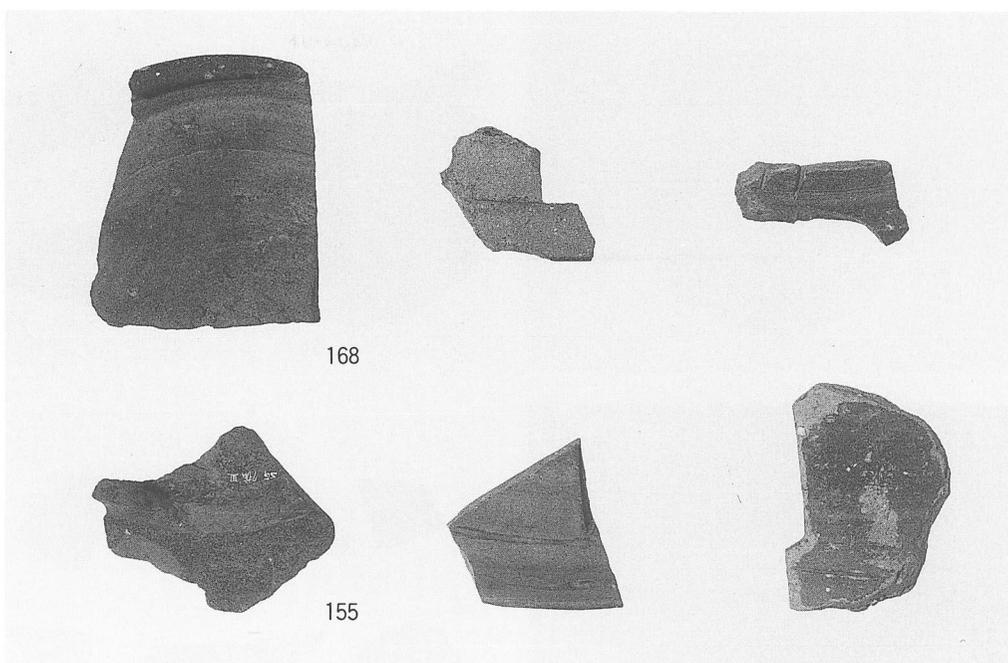
SB10, SK 4・5, SD 7・7', P 3 出土遺物



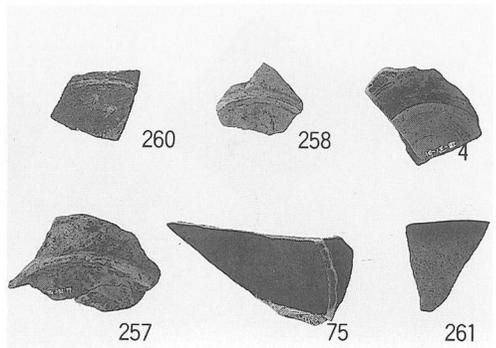
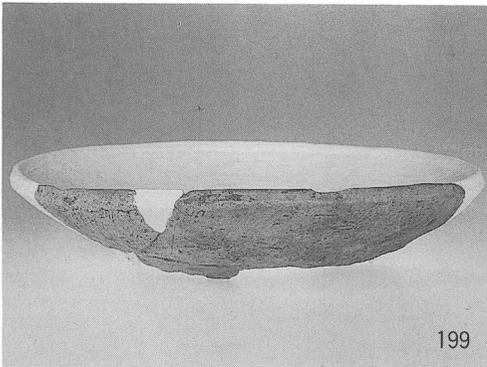
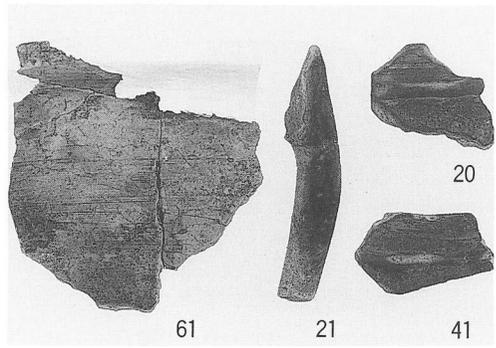
SB 1・2・5・6, SD23 出土遺物



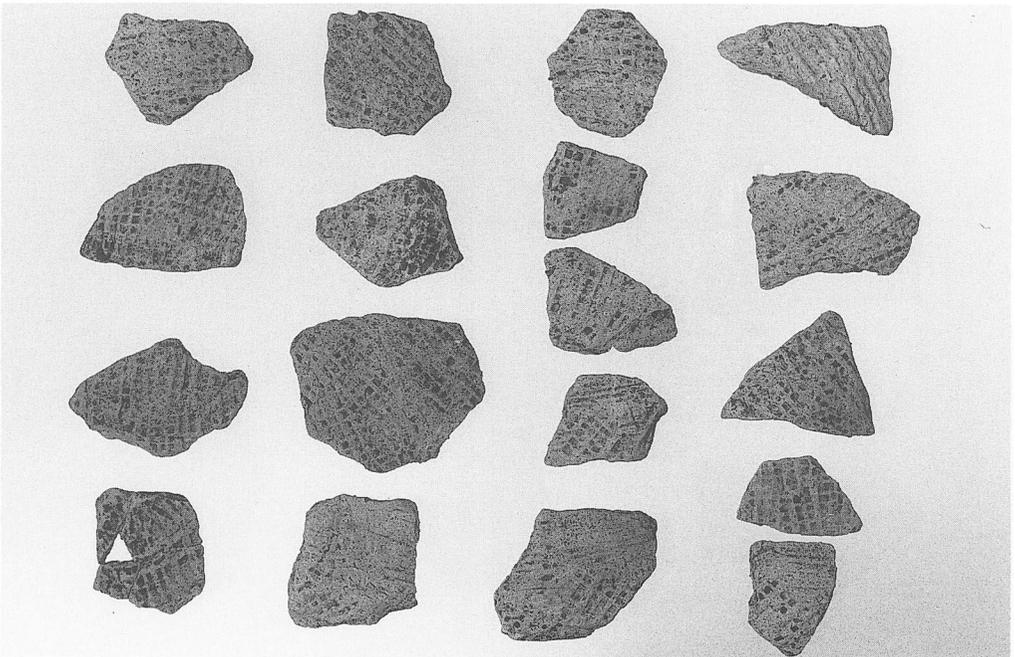
5区包含層, SB1, P7・17・20 出土遺物



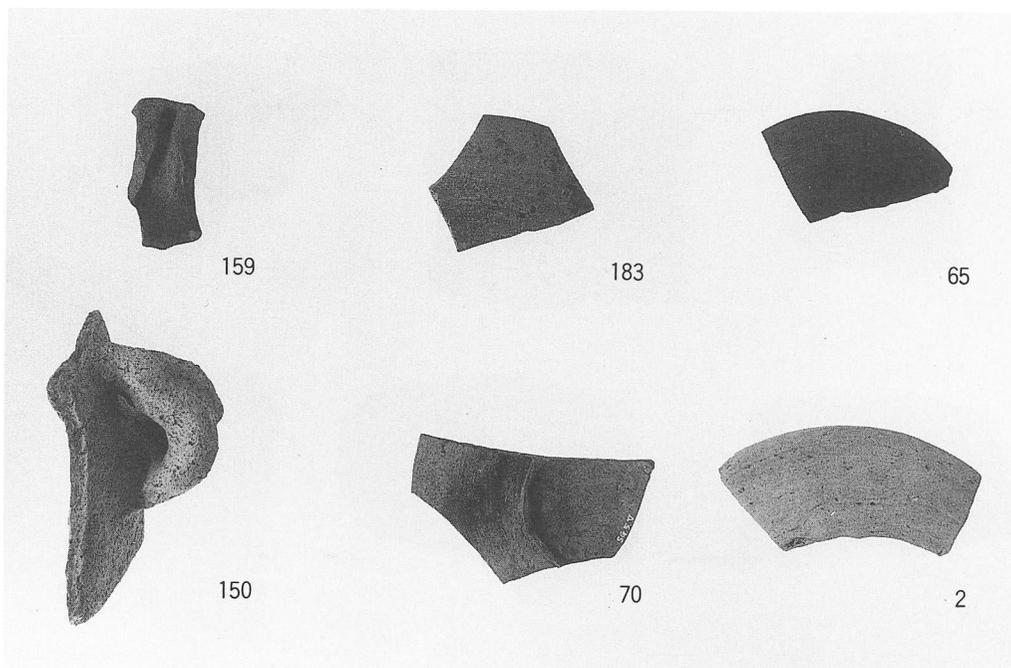
円面硯



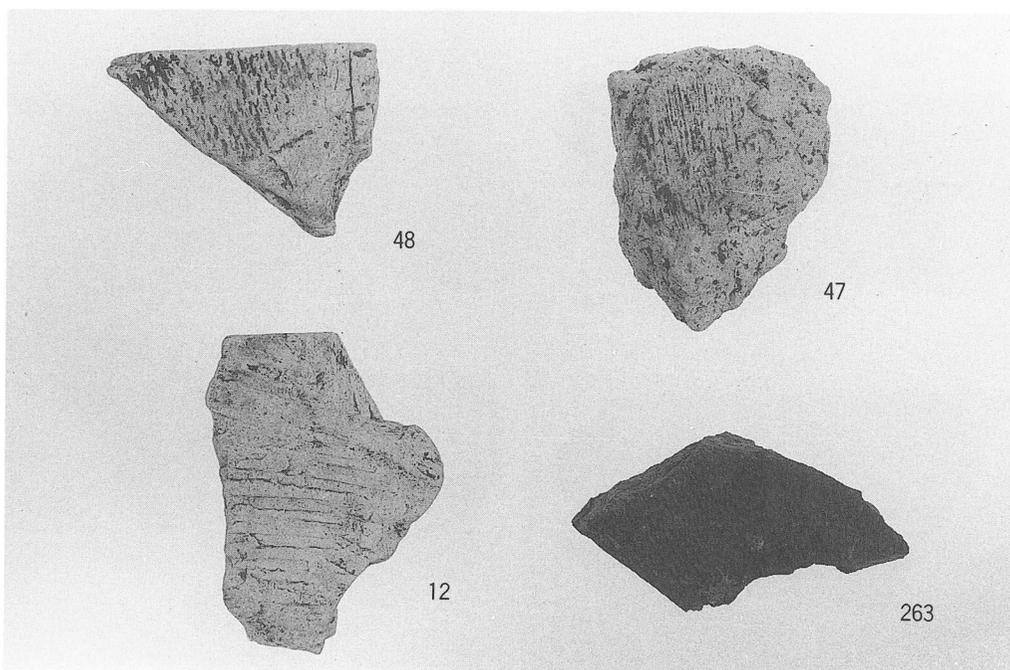
2・3・5・7区 包含層, SB 2・3 出土及び表採遺物(258・260・261 黒色土器)



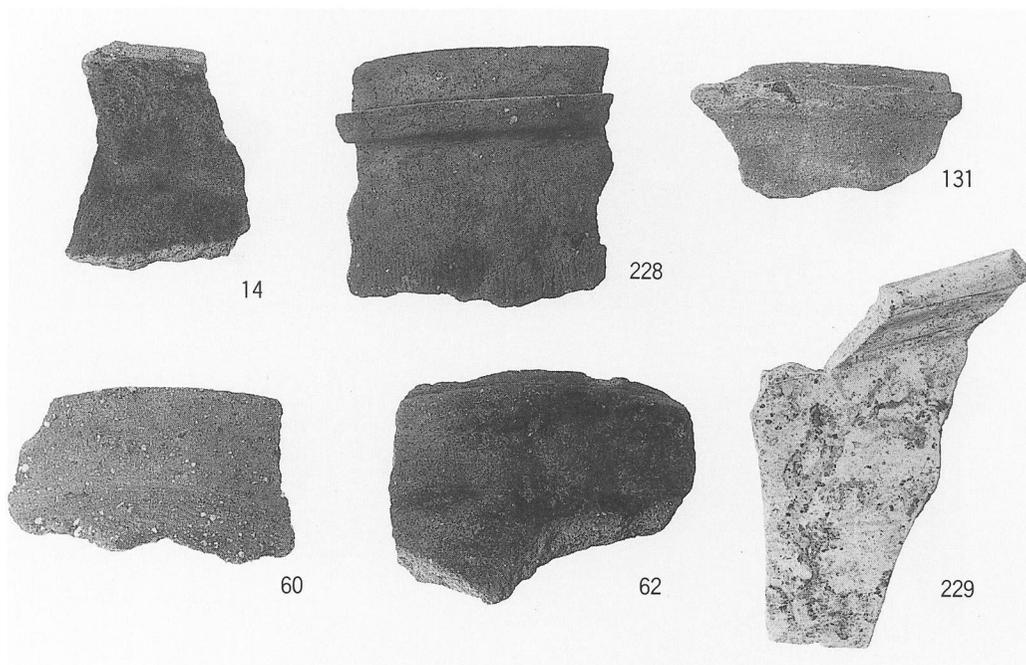
土師器片



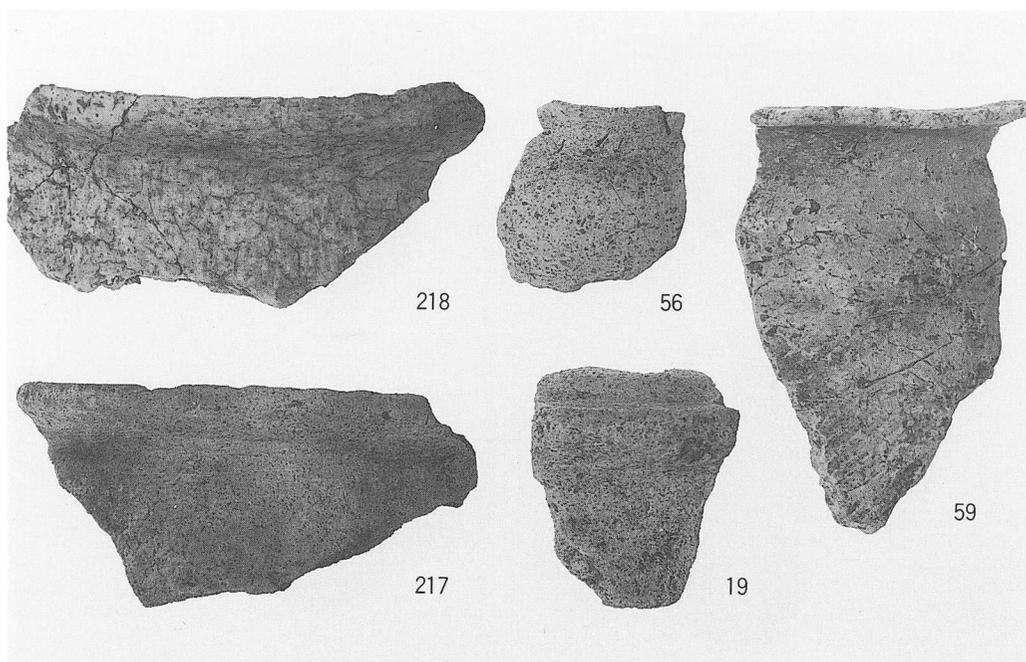
1・5・7区 包含層出土遺物(70転用硯)



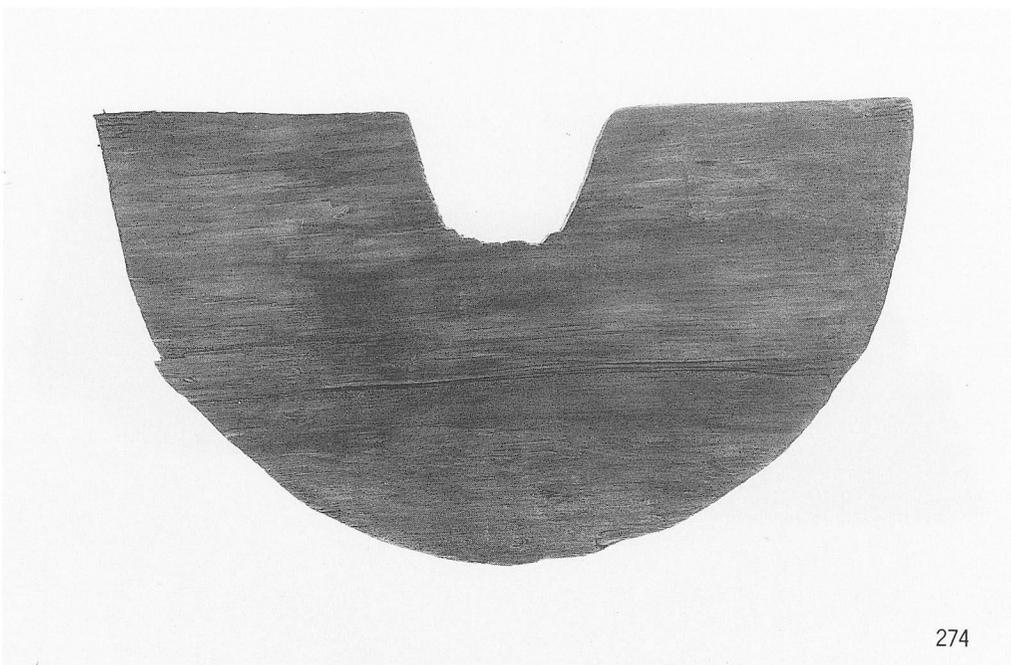
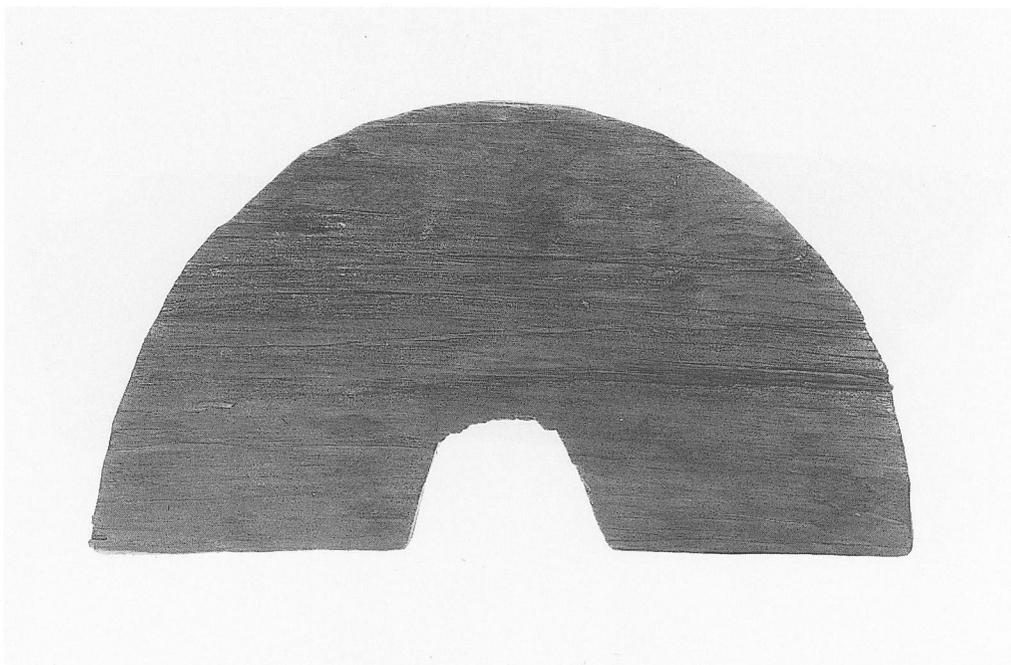
瓦



土師器甕・羽釜



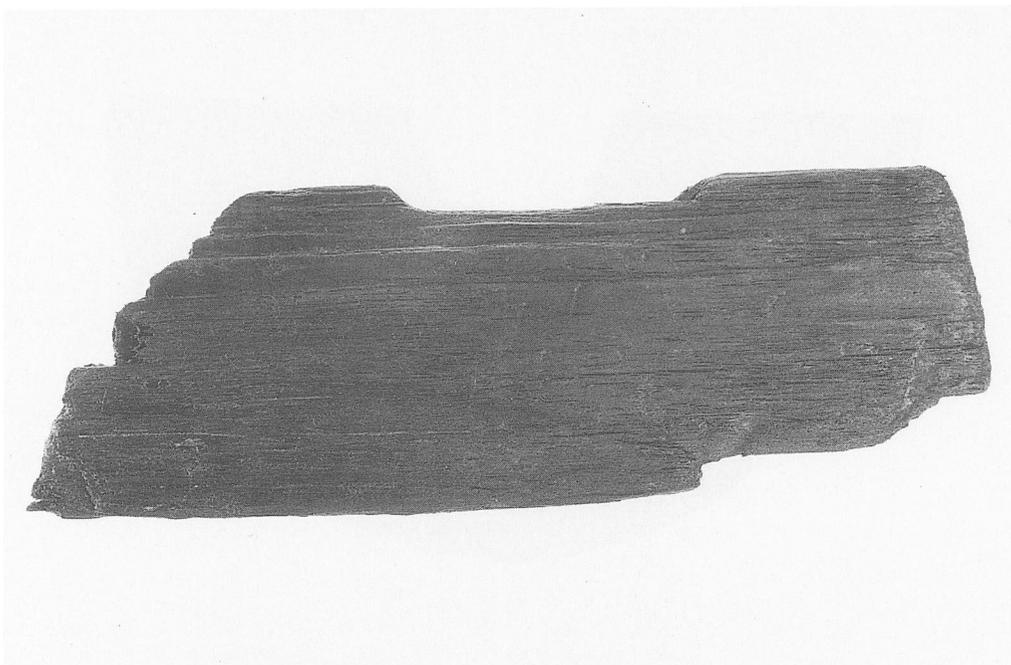
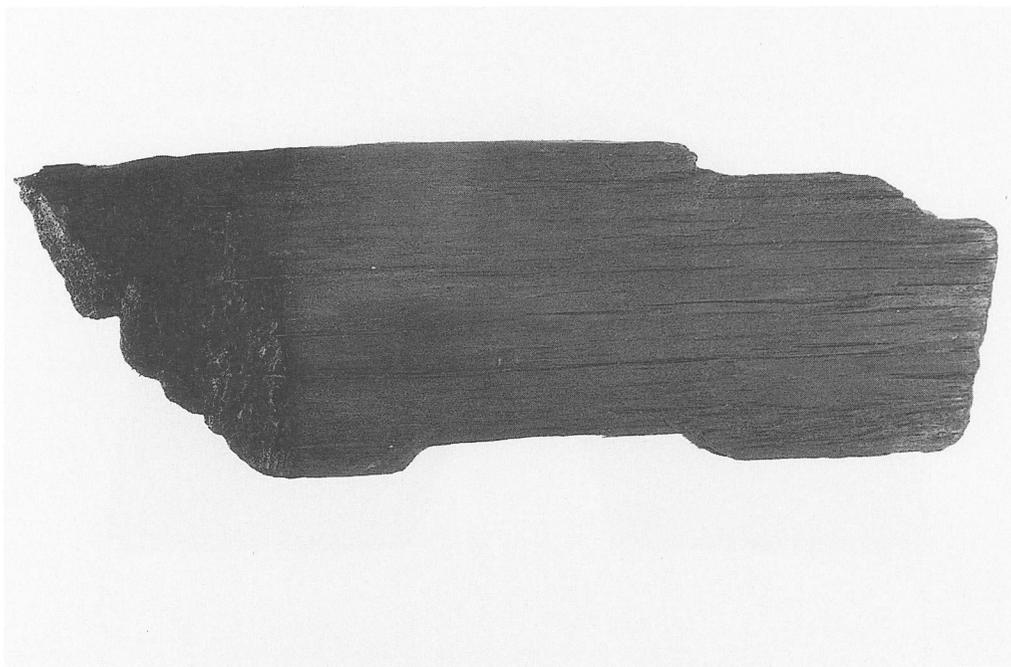
土師器壺・甕・羽釜



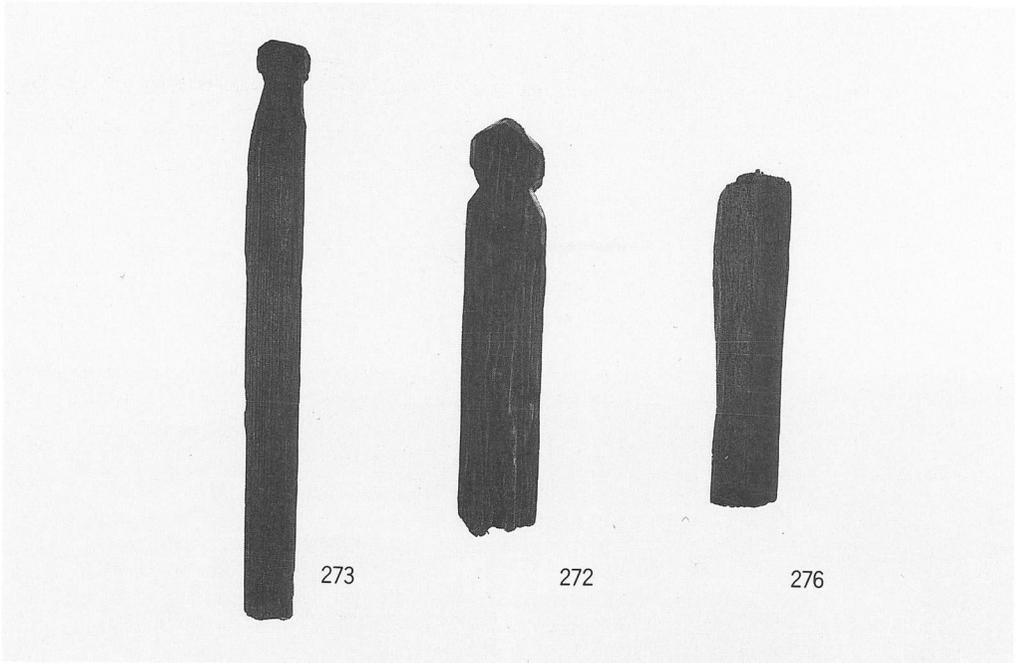
274

SB 2 - P 6 礎板

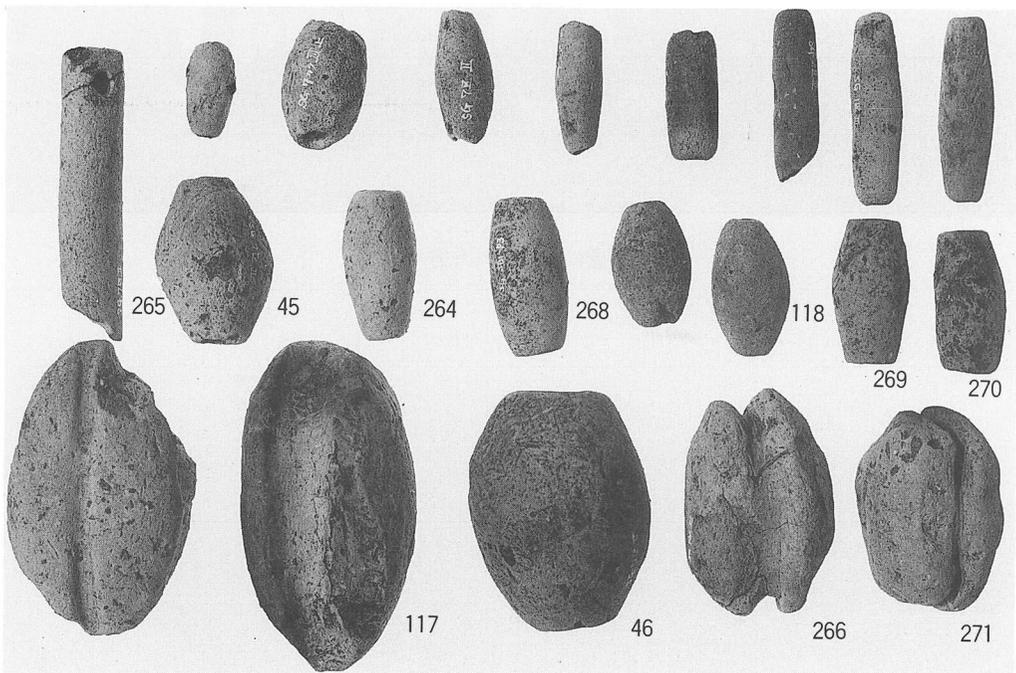
P L 34



SK 5 板状木製品



付札状木製品及び不明木製品



土錘



調査に協力された方々

曾我遺跡発掘調査報告書

(野市町埋蔵文化財
調査報告書第2集)

1989年3月

編集 野市町教育委員会

発行 高知県香美郡野市町西野2706

電話 (08875)6-0511

印刷 西村謄写堂